

---

# 小さな出会い。 本当の居場所

NANA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小ちな出会い。 本当の居場所

### 【著者名】

ZZコード

ZZ5542A

### 【作者名】

NANA

### 【あらすじ】

落ちてしまつた事は簡単でとてもスピードが早い。大切な物は失つてから気がつく。思春期の少女を描いた物語

## 第1話・春

私・梓<sup>あずさ</sup>16歳この春高校入学。。。

『行つてきます』今日から新しい高校生活開始!!『ちょっと待つて写真・写真!』うちの定番である。なにかと行事ごとに写真を撮る家族での記念撮影。小中学入学・卒業兄の成人式・この日も私は真新しい制服に身を包み家族と写真を撮り家を出た。

今日は同じ中学で高校も同じ友達?久美子と浩子と駅で待ち合わせをし一緒に学校まで行くことになっている。2人とは中学で特別仲が良かつた訳じゃないけど・同じ中学から行くのが私達3人なので、自然と学校の登校は一緒に…ということになった。

学校は、電車・バスを使って片道40分ぐらいのところにある。

## 第2話・新たな気持ち

登校途中電車の中・初めての環境の変化に私達3人は嬉さと不安で少し緊張していた。

『3人クラス一緒にいいね』明るく久美子が言い出した。それに乗つて私と浩子も声を揃え『そうだね』と言つた。久美子の話しきつかけに行き道私達はこれから高校生活の楽しみを沢山話した。

久美子の予想はハズレ…私達3人は別々のクラスだった。1～7クラスあつて、私は1組。久美子は2組。浩子は頭が良く進学クラスの7組だった。

そろそろ学校にもなれ・それぞれ新しい友達も出来て、少し地味な感じで、3人よく似たタイプだけど、もともとそこまで仲が良い私達じゃなかつたから・3人一緒に登校・下校はそう長くは続かなかつた。

私は同じクラスで席が後のミホと仲良くなつた。背が小さくいつもニコニコした少し大人しい可愛らしき。ミホとは帰り道が同じ方向で一緒に帰るようにもなつた。他にも友達も出来て、こうして楽しい高校生活はスタートした。

入学して間もなくしたころ帰ろうと教室を出たところで『すいません。』『…ん？…男…私じゃないよね！』『すいません！』私かなあ…・後を振り返ると同じクラスの男の子がモジモジして立つていました。その男の子が漂わせる空気は、そんな場面を知らない私にも分かつた。告白だ！『なに？』私は内心ドキドキだが、冷静を装つた。『俺、同じクラスの森下孝明だけ…』私は軽く『うん。』とだけ言つた。

森下のことは知つていた。

クラスでお調子者で目立つた存在だから、でも私のタイプじゃ

ない。『俺・・俺梓ちゃんの事気になつてつて・上手く言えないんだけど・・今日の夜電話していい?』『うん』私はまた軽く返事をした。つて駄目じやん!! そんなの! 何軽く返事してんの! 私は次森下から発せられる言葉の前にいろいろ考えた。家に電話されて親に出られたら大変だし、かといつて今更電話止めてとも言えない。

『電話番号おしえてくれる?』また軽く『うん』と、最近買つてもらつたケータイの番号を教えた。端からしたらタイプじやないなら断ればいいつて思うかもしけない。でも、告白されることが初めてな私。森下と付き合う気はないが、私の事は好きでいてもらいたいつて思った。私の事を好きでいる人がいて欲しかつた。それは、森下じやなくて誰でもよかつた。それともう一つ、そのとき気付いたが、なぜか私は見栄を張つていた。男に慣れているという。これがきつかけだつたのかもしけない。私の心の何かが崩れしていくのは。

## 第2話・新たな気持ち（後書き）

呼んでもらってうれしいです（・\_・）  
これからもどうぞつづけますのでよろしくお願ひします（ー）

森下からの告白の日の夜、やはり、森下から電話がかかってきた。でも私は出なかつた。出れなかつた。出て森下の告白を言われて断る自信がなかつたから。もし、明日学校で

「電話したのに」

つて言われても、言い訳は出来る。私は逃げた。森下は私に声をかけたとき、すぐ緊張しただらう。あの気持ちを私は何も考えず踏みにじつた。

次の朝、やつぱり教室入るの戸惑つた。森下は朝早く、私より先に教室にいることは分かつていたから。教室に入り森下の方をチラつと見た。

森下は机に頭を押さえるように下を向いていた。

私が教室にいることを知つていてわざと私を見ないようく感じた。でも、なぜか私は森下のそんな姿を見て樂になつた。

『梓、おはよお』ミホだつた。『おはよ』『なんか元氣ないねえ。なんかあつた?』『なんでもないよ!』『そつか、なんでもないならしいんだけど。なんか悩みあるんだつたら言つてね』『ありがと。ミホ』私は昨日の森下との事をミホには言えなかつた。自分がずるい人間に思えて、そんな自分をミホには見せれなかつた。私はまだミホと親友にはなれてないんだとそのとき思つた。

私は自己主張が苦手で、今友達と呼んでいる子達にも本当の私を見せていない。

いろんな所でいろんな人に合わせているだけ。きっと・こんな私を友達と思つてくれている子はいない。ミホとは本当に仲良くなつた。休みの日はどちらかの家に泊まつて朝まで語り明かしたときもあつた。でも・ミホの中でも私は友達じゃなく、クラスメートなんじやないか。そんな事を考へるよつになつた。

森下との一件以来私は・モテるよくなつた。それと共に、女に目覚めたというか・中学のときから束ねていた髪をおろし・化粧も始めた。そのかいあつて・私の最初に求めた

「私を好きだという男」

は増えていつた。

同じ学年の敬もその中の1人だつた。

敬は学年でもトップクラスの美男子だつた。

あるとき、話したこともない別のクラスの女の子が声をかけてきた。由希とゆう可愛い派手な私が今まで関わつたことのない感じ・理想とした感じの女の子だ。

『5組の敬が梓ちゃんのこと気になつてゐたいで・アド聞いてきてつて言われたの。教えてあげてくれない?』私は迷う振りをした。何故なら、すぐ教えて良かつたのだけど、由希ちゃんに軽い女つて思われたくなかつたから。正しく言うと由希ちゃん達にだ。女は自然とグループを作る。由希ちゃんの属するグループは学年でも可愛い子達が集まつたみんなの目をひく目立つたタイプのグループ。しかもみんな気が強い! (想像)

私が今のところ属するグループはお洒落にはあまり興味のない・目立つことのない地味な子達のグループ。だから、敵に回したくないのだ。

私がアドレスを教えるのを悩んでいたら・『敬いい奴だし、カッコいいし、友達感覚で教えてあげて! お願い』手を合わせて頼まれた。ここまでされたら教えていいよね。『うん。じゃあアドレス』携帯のアドレスを紙に書いて由希ちゃんに渡した。『ありがとう』由希ちゃんは教室を出たすぐ敬のもとに行くだろう足取りだった。その日の夜、敬からメールがきた。ただいま。今日はアドレス教えてくれてありがと。梓ちゃんこれからいっぱいメールしよ!

ただそれだけのメールだった。私の期待と違ひ物足りなさがあったが、森下の時とは違い、何か敬とは・これから先がありそうな感じで楽しかった。

もうすぐ夏休みだ。。。

敬とメールや電話をして2ヶ月が経とうとしている。

私達は毎日何かしらのメールはしていた。

帰つたら ただいま だとか、寝るときは お休み など… で  
も、学校では一言も話したことはなかった。

私がいる1組と敬がいる5組は端と端にあり、私は自分のクラス以外に友達はないので、他のクラスに行くこともないし、もちろん5組に行くこともない。

敬もそうだった。

1組に来る事はなかったから学校で顔を会わす機会がめったにない。少し残念にも思うけど、実際はそのことにホッとしていた。メールや電話では普通に話せるけど、実際面と向かっては話せないと思ったから・・・今は外見は可愛いと言われるようになり、前より派手になつたが、中身は変わらない。男性経験がない。：というか、男の人と接したことがない私は、男の子とどう接したらいいのかも分からない。その上カツコつけて、どうしようもない。でも、嬉しい事もあった。

由希ちゃんが話しかけてくれるようになった。

今まで、廊下ですれ違つても挨拶もすることもなかった。由希ちゃん達グループが放つオーラはすごかつた。私もこの子達のグループに入りたい！など憧れもあつた反面この子達と話すことは絶対ないだろうと思っていた。それが、敬のこと以来、話すようになった。話しかけてくれるようになった。私はそれがすごく嬉しかった。そんな由希ちゃんの行動につられるように、由希ちゃんのグループの子達も私を見るようになった。

今まで、まるで私が空気の存在のように、すれ違うときも見もしなかった。そんな彼女達が、私を見るようになった。由希ちゃんが

私と話すこともあり、私に笑顔をくれる子もいた。ほんとに嬉しかった。敬と連絡とるようになつたことより、由希ちゃんが話しかけてくれること、学校で目立つている彼女達が笑顔をくれることの方が嬉しかった。

## 第5話・初めて

明日から夏休みという口、敬からいつもと違うメールがきた。  
明日から夏休みやなあ。明日、梓ちゃん予定ある? なかつたら、  
遊びよ! 私はキタツとばかりに嬉しかった。すぐに いいよ  
つて打ち返した。すぐにメールは返ってきた。明日俺バイトだか  
ら、終わってからでもいい? 18時に終わるから、それからでいい  
? 私は焦った。今まで私は夜外出をしたことがない。ミホと遊び  
ときも学校が休みの日に昼間遊んで18時には家に帰っている。私  
の両親、母はとても厳しく夜外出することを絶対に許さない。ミホ  
の家に初めて泊まりに行くとも・許してもらえなかつた。お母さ  
んの知らない子の家に泊まりに行くなんて絶対駄目! つて感じで、

私はミホに電話した。『ミホ。お願ひがあるんだけど……』『どうし  
たの?』『私、最近気になる人が出来たんだけど……』『えつ! ? ほ  
んと? 早く言つてよお! で、どんな感じ?』『その人に明日の夜バ  
イト終わつてから遊びよって言われて行きたいんだけど……』と、まで  
言つたところでミホは私の気持ちを察したように『そんなの、梓のお  
母さんが許さないよねえ。おばさんに、うちに泊まるつて言つたら  
? 私明日家いるし、おばさんから電話あつても大丈夫だし!』ほ  
んとミホはいい奴だ(涙)『ミホほんといいの?』『いいよ・いい  
よ! 私も梓に負けてらんないな いい男見つけなきや 梓頑張つて  
ね! でもこれからはちゃんと報告してよ! ? 私達友達なんだから』  
『うん。ありがと。絶対報告するから』と、電話を切つた。

ミホに後ろめたさを感じた。最近の私は、気持ち的にミホより由希ちゃんを優先していた。地味なミホといふのを恥ずかしいと思うときもあった。なのに、こんな時はミホを頼った自分、ミホを利用した自分…そんな私を友達と黙つてくれたミホに…ミホも敬の事は知つてゐると思う。なのに相手が敬といふことをミホに言わなかつた。絶対報告するといつたのに…そう思いながらも明日敬と学校以外で初めて会つことに浮かれていた。

母もミホの家に泊まりに行くこと（嘘）を許してくれた。

敬にも バイト終わつてからでいいよ と返事をした。待ち合わせの時間も場所も決めた。私は浮かれていた。

- …初めての夜の外出
- …初めて男の子とデートに…
- …初めて男の子とデートに…
- 友達を利用したこと

初めて親に嘘をついたことを忘れるへりつた。

## 第6話・敬（前書き）

恋愛物ほくなりました。

今日は敬と会つ日、初めて夜外出する日・・・  
敬のバイトが終わるのが18時。親に夜出歩くの禁じられている私はお昼過ぎにミホの家に泊まりに行く振りをして家を出た。まさか私が嘘をついて男と会うことなど知らない母。。。

敬と会うまでには時間がかなりある。家を早く出なくてはならないと分かっていた私は地元の友達と会う約束をしていた。咲美さきみだ。咲美とは、小学校・中学校一緒に、唯一私が親友と呼べる子だ。咲美にはなんでも話せる。私の汚い部分も。。

『梓』咲美がきた。私達はいつも地元のマク〇〇ルド集合で何時間も話して時間を潰す。

『梓久しぶり

』

『久しぶり

』

『ちょっとー昨日電話で言つてたけど、今日夜男と会つの?』

『うんーそうなんだ!』

咲美には昨日大体敬のことを話した。

『いいなあ。高校生活楽しんでる感じじやん

』

『まあねえ』私は茶化してを見せた。

『でもさあ。おばさんに何て言つたの?うちの親は絶対許してくれないよ』

『あ

咲美の親もうちと張るぐらい厳しい。

『そんなの正直に言えないよ!高校の友達の家に泊まるつて言つた。友達にも了解済み。』

『えー いいなーいいなー!』

と、私の高校生活の経緯など、咲美の高校生活の話しなどしているうちに私のメールがなつた。

敬だ!

今バイト終わった。梓ちゃんもう家出れる?

敬は、私の親が厳しくて親に嘘をついて敬と会う事など知らない。そんなこと言いたくなかった。

出れるよ。今から向かうね！

私がメールの返事をしていると、

『そろそろ行きますか？』

咲美はイタズラっぽく笑い言った。

『うん。付き合わせてごめんね』

『いいの。いいの。こんなこと、これから私も梓に頼むかもしけないじやん！』咲美はいい奴だ。

『そのときは、喜んで！』

咲美と別れ敬との待ち合わせ場所に向かった。電車に乗り敬に言われた駅に向かう。私が乗った地元の駅から30分ぐらい走った駅だった。

待ち合わせ場所に到着。敬の姿はない。

と、そのとき、一台のバイクが私の前に停まつた。敬だった。

『乗つて』

『…えつ…』

『いいから、後乗つて』

『…うん…』

私は分けも分からぬまま敬のバイクにまたがつた。

『ちゃんと俺に捕まつてて』

と言つてすごいスピードで走り出した。初めて乗つたバイク・・・

気持ちいい・・・だたそう思った。

10分ほど走つたところでバイクは一軒の家の前で停まつた。『降り

て』

バイクを降りその場に突つ立つていた。

『来て』

私は敬に言われるがまま、敬の後を歩いた。

『ここ・俺んち。入つて。』

『お邪魔します』

私は聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で言った。

敬は聞こえたのか『親いないから』

敬の家は父親はいない。敬が小さいときに離婚して、それからは会つてないそうだ。母親はスナックを経営しており夜はいない。いつも朝まで帰つてこないようだ。

これは、前に電話で話したときに聞いていた。敬の部屋に案内され『散らかってるけどその辺に座つてて、俺風呂入つてくるから』私は入り口の入つてすぐ横の所に座つた。：初めての男の部屋：敬は散らかつてると言つたが、それでもなかつた。

12畳ぐらいの広さの部屋、ドアはちょうど部屋の角にあり、入つて右奥にベッド、その向かいにテレビ、その横に小さな冷蔵庫、壁には友達との写真がたくさん張つてある。何人かが楽しそうに笑つている写真。学校の友達の写真はなかつた。その写真すべてが夜撮つた写真だつた。部屋の中央にはテーブル、テーブルの上にはタバコの吸い殻が山積みの灰皿。敬タバコ吸うんだ…敬をすごく大人に感じた。

バイトをしている敬。

バイクに乗る敬。

タバコを吸う敬。

親に気を使うことなく夜出歩く敬。

私は住む世界が違うんだ。でも、そんな敬が選んだ私。

私も敬がいる世界に行くことできるよね？私は今いる世界から出たい！

敬がいる世界に行きたい！

『あ～。さつぱりしたあ。』

敬が戻つてきた。髪が濡れている。

敬の顔を初めてじつと見た。

やつぱりカッコイイ。

『梓ちゃんなんか飲む?』

『いい。』

私は緊張のあまりそっけなく答えてしました。でも敬はそんなことにしないように

『すぐ用意するからどこか出かけようか?行きたいところある?』

『特にないから敬君にまかせる』

『分かった。ほんどどこでもいいの?』

『うん。ほんとどこでもいい』

ほんとにどこでも良かった。だつて、夜どこに行つたらいいのか分からぬから。今私は敬といれるだけで幸せだった。

敬の用意はすぐ終わつた。

『じゃ、行こうか。』

またバイクにまたがり、向かつた先はファミレス。。。

『お腹空いたし、まず食べよ!』

ご飯も早々にすませ、またバイクで走りだした。

今度は結構長い間走つた。私はその場所がどこかも分からず、ただバイクに酔いしれていた。・・バイクつて気持ちいい!何もかも吹つ飛び感じがした。

次にバイクが停まつたのは、海だつた。夏の夜の海。。。

最高な気分だ。。。

2人並んで海岸に座りしばらく黙つて海を眺めた。

今までお喋りだつた敬が急に黙り込んだ。私はなんだか妙な空気を感じて耐えられなくなり、今まで黙つていた私が話しだした。

『敬君バイクの免許持つてたんだね。凄いねえ。』

私は何を話していいのか分からず、無難に話したつもりだつた。

『これ俺のバイクじゃないんだ。先輩のバイク借りたんだ。免許も持つてない。無免許で運転してる』

敬の言葉に返す言葉が見当たらず

『そなんだ』

としか返せなかつた。また2人は黙つた。私は返した言葉に後悔した。

(「そりだよね。不良は免許なしでバイクにも乗るんだよ）

私の真面目さ・凡人さがバレてしまつた気がして、恥ずかしくなつた。

私はもつと敬と話したかつたけど、言葉が見つからず、海を見るしかなかつた。敬は何を考えているのか、敬も黙つて海を見ていた。

どれくらい時間が経つたか分からないうが、敬が口を開いた

『そろそろ行こうか』

私はショックだった。敬とろくに会話もしていないのに、もうサヨナラなんて…

私は親には泊まると言つて出てきたので、家に帰ることは出来ない。夜はミホの家に泊まらせてもらつことになつていた。

『うん』

またバイクにまたがつた。

待ち合わせをした駅に着いた。私は帰りたくないなつた。でも、『帰りたくない』と言えない。言つたときの敬の反応が怖かつたから。私はバイクを降り

『今日はありがとう。じゃあね。』

敬に言い駅の改札に向かつた。なんだか最後気まずい雰囲気だつた。私は後悔した。

今日敬と会うべきじやなかつたのか…

私はつまらない女と思われた…

もう敬に嫌われた…

何故もつと素直に今日会えた嬉しさを出せなかつたのか…改札に向かいながら思つた。涙が出しちだつた。

『梓ちゃん』

後を振り返ると敬が走つて來た。びっくりした。

『どうしたの？』

『梓ちゃんまだ時間ある?』

『あるよ』

『梓ちゃんともっとみたい』

涙で前が見えなくなつた。でも、意地で流すことを耐えた。

またバイクにまたがり、敬の腰に手を回した。私敬のこと好き。そう思いながら、バイクは敬の家に着いた。

敬の家、誰もいない家、数時間前にも来ているせいか、今度は躊躇せず敬に続き家に入った。

敬の部屋。また私は入り口のすぐ横に座つた。敬はベッドに座りテレビを付けた。

『そこによるとテレビ見れないよ。こっち座りな

敬は自分の隣をとんとんと叩いて言つた。

『うん』

敬の隣に座つた。テレビじるではなかつた。

『さつきはいめん。ひきとめて。なんか俺緊張しててうつまく喋れなくて…でもまだ梓ちゃんと一緒にいたい思つて。迷惑だつた?』

私も一緒にいたい。そう心の中で思つた。

『…大丈夫』

私の口から出した言葉はこの一言。心の中の想いを口に出すのが恥ずかしかつた。

私は馬鹿だ。

『…いめん。』

敬は自分が無理やり連れ戻してしまつたように思つたのだろう。私は一緒にいたかつたから じこまでも・恥ずかしさを越えることはできず、言えなかつた。

私はこの雰囲気を変えたくて違つ話しに切り替えた。

『敬君・学校楽しい?』

また私は訳分からぬ話をしている。

そんな他愛のない話に敬は付き合ってくれた。そんな話の中でも敬は話を戻そうとしたときもあった。

でも私は話しが敬に渡さなかつた。敬の話に素直に答えられないから。自分の気持ちを恥ずかしくて言えないから。

私は逃げた。

敬は諦め私の他愛もない話に朝まで付きあつてくれた。陽が明るくなり、私達は話すこともなくなつてきいていた。でもそのときには、敬は自分が話そうとしていた事を話すことを諦めていた。

私達は楽しかつたというより、お互い…違う。敬は疲れた空気を流していた。

敬とは終わつた。私の直感だ。

私は虚しかつた。自分のせいなのに。

その場にいる意味を持たなくなつたような私は、いたたまれなくなり『そろそろ帰るね』

『うん。送るよ』

敬と待ち合わせをした駅。

敬に引き止められた駅。

敬を好きだと思つた駅。

またその駅にきた。

今度は引き止めてはくれない。絶対に。

『じゃあね。ありがと』

前と一緒のセリフ

『ありがと』

敬からの一言。

私は改札に向かつた。

数時間前この辺りで敬の声がした。でも、今度聞こえたのはバイクが走り去る音・・・

虚しさだけが残つた。

私は帰りの電車に乗つた。

## 第6話・敬（後書き）

メッセージ、評価お願いします。  
参考にしたいです m(—\_—)m

・・チャララン

携帯が鳴った。

『はい』

『梓?』

ミホだ

『昨日どうだったの?夜うちに泊まりにくるのかと思つてたのに、連絡ないから心配したんだよ!もしかして・・・彼の家にお泊まり?』

ミホは無邪氣に言つた。

『違うよ!朝までぶらぶらしてただけ!朝帰つてきたの。ミホに連絡しなきやつて思つてたけど、携帯充電切れで・・・』めんね。』

『そりなんだあ。・・・で、彼とはどうだつたの?』

『ん~。なんか思つてた感じの人と違つたつて感じかな!』敬と先がないことを確信していた私は強がり、嘘を言つた。好きな人に自分の気持ちも言えず・・・それどころか、素つ氣ない態度を取つてしまつた・・・なんて・・・

まるで、小学校の男の子が自分の気持ちを隠すのに、好きな子に意地悪をしてしまう・・・そんな昨日の自分。

そんな幼稚な自分。ミホに言えない。ミホに見栄を張るため嘘をついた。

『そりなんだあ。残念だつたね。でも、また次いい人見つけたらいいじゃん 梓可愛いから男なんすぐ見つかるよ』

『そりかなあ・・・』

『そりだよ!』

しばらくミホと話し電話を切つた。

私はぼんやり昨日のこと思い返していた。しかし、寝ていなかった  
め睡魔が襲ってきた。

でもここで寝てはいけない。

ここで寝たら母に昨日寝ていながらバレてしまう。  
そうなつたらミホの家に泊まりに行くことすら許しが出なくなる。  
その日は頑張って睡魔を追い払い、夕食を終えたすぐ、倒れ込むよ  
うに眠りに落ちていった。

目が覚めたのは、次の日の朝だった。

携帯を見る。

敬からメールが来ているかも知れないという期待をした。

着信1件

メール1件

敬かも！

…着信は咲美だつた。

…メールも

咲美に電話した。

『もしもし咲美? ごめん寝てた』

『もうお昼だよ! いつまで寝てんの! まいいや! 今から会わない  
?』

『いいけど、今起きたばっかだからもう少し後でね』

『了解 じゃあ用意できたらメールちょうどいい』

咲美救われた。

私はこのまま家にいたら、敬とのことを思い返すことばかりしてい  
たはず。

すぐに用意を済ませ咲美にメール

用意OK

いつもの○ツク集合だ。

『梓、昨日はどうだったの?』

やはりきた！その話し

咲美にはありのまま話した。

敬の優しい言葉に恥ずかしいあまり素つ氣なく答えてしまつた事。恥ずかしくて、自分の気持ちを素直に言えず、敬と気まずい雰囲気のまま別れた事。

あのとき素直に言えていたら…と思つ後悔。

全て話した。

咲美は私の気持ちを分かつてくれた。

分かつてくれるだらう思つたから話した。

私達は似た者同士。

男と付き合つたことがなければ、男に優しい言葉をかけられた事もない。

咲美は私のその時素直になれなかつた気持ちを分かつてくれた。それでも本当は敬の事を好きなんだということも分かつてくれた。

『梓が敬君のこと好きで後悔してゐるならもう一回試してみたら？今度は頑張つて自分の気持ち伝えるの…』

その言葉に私の気持ちは高ぶつた。

『そうだよね！』

『今から敬君にメールしなよ』

『……』

『敬君を誘うの！会おうつて！それが夜なら、今度はうちに泊まつておばさんにいいなつ』

咲美とは小・中学一緒なので母親ももちろん咲美のことは知つている。

『うん…』

敬君この前はなんかごめんね。また会える？

数分後

いいよ

短いメールが返ってきた。

そのメールが今までとは違う感じがしてショックだったが、

咲美に、

「忙しくてゆっくりメールしてられないんじゃない?OKのメール  
だつたんだから良しとしようよ」  
つて言われ、私もそう思い込むよつとした。

『いつ会えるかきくのー!』

咲美に押され

いつ会える?

来週の月曜なら大丈夫

今日からちょうど一週間後だ

『良かつたじやん! 梓、今度は頑張るんだよー!』

私は何か不安を感じながらも、咲美と一緒に喜んだ。

『これからは、控えめじや駄目! 梓最近可愛くなつてるんだから、  
自信もたなきや!』

『ありがとう咲美』

今日の咲美は熱い奴になつていた。

私もそれにつられ熱くなつた。

敬との約束の月曜まで敬からの連絡はなかつた。

私は咲美の言葉を思い出し、敬から連絡はなくとも、メールを入れ  
続けた。

敬との約束の前日・・・  
敬にメールを入れた。

明日本当に会つてくれるの?

これで返事がなかつたら、敬のこと諦めようと思つた。

勇気を振り絞つてメールした日から今日まで、私は敬にメールを入れ続けた。一度も返事は返つてこなかつた。このメールの返事もな  
かつたら明日会うこともなくなる。

私はこの一週間頑張つた。

今までになく頑張つた。

敬からの返事がなくとも…。朝は おはよう 夜は おやすみ など…内容は対したことはないが、一方的に送り続けた。私の誠意のつもりだった。

でもこのメールの返事がなかつたら諦める。

明日いいよ。前と一緒に時間にあの駅で  
返事が来た！

メールは素つ気ないものの…明日会えるとこう喜びでいっぱいになつた。

この前のような失敗はしない。そう自分に誓つた。

第8話・敬 3(前書き)

投稿ギリギリかもしません(ノー・。)

…敬に引き止められた駅  
…敬の愛を少し感じた駅  
…敬を好きだと確信した駅。  
またその駅に私は立っている。  
今度は敬の愛に答えたい。  
素直になる。

そう誓い敬の来るのを待つていて  
来た！

またバイクを借りてきたのだろう。バイクは私の前に停まつた。

『乗つて』

初めて会つた日を思いだした。

私は敬の後ろに乗り敬の腰に手を回した。初めての時は何も思わなかつたが、

敬の背中大きい。手を回した腰も引き締まつていてのが分かつた。  
・うつとりしているうちに敬の家に着いた。  
バイクを降り、敬の後を付いて家に上がつた。  
敬はまだ何も話していない。

（やつぱりこの前のことで起こつてているのかなあ…）

部屋に入り私はドアの横に座ろうと…

その時、敬が…敬が私を抱きしめた。

敬の匂い… 心地良い。うつとりした。

私も敬の腰に手を回した。

しばらく立つたまま抱き合つていると、敬がそつと離れたと思つたら、私の手をとりベッドに連れて行つた。

2人向かい合つようにベッドの上に座つた。

敬は私をじつと見ていて。

私も敬をじつと見た。

私は敬の視線に耐えられなくなり田をそらしたとき、敬の手が私の髪を撫でるようになに触れた。

敬の手が頭の後ろに周り手に力が入るのが分かつた。

『たか…』

私の言葉を遮るように、私の唇と敬の唇が触れた。

初めてのキス。

とても優しいキス…私は田を閉じ、敬に任せた。

敬はキスをしたまま私を抱き寄せ、そのまま優しく横になつた。

唇が離れ、私を覆い被しているような敬と見つめ合つて。またキスをした。

敬の手が私の頭から少しづつ下に降りていき胸に触れた。

『…！？』

（もしかして、これってエッチする感じになつてる…？）

私は我に返つたように、キスを止めた。

『駄目？』

敬は吐息まじりの声で言つた。

駄目な訳じやない。でも、こんなことになるなんて考えていなかつた。

勿論、私は処女。

そのことを敬は知つているのか知らないのかは分からない。

敬はまたキスをした。溶けてしまいそうなほど優しくキスだ。

敬の手が胸から下に降りる。スカートの中に手が入り、私はキスに酔いしれている場合ではなかつた。

（これからどうなるの？敬の手はどこにいくの？）

そんな焦りで頭がいっぱいになり、心臓は音が聞こえてしまつぐらにドキドキしている。

敬の手が私のパンツに触れたとき…

（駄目だ！怖い！）

敬を押しのけた。つもりだつたが、男の力に叶はずもなく押し退

けることはできない。

敬の手を掴んで私から離そうとした。…駄目だ。かなわない。  
もう、敬を止めることは出来ない。

敬の指が私の中に入った。

痛いっ！怖いっ！嫌だ！

『止めて！』

敬の力が一瞬抜けた隙に敬を押し退けた。私はそのまま敬の家を飛び出した。

敬の家を飛び出し、どれくらい走ったか分からないうが、走り疲れゆつくり歩いた。

私は今日こんなことをするために来たんじゃない

敬と話したかった。

私の気持ちを聞いたかった。

敬の気持ちをちゃんと聞きたかった。

敬はそういうつもりで今日私と会つたんだ

そう思つたら涙が溢れ出てきた。

涙を拭くこともせず、溢れ出た涙を止めることも出来ず、小さく声を出して泣いた。

私は歩いた。

もう一度と來ることのない駅まで…

涙は止まることを知らなかつた。

電車の中でも流れた。きっと周りの人は不思議に見てゐるだらう。今私の周りなど見えなかつた。

地元の駅に付き改札を抜けると

『梓』

咲美が立つていた。

敬の家を出ですぐ泣きながら咲美に電話をしていた。何を話したか覚えていないが、泣きながら電話をした私が心配になり、駅まで迎えに来てくれたのだ。

咲美の顔を見てホッとし、その優しさに涙は量を増した。

咲美に抱きつき、声を出して泣いた。

今夜の12時前だ。咲美も夜出れるはずがない。きっとじつそり抜け出して来てくれたのだろう。

今日は咲美の家に泊めてもらひことにした。  
家は真っ暗、家族は寝てゐるようである。そつと家の中に入り、咲美の部屋に入つた。  
その時にはもう涙も止まつていた。

『今私に話したい事ある?』

おばさん達にはれないように小さな声で咲美は言った。

私は大きく首を横に振つた。

今話してしまうと、きっとまた声をだして泣いてしまう。

『じゃあ、今日は寝よ。明日話せたら、話して。ゆっくり休んで…。

おやすみ』

『うん。おやすみ』

ありがとう。ありがとう咲美。

心の中で何度も何度も言った。

私達は早く起きた。

咲美の母に私が夜來た事を誤魔化すために。

夏休みとあつておばさんもゆっくり寝ている。朝7時。・・・咲美は

おばさんの寝室に行き『今梓來たから』と言いに行つた。これでOK!

私達はホッと一息ついた。

『昨日なにがあつたの?話せる?』

『ちょっと待つて。トイレに行かせて』

パンツに違和感があつた。トイレに行つて見てみると、血が付いていた。昨日の一件で付いたのだろうと思った。

部屋に戻り、昨日の一部始終を咲美に話した。私が拒んだときの敬が怖かつたこと。

エッチをするために私の誘いを受けたこと。

『…ひどい…』

咲美は私にかける言葉がなかつたのだ。

『私は咲美に感謝してる。ありがとう』

『……。』

咲美は目に涙を浮かべている。

私は泣かない。

私は咲美に話したことで気が楽になつた。

咲美には感謝してる。一緒にいてくれたことに、感謝で胸がいっぽいだ。

『私はもう大丈夫だから!』

『敬のことはもういい。…忘れよ!』

もつと強くなろう!。

そう心に決めた。

私は携帯から敬を消した。  
さよなら敬。。

## 第10話・慎悟

夏休みも前半が過ぎたところ。。。

夕食を済ませ部屋でのんびりしていたら、携帯がなった。知らない番号。出るか出ないか迷つたけど、出た。

『はい。。。』

『もしもーし』

『ん。。。女?』

『由希だけどお、梓ちゃんの携帯?』

『由希ちゃんかあ。誰かと思った。』

『ごめんね。急に...梓ちゃんに伝えたいことあつて敬に番号聞いたの』

敬に! ? 私は動搖を隠し

『伝えたいことって?』『〇〇工業高校の慎悟さんて人が私の中学のときの先輩で、毎朝電車で梓ちゃんと一緒なんだつて。で、梓ちゃんに一目惚れしたらしく、連絡取りたいつて私の彼氏に連絡あつて...』

〇〇工業高校は、私の通う学校の隣の高校で、とても有名な不良高校である。

制服は普通の学ランンドビーの学校か分からないつて感じだが、すぐ分かる。

上の服は腰辺りまで短く、ズボンはダボダボ。髪は金髪、ピンク...まだまだ。

だいたいこの高校に通う生徒はみんなと黙つていいほど、こんな感じだ。

由希ちゃんは今の彼氏と中学のときから付き合つていて、彼氏もその学校に通う生徒らしい。

『どんな感じの人なの?』

由希ちゃんが何て敬に電話番号を聞いたのか気になつたが聞かなか

つた。

『私達の2つ上で3年生で、めつけめつけカッコイイよ 学校でもトップクラスだし』

由希ちゃんの言うトップクラスとは、不良でトップクラスと言つことだ。

『電話番号教えてもいいよ』

私は敬の事を忘れたかった。

敬に見せ付けたかった。

あんたのことなんか好きじゃなかつた。

遊びだつた。

と・・・

由希ちゃんと敬は仲が良い。きつとこの話しも敬の耳に入るだろう。『ありがとう！これで私達（由希ちゃんとその彼氏）の顔も立つたよ。梓ちゃんには敬のときといい、こんな話しばっかで「めんね。じやあ、携帯教えとくから、後は頑張つてねー』

『うん。じゃあね』

本当に由希ちゃんは私の仲人みたいだ。

由希ちゃんと電話を切つて10分ぐらいして、携帯がなつた。知らない番号・・・きっとわざと言つてた慎悟さんて人だ。

『もしもし…』

『梓ちゃん？俺慎悟。由希から聞いてる？』

『はい、さつき電話で聞きました』

『あつ敬語とかいいから、タメ語で…』

『はい』

『あと、慎悟さんとか止めてね。由希とかは慎悟さんで言つてゐるけど、梓ちゃんは慎悟でいいよ』

『じゃあ、慎悟も梓ちゃんは止めて梓でいいよ』

不良＝怖い人。

私の今までのイメージを覆した。

慎悟は普通の人に思えた。それどころか、無邪氣で、バカな事言つ

たり、私と対等に接してくれた。

楽しくつて慎悟との話に夢中になつた。

私は氣を使うことなく、本当の自分の自分を出させていく明るく話せた。

顔も知らない慎悟と話すのはもちろん今日が初めて。でも初めてじゃないみたいに、私は話すことが出来た。

慎悟のおかげだ。

すごく楽しい人。もつと話してみたい。

慎悟と会つてみたい。

もう2時間以上話している。

『梓(さくら)めん。もうこんな時間。長く付き合わせて(さかめ)んなつ。俺はいつでもいいから、梓が暇なとき連絡して』

『うん。また連絡する』

心地いい慎悟との余韻を残しながら眠りについた。

朝起き、昨日慎悟と電話したことを再確認するよう昨日の慎悟の着信履歴を見た。

…いつでも電話してつて言つてた。

今すぐ電話したい…。また慎悟の声聞きたい。話したい。

でも昨日の今日だし…

ただ慎悟の声が聞きたいだけ…。用事はない…。もし慎悟が話してくれないと会話がない…。

発信のボタン押せない。

慎悟からの電話を待つ。

慎悟と初めて話した日から3日が過ぎた。

毎日毎日、慎悟からの着信がないか携帯ばかり見ている。

4日目の朝、携帯がなつた。

『慎悟だあ！

『もしもし』

待つてましたとばかりに出た。

『梓？あのさあ…』

『慎悟の声が暗い。

『どうかしたの？』

『どうかしたの？じゃねえよ…』

『え？…起こつてる？…

『…。』

『俺いつでもいいから連絡してって言つたじゃん！梓なんで連絡してこねえんだよ』

『慎悟は怒りながら淋しそうだった。

『…じめん…電話しようと思つたけど…。なに話していいか分からなかつたし…』

『そんなの気にすんなよ！梓が電話しようと思つたときに電話したらいいんだよ！分かつた？』

まるで子供に言い聞かすように言つた。それが嬉しかつた。守られているようだ。

そのときはもう慎悟の怒りはなかつた。ホッとしたような感じだった。

『梓今田なんか予定ある？』

『何もないけど…』

『今から出でこれる？俺近くまで迎えにこくよ』

『大丈夫だよ。』

『慎悟と会えるんだ。』

2時間後に私の家の近くで待ち合わせをした。

近くといつてもそう近くではない。私が男といふとこを近所の人には見られでもしたら大変！そんなことが親の耳に入つたら、夏休み中外に出してもらえなくなる。

母にはミホと遊ぶと言つて家を出た。  
いつもどつり夕方に帰ればバレない。

私は敬のときについぱい親に嘘をついた。  
今はもう嘘を付くことに抵抗はなかつた。

当たり前のように親を騙し家を出た。

私と慎悟の家は意外に近く、だつたことにびっくりした。歩いてでもそう遠くない。

だから待ち合わせ場所も簡単だつた。

「〇〇を曲がった角で…」

みたいな感じだ。

慎悟が通つていた中学より私の行つていた中学のほうが、慎悟の家から近いが、学校の規定の範囲の決まりがあり中学は別だつた。

待ち合わせ場所には金髪のモヒカンヘアの男がいた。慎悟だろう。

私は慎悟の顔を知らない。でもあれは慎悟だ。慎悟はまだ私が近づいて行つてることに気付いていない。…どうやつて話しかけよう。こういう時、後から行くのは嫌なものだ。

『おう！梓』

私は気付き呼んでくれた。

その声とともに、私は3メーターぐらい走り慎悟に駆け寄つた。

『ごめん。遅れて』

『気にはんな！』

ポンポンと私の頭を叩いた。

もう私は

『慎悟の事好きだ』

そう思つた。

初めて会つたばかりなのに…。敬のときにして、私は惚れやすいのだろうか。

とりあえず、私達は近くの公園に行くことにした。

慎悟と並んで歩いている。慎悟はヒールを履いている私より頭半分

くらい背が高い。 肌の色はどちらかといつと白目。 奥一重の切れ長の目。 細くカットした眉。 由希ちゃんの言つてつりカッコイい。

歩きながら慎悟の横顔を眺めた。 … こんな人の彼女になれたらいだろうなあ。

『梓：さつきから見すぎなんだけど…』

うつとりしていた私は我に返つた。

『あつ。 … ひめん』

『俺の顔、 … 变?』

『全然変じゃないよ！ カツ コイー』

思わず言つてしまつた。

『またまた、 そんな事言つてえ』

ちょっと照れてた。

公園に着きベンチに座つた。

今度は慎悟が私の顔をじっと見ている。 前を向いていてもその視線は分かつた。

今度は私が

『見すぎなんだけど

慎悟の真似した。

『梓可愛いなあつて思つて』

『何それえ！ さつきの仕返し?』

『まぢだよ！ 由希から聞いてない？ 僕、 梓に一日惚れしたんだからさつ！ … こんなこと言わせんな！ バカ！』

恥ずかしくて返せなかつた。 でも嬉しくて顔が緩んだ。

さすがに夏休みの昼間の公園とあつて、 子供達が増えてきた。

『場所変えよつか』

『うん。』

『俺んち来る？』

『うん。』

公園から10分くらい歩いて慎悟の家に着いた。

1階建ての小さな家。

慎悟の後を続いてあるいた。慎悟は玄関には向かわず、家の横を通り裏へ歩いて行つた。

(?)

家の真裏に来たとこで、床から天井までの長方形の窓を開け

『入つて』

そこが慎悟の部屋らしい…。慎悟はいつも玄関からではなく部屋の窓から出入りをしているそうだ。なので、窓の外には靴箱がある。

私は初めて見る光景にびっくりした。  
と、ともに不良っぽさを感じた。

実際・玄関からより入りやすかった。

部屋はさっぱりとしていて綺麗だ。タバコと香水の匂いが混じつた男の匂い。

慎悟は部屋に入るなりタバコをくわえた。でも私の顔を見てタバコを離した。

『吸つていい?』

『いいよ』

私に氣を使つてくれたのだ。敬は何も言わずタバコを吸つていた。  
嫌じやなかつたけど、慎悟の気遣いが大人だと感じた。

慎悟はベッドに腰掛け

『こつちおいで』

突つ立つてゐる私にタバコをくわえながら言つた。敬のこと  
を思い出し、躊躇した。

『なんもしないからおいで!』

また子供に話すように言つた。

私は慎悟のこの喋り方が好き。子供扱いされてる感じだけど、そんな感じが好き。

慎悟の横に座った。

私はコルクボードに貼つてある写真を眺めていた。

『写真みる？』

『見たい！』

慎悟は押し入れからアルバムを出し私に手渡した。  
ぶ厚いアルバム…この中にもまだ私の知らない慎悟がいるんだ  
と思うとドキドキした。

綺麗に貼つてある写真。

沢山の友達の写真があった。

学校で撮つた写真。

先輩。後輩。との写真

慎悟はアルバムをめくるたびに説明してくれた。  
その中でも一番よく慎悟と写っている人がいた。慎悟の親友で雅史まさしという人  
だそうだ。慎悟と張るくらいカッコイイ。

『雅史とは小学校から今の中高までずっと一緒に一番の親友でさあ

…』

雅史君の話をする慎悟は本当楽しそう。

『梓にも今度紹介するわ』

『うん。ありがとう』

『でも梓、雅史に惚れるなよ！雅史男前だからなあ』

『うん！』

なんか私達付き合つててみたい。この時がいつまでも続いてほしい  
…。

今日初めて会つてお互い聞きたいことも沢山。私達の会話は止まなかつた。

慎悟は私に沢山の質問をした。

私も慎悟に沢山の質問をした。

『ところで、梓はヤツたことある？』

『何を？』

『…ヒツチ』

私があまりにも自然に聞き返したので、少し言はずりそうだった。

『…ないよ…』

恥ずかしかった。

した事がないのが恥ずかしかった訳じゃなく、純粹にその質問に答えることが恥ずかしかった。

『…なんだ』

何故か慎悟は嬉しそうだった。

慎悟には聞くまでもないと思い聞かなかつた。

私達が夢中に話している間に外は薄暗くなつていた。

部屋の時計を見ると18時になろうとしていた。

まずい！もうこんな時間。今帰ればまだ怒られない。

…慎悟とまだいたい。

どうしよう。

後はどうなつてもいい。今の慎悟との時間を終わらせたくない。

私は慎悟との時間を取つた。

頭には母の起こつた顔がよぎる。無理やり私はそんなこと拭い去つた。

…慎悟と離れたくない。

私は慎悟にバレないようになにかに鞄に手を入れ携帯の電源を切つた。母から電話がなるのを予測して。

『梓時間大丈夫？』

慎悟が聞いたそのとき時間は19時にならうとしていた。

私が大丈夫な時間はもうとつぶに過ぎている。

『大丈夫だよ』

『…ならまだ一緒にいて大丈夫？』

『うん』

慎悟は何気なく言つているのだろうが、慎悟の言葉が幸せ。

『…俺、梓のことマジ好きだわ。』

…今何て？…好き？って…？

『一目惚れで梓のこと好きになつて、でも、ツレするのも、女にするのも、やっぱり人間中身じゃん。梓と一日いて思った。梓を俺の女にしたい』

『これって告白だよね…？

私はめちゃめちゃ嬉しかった。

もちろん答えは全然OK。でもそれをどう言葉にしていいか分からぬ。

慎悟は私を見つめた。

私もそれに答えるよつに慎悟を見つめた。

『俺の女になつて』

『うん』

返事が言えた。

『俺マジ言つてるんだけど、梓分かってる？』

急にチヤラけた慎悟に戻つた。

『私もマジ言つてるよお』

慎悟がチヤラけたよつに言つてくれたから私も言い返せた。

こついう慎悟が好き。真面目に話したあと、空気を和ませるよつにチヤラける。

居心地が良かつた。

『じゃあ、今から梓は俺の女、梓の男は俺な…やつべえ、俺マジうれしいわ』

…私もうれしい。自然と笑みがこぼれる。

『俺ばつか喜んでんじやん！梓ももつと喜べよ！それとも俺の事好きじやない？』

何言つてんの？大好きに決まつてんじやん！…なんて恥ずかしくて言えない。

『……。』

恥ずかしくて慎悟の目を反らした。…そのとき、慎悟の手が私の頭に回り私の頭が慎悟の胸にうずくまつた。

『俺マジ梓の事好きだから』

『…私も好き』

『やつと言えた。』

慎悟の匂い。慎悟の体温を感じる。  
このまま時間が止まつてほしい。  
私は幸せの絶頂だった。

## 第1-2話・私は変わる

慎悟に家まで送つてもらつた。（実際には家の近く）  
玄関のドアを開けるとき、わざ今までの幸せが嘘かのよつて氣分は  
沈んでいた。

時間は21時。母がどんな顔して待つてゐるか…。

『…ただいま』

『あずね～つ～ちよつと来なさい』

ほりきた！声で分かるくらい母の怒りは頂点に達していた。

『こんな時間まで何してたの…？』

『…ホと遊んで…遅くなつた…』

『嘘言わないの！あんたの帰りがあんまり遅いし、連絡とれないし、  
お母さん』ホちゃんと電話したんだから』

ヤバい！今日のことミホに言つてないし、ミホが急に話し作れるは  
ずかない。ミホと遊んでないことは分かつてゐるんだ。

『あんたいつたいこんな時間まで何してたの？』

『…』

言い返せない。

言い返す嘘が思いつかない。

どうしたらいいんだろ？。そう思しながらも私の中に母に対する怒  
りが込み上ってきた。

何故夜遊びに行つたら駄目なの？

何故そんなに縛られなきやならないの？

私の怒りも頂点に達した。

『どうでもいいじやん！ほつとしてよー』

そう言つて自分の部屋に飛び込んだ。

初めて母に言い返した。

初めて母に反抗した。

今まで母に反抗したくても出来なかつた。母が怖くて。

私は母に言い返したことで満足感を感じた。今まで私の前に立ちはだかつて意大きな壁を壊せた感じだ。

母が怖くて私は今まで自分を我慢してたんだ。

こんな意地つ張りになつたのも、自分を素直に出せなくなつたのも全部母のせいだ。

これからは母に縛られた生活なんか嫌だ。

私はその日から母に対して、反抗する気持ちだけしか持たなかつた。

慎悟と付き合つた喜びを一番に咲美に伝えた。

『梓良かつたじやん！私の言つたとおり男なんてすぐ見つかつたでしょ？』

『ですね。』

私の喜びと一緒に感じてくれた。

『咲美はいないの？』

『何が？』

『好きな人とか…』

『…気になる人ならいる』

『本当にい～！？どこの誰？どんな人？連絡とつてるの？』

『梓落ちついて！』

最近は私の男話しばかりで、咲美の男ネタはなかつた。

昔は良く好きな人の話しをしたけど、付き合つとかいうのはなかつたし、考えてもいなかつた。好きだけで満足してた。

でも今は、私には慎悟という彼氏がいる。咲美にも早く彼氏が出来てほしいと思う。

『毎朝駅で見かける人なんだ。私服でいるから学校には行つてないと思う。仕事をしてるんじゃないかな。まあ私の一眼惚れだね』

咲美はかなりの面食いだ。咲美が一目惚れするくらいだからカッコいい人だと思う。

『連絡とつてるの?』

『そんなつー話したこともないよ』

『電話番号聞いてみたら?』

『そんな事できないよお』

『そんな事言つてたら前に進めないよー待つてるだけじゃ駄目ー自分が行かなきや』

私は敬のときに素直になれず後悔した。もし初めて会つたとき自分の気持ちを素直に言えていたら、敬とあんな終わり方をしなかつたんじやないか・・・と後悔したから、咲美には後悔してほしくなかつた。

『断られたらどうしよう』

『自分の気持ち言つて断られるのは仕方ない。でも伝えないまま終わるのは後悔するよ。きっと…』

『…だよね。そうだよねー私明日いつもの駅行つてみるー仕事ならいるかもしねーし』

『頑張れ!咲美!』

『ありがとう梓。私頑張るね』

ウジウジしてたつて駄目。自分から前に進まなきや。咲美に言いながら自分に言つてた。

私は後悔しない。

私はウジウジ考えない。

私は強くなるんだから。

・私は変わった。

## 第13話・再確認、疑惑。

私達は付き合つてから毎日とこづけ合つた。

朝から慎悟の部屋でまたりしながら1日を過ごす。そんな毎日、特にどこに出かける訳でもないが、それでも一緒にいることが幸せ。

帰りは毎日21時。帰ると母は毎日口うるさく怒鳴る。

私は母と顔を合わせることなく朝家を出て慎悟の家に向かつ。家に帰ると母の怒鳴り声を無視して部屋に直行。

もう馴れた。母の怒鳴り声も。

母の怒鳴り声を無視するだけで、こんな簡単に夜遊び出来る。何故今まで我慢してたんだろう。

家に帰つたらまず慎悟に電話。2人の決め事だ。

慎悟はメールをしない。メールだと気持ちが伝わり難いから嫌いなんだつて。だから私もメールはしない。慎悟とはいつも電話。

そんなこだわりを持つ慎悟も好き。

今私は慎悟なしではいられない。慎悟に夢中だ。

そんなある日いつものように朝、起きたての慎悟から電話が鳴る。

「いつもどうりだ。

『もしもし』

『梓おはよ』

『おはよ。慎悟』

いつもの始まりの会話。この後、

「今日何か予定ある?」

「何もないよ

「なら・おいで

「分かった」

… とう感じで毎朝慎悟の家に向かう。

… 今日は違った。

『俺今から飯食つわ』

『うん』

『じゃあな』

…え…？ 終わり？

『…うん。じゃあな』

今日は会わないの？

聞けなかつた。

今日は何か用事があるんだろう。と思い込んだ。

今日一日慎悟からの電話はなかつた。最近毎日会つてたから、慎悟だつて友達と遊びたいよね。でも寂しいよ… 慎悟…

でも！また明日の朝、電話鳴つて… いつものように会えるだろつ。朝いつも10時に慎悟から電話がある。昨日会えなかつたから電話きたらすぐにでも飛んでいけるよつ、10時には用意を済ませ、慎悟の電話を待つた。

電話は鳴らない。

まだ寝てるのかなあ。起こすの悪いし、慎悟からの電話待つ…

いつまでも経つても慎悟からの電話はなかつた。

絶対変だ！さすがに昨日の夜から今日の夜まで寝てるなんてありえない。

慎悟に嫌われたのかなあ… でも2日前まで何ともなく仲良くしてたし… 連絡できない訳でもあるのかなあ…

不安… 不安でどうしようもない。

慎悟が離れて… いっつて… いるよう…

慎悟がいなくなつたら嫌だ。

慎悟がいなくなつたら私どうしたらいいの？

慎悟… 早く電話してよ…

私の目からは自然と涙がこぼれ落ちていた。

泣き疲れ知らない間に眠つた。

次の朝、真っ先に携帯を見た。

『慎悟から電話はない。気が狂いそうだ。

私は慎悟に会えない寂しさに耐えられず、朝早いにも関わらず慎悟に電話していた。

『……はい……』

思いつきり寝起きの声。慎悟がいつも電話する2時間は早い。

『慎悟……』

『梓か、うてか、めぢやめぢや早いじやん! どうした?』

『どうしたじやないよ! 寂しくて死にそうだよ!』

『……』

恥ずかしくて言えない

言えないけど、分かつて! 私がどんな気持ちで電話したか分かつて!

『……梓、話しある。今から来て』

初めて聞く暗く真剣な声。

嫌な予感。

でも、どんな話しだらうと慎悟に会いたい。

『分かつた。』

すぐに向かつた。

慎悟の部屋の窓ガラスを開け中に入る。慎悟の姿が見当たらない。

慎悟はまだベッドの中にいた。しかも寝てる・・・

私はベッドの側に行き慎悟の寝顔を見つめた。

会いたかった。

寂しかつた。

慎悟といふとあつといふ間に過ぎる一呼吸が、慎悟といふと遼く長い。

『……はい。』

『……慎悟』

そつと呼んでみた。『ん~...。あず...さ...か。早かつたなあ』

『当たり前だよ!』

会いたくて、会いたくてたまらなかつたんだから。

心の声を出せたらどんなに楽だね。でも、慎悟には伝わってる。口に出さなくても私の気持ち、きっと伝わってるはず……伝わってほしい。

慎悟は寝転びながらテレビを付けた。

私もベッドの下に座りテレビを眺めてた。何か気まずい雰囲気のようで、テレビを見るしか出来ない。

『梓……』

『ん?』

いつもと違うのは分かっている。でも・気付いてないよつ……私はいつもビビつ……を装つた。慎悟に背を向けたまま。

『梓! こっち向いて!』

私はベッドの上に乗り、慎悟も体を起こし向かいあつた。

『梓はさあ、今日ビビして電話してきた?』

始まつた。私の苦手な真面目な話……

『なんでそんな事聞くの?』

慎悟は意気込むよつに大きく煙草を吸つた。

『梓は俺のことビビ思つてる?』

『どうしたの? 急に』

私はまだ真面目な話をする準備が出来てない。この雰囲気を変えることなら、変えたい。

『私はまた逃げようとした。

『梓。真剣に答えて』

『まづい。』

私がここで逃げたら慎悟とは終わってしまう。慎悟と終わりたくない。

『頑張るつ

『好きだよ

『本当に?』

『本当だよ。だから・なんでそんな事聞くの?』

『いつも、電話して誘うの俺ばっかじやん。梓から言つてくれたことないし、俺が誘うのに無理やり付き合つてくれんのかなあって、好きだつて思つてんのは俺だけなんじやないのつて』

慎悟がそんな事考へてるの知らなかつた。

私はいつも当たり前のようになつて慎悟の電話を待つて、慎悟の誘いを待つて、断ることなく慎悟のもとに行つていた。

慎悟の事嫌なら、慎悟がどんなに誘つたて行かない。私が行くつて事は慎悟の事を好きだから……

それで私の気持ちは伝わつてると思つてた。

伝わつていなかつたんだ。

私が思つてゐるほど慎悟とは解り合えていないんだ  
そつ思つたら涙が出そう。

我慢した。こぼれないよう必死だつた。

『好きだから慎悟のここに来るの』

これ以上喋つたら涙がこぼれちゃう。

『俺さあ……いつも言つてゐけど、梓の事マジ好きなんだ。』

そう、慎悟は会つといつも

「好きだ」

と言つてくれる。

それに対しても私はいつも微笑むだけ。

それで伝わつてると思つてた。

口で言わなくとも伝わつてゐつて……

『俺、梓のこと好きになるほど不安で……俺ばっか好きなのかなあつて、……でも、俺そんな強くないから……自分だけ好きなのとか辛いから……だから今日梓の気持ちちゃんと聞きたいつて思つて……』

『……』

今喋つたら泣けちゃう。言葉が出ない。

『梓の気持ち、ちゃんと言つてくれないと俺わからんねえよ。』

『慎悟のこと好き……大好きだよ……』

声が震える。

涙が勝手に溢れてくる。もう駄目。

私は慎悟に涙を見せないように下を向いた。でも私が泣いてるのはきっとバレてる…。こんな事で泣いちゃって…きっと慎悟に嫌われちゃう。でも涙が止まらない。

…?

慎悟が近い。

私は慎悟に抱き締められていた。

『やつと言つてくれた。俺も梓の事好き』

嬉しくて嬉しくて私の涙は量を増し溢れ続けた。

涙でぐちゃぐちゃになつた私を慎悟は優しく拭つてくれた。

そして慎悟の顔が近づき、私は素直に受け入れた。

慎悟と初めてのキス。

私の人生で一度目のキス。

そのまま私達はゆつくりベッドに横になり、とても長いキスをした。

慎悟は壊れそうな物を触るように私の体に触れた。

嫌じやなかつた。敬の時とは違つた。私の気持ちが違つたんだ。ゆつくり私の服を脱がし、慎悟も器用に自分の服を脱いでいった。お互ひの体温を確かめ合つようにしばらくの間、裸で抱き合つていた。

恥ずかしかつたけど、慎悟に抱かれる幸せを感じた。

慎悟の体あつたかい。

慎悟のいい匂い。

このまま慎悟を離したくない。

しばらくすると慎悟は少し体を起こした。

『梓初めてだよな』

耳元で囁いた。

私は頷いた。

慎悟の手が私を優しく撫で…

慎悟が私の中に来た。

私達は一つになつた。お互いの気持ちを再確認するまつた。

正直、気持ちがいいものではなかつた。

『 痛いだけだつた。でも慎悟と一段落と近づけた感じが気持ち良かった。』

終わつてからも慎悟は優しく側にいてくれた。

『 でも、慎悟の様子がおかしい。』

『 どうかしたの?』

終わつた後にこんな事聞けるのは私が初めてだつたからだらつ。

『 梓、本当に初めて?』

『 うん。初めてだよ』

『 嘘言つてない?』

私は直感した。

敬のときに私は血が出た。もちろん一回なんか出ない。

慎悟は疑つてるんだ。

でも本当に慎悟が初めての相手なのに

『 本当の事言つて!俺、嘘付かれるほうが嫌だから』

さつきまでの幸せムードはどこへ行つたのか、またこんな話しおの事つて……。慎悟に敬との事なんか言えない。

慎悟に疑われてる事が悲しかつた。一度緩んだ涙腺はまた涙を溢れ出させた。

『 本当だよ……慎悟が初めて……だ……よ』

また涙は流れだした。

『 分かった。分かったから……ごめんな』

私達は無理やり会話を変え雰囲気を変えようとした。

でも数時間前の幸せな感じにはもう戻らない。

慎悟は多分まだ私を疑つてる……

私は敬のことを思い出し、慎悟に後ろめたさを感じてゐる……

私達はお互い凝りを感じながら今日は早く別れた。

慎悟に抱かれた幸せよりも、慎悟を騙していくようで罪悪感でいっぱいのまま家に帰つた。

今日は早く寝よう。  
明日には忘れてるかもしない……。

## 第14話：涙

私は咲美に処女じゃなくなつた事を報告した。

咲美は興味津々にいろいろ聞いてきたが、私はまだ慎悟に罪悪感を感じていて、咲美の話に乗れなかつた。

『ところで、咲美は例の彼とどうなつたの？』

私は話しづ咲美に変えた

『うううう！彼とメールしてんのだ！』

『良かつたじゃん』

彼の名前は祐介。

咲美が駅で待ち伏せをして声を掛けたらしい。

で、すんなりメアド交換・・・つて感じで仲良くしてゐみたい。

咲美の楽しそうな話しさ聞いたら無性に慎悟に会いたくなつた。

あのとき、慎悟は胸の中の思いを私に言えずにいた。

私が泣いたせいで、慎悟はあれ以上私に聞けなかつたんだ。

慎悟は我慢したんだ・・・

慎悟が離れて行きそうで怖い。

慎悟が遠くに感じるよ・・・

一緒にいないと余計遠くに行つてしまつたうで不安だ。

慎悟の顔を見てないと不安だ。

会いたい。会いたい。会いたい。

気づけば慎悟に電話してた。

『はい』

『慎悟？今何してゐの？』

『何もしてないよ。テレビ見てた。』

慎悟は普通だつた。

その普通が私の不安を一層不安にさせた。

『……』

『梓どうかした？』

優しい声。

ずっと慎悟の側にいたい。慎悟の表情を一つ一つ見てみたい。

『今から会える?』

『いいよ。おいで。』

私は急いで慎悟に会いに行つた。

『梓早いじゃん!』

『でしょー!』

やつぱり慎悟は普通だつた。

二人でテレビを見ながら、ゆつくり過ごした。

慎悟はもう私にあの話はしないつもりだらうと思った。

敬との事、慎悟には話したくないはずなのに、今は聞いてほしいと思つてゐる。

今なら話せる。

慎悟には話せる。

今私のと慎悟の間には溝を感じる。

一緒に居ればなくなると思つた不安もなくならない。  
体が触れ合つぐらうにそばにいるのに、慎悟が遠い……。  
敬との事を言えぱこの溝がなくなることは分かつてゐる。  
だから言いたい。

だからお願い。もう一度私に聞いて。

慎悟は聞かなかつた。

一度と聞ひつとしなかつた。

それからも慎悟は普通だ。もつ何も思つてないかのよつと。  
私も自然と不安を忘れ、毎日慎悟と電話し、毎日慎悟と会つた。  
毎日慎悟と体を重ねた。

とうとう、夏休みも終わつた。

この夏休み敬といろいろあつたが、そんなことも忘れるくらい慎悟でいっぱいの夏休みだった。

私と慎悟は一緒に学校に通つことにした。

家近いから最寄りの駅も一緒に。

学校近いから降りる駅も一緒に。

だからこれからは一緒に行くことにした。

夏休み終わつて初めての学校。

私はいつもより早く家を出て慎悟の家に向かつた。

少し道は反れるが、自宅から駅までの間に慎悟の家がある。

時間的にもそう変わらない。

いつもどつり窓から慎悟の部屋に入ると慎悟はもう用意を済ませていた。

『梓おはよー』

初めて見る慎悟の制服姿。改めてカッコいい・・・

『おはよお』

慎悟の家から駅まで歩いて10分程度。

私達は駅に向かつた。

制服姿で初めて並んで歩くことがすげ新鮮だった。

慎悟なのに慎悟じゃないみたい・・・

初めて会つた感覚に似てる。

駅に着き電車が来るまでまだいぶ時間がある。並んで駅のベンチに座つた。

『今日の梓喋んねえなあ』

『なんかいつもと違うから・・・』

『何!? 梓緊張してんの?』

私をからかうよつと言つた。

『うるさい!』

いつもの感じに戻った。

キツ田な言葉で言い合いながらも、ジャレ合っているような・・・

『慎悟～』

誰だろ？・・・？

声のする方をみると慎悟と同じ制服を着た男の人だ！

『雅史かあ』

この人が雅史君か！

慎悟の親友雅史だ。

『珍しつ！慎悟今日は朝から学校？』

『うつせえよつ』

『つて、この子が噂の梓ちゃん？』

私は恥ずかしかった。でも嬉しかった。

親友に私のこと話してくれてたんだ。

『梓ちゃん可愛いねえ 慎悟なんか止めて俺と付き合わない？』

『冗談だつてすぐ分かつた。』

『雅史！こいつすぐ本氣にするからー。』

『ちょっと慎悟！』

私はそう言いながらもこれも『冗談だつて分かつた。

こういうノリなんだ。

『でも噂どうり可愛いじやん！梓ちゃん俺らの学校で噂んなつてて  
さあ』

『え？』

信じられない。中学まで地味で可愛いなんて言われた事のない私が  
他校で噂になつてゐるなんて・・・

『マヂで！〇〇校の一年で可愛い子いるつて！・・・で、ぶつちやけ言  
うと、朝から学校なんて來たことない慎悟が梓ちゃん見たさで・早  
起きして電車乗つてんの！』

『雅史やめろつて！』

雅史君は慎悟に目を向け、笑いながら話しつづけた。

『で、梓ちゃん見て一日惚れつて訳』

慎悟は恥ずかしそうだが私は嬉しい。

『もう雅史あつち行けつて！』

『はいはい。邪魔者は退散いたしやす』

雅史は慎悟の方を見て、にやけながら歩いて行つた。  
『ごめんな。あいつ朝からテンション高すぎ……ってかマヂ恥ずかしいんだけど』

『……私は嬉しかったよ』

今私は、こうこう事を素直に慎悟に言えるようになつていた。照れを隠すように、慎悟は私の頭をくしゃくしゃとした。

『もう！止めてよ！ぐちやぐちやになるじゃん！』

『そうかあ？最初からぐちやぐちやじやねえ？』

『もうつー』

そうこうしていると電車が来た。

さすがに朝のラッシュ。人がぎゅうぎゅうに詰まつてゐる感じ。

私は扉の端に立ち、慎悟は私を囲うように私達は向き合つて立つた。隣の車両を見ると雅史と同じ学校の人だろう人達がガラス越しにこつちを見て笑つてゐる。

慎悟は知らない振りをしているんだろう。

私が慎悟から目を反らし周りを見ると、同じ車両の離れた所にミホの姿を見つけた。

一瞬ミホと目が合い、私が手を振つたとしたら、ミホは目を反らした。

……？気付いてないのかなあ。ただそう思った。

私達が乗つてる電車は高校生がとにかく多い。

私が通つてる高校。

慎悟が通つてる高校。

あと三つの高校が同じ市内に固まつてゐる。

だから、大抵同じ時間の電車にみんなが乗るため、私と同じ制服を着た子も沢山いる。

一旦降りる駅に着いた。

今から私は学校までバスに乗る。

慎悟の学校は私が乗るバスからでも行けるが、大抵の人は電車を乗り換えて行く。

今日の慎悟は私と同じバスに乗つて行くそうだ。

このバスに乗るのはほぼ私の通う学校の生徒。

ただでさえ目立つ慎悟が浮いて見えるのは仕方ない。

私達はバスの後ろの席に座つた。

前を見るとミホの姿がある。

ミホはこっちを見ない。私もバスの中の人混みを搔き分けでまで、ミホの所に行くことはしない。

どうせ降りる場所は一緒だし…

今日は始業式だけだから早く終わる。

帰りに連絡を取り合う約束をして私は慎悟より一足先にバスを降りた。

…ミホの姿はない。

先に行つちゃったのかな…

教室に入るとミホはクラスの友達と仲良く話していた。

『ミホおはよう！久しぶりだね』

『…おはよう』

何かミホが素つ気なく感じた。

…・・・気のせいだよ。

席に着くと私は積極的にミホに話しかけた。

『朝電車一緒だつたの気付かなかつた？』

『…気付いたけど…一緒に居た人梓の彼氏？』

『…そうだよ！ミホに言わなかつたつけ？夏休み中出来たんだ』

『…良かつたじやん』

軽い返事。 今日のミホ感じ悪い。

私はミホと話す事を止め前を向いた。

その時、

『梓ちゃん』

由希ちやんだ！

『あつ！由希ちやんおはよ。』

クラスがざわついた。

由希ちやんが私達のクラスに来たことがないし、私に話しかけてることに（？）だつたんだろう。

多分いつの間に友達になったの？って感じだと想つ。

『おはよう。ちょっと梓ちやん慎悟さんと付き合つたんだつて？』

『うん。 そうなんだ』

『慎悟さんから彼氏に連絡あつて付き合つたの聞いたんだ！梓ちやんいいなあ。 あんなカッコイイ彼氏がいて』

『由希ちやんも彼氏と仲良くしてるんでしょ？』

『まあ～ねえ～。 仲良くつていつか、腐れ縁つて感じかな』

『そう言いながらも好きなんだうなつて感じた。』

『もうすぐ始業式始まるね！梓ちやん一緒に行こ』

『うん』

私は由希ちやんと体育館に向かつた。

ミホがどうしたかは知らない。

急にあんな態度取られて私も気分悪いよ！

久しぶりにミホと会つたのに、結局今日は朝以来話さなかつた。午前中で学校は終わり、私は慎悟に電話した。

慎悟はもう終わつてるらしく、朝、バスに乗つた駅で私を待つてくれてる。

私はミホに対して気分悪いまま慎悟の待つ駅に向かつた。

駅に着き慎悟に電話した。

『今近くの喫茶店にいるから、そこで待つて！今から行くから慎悟を待つていると、バスが来た。』

中からは同じ学校の生徒が沢山降りてきた。

その中にミホの姿があった。

クラスの子と一緒にいた。ミホは私に気付き、こっちを見たがすぐ目を反らし、私の前を素通りしていった。

私は何がどうなったのか分からぬ。

私がミホに何かしたの？

考えたが何も思いつかない。

ここまで態度を急変されると、気分が悪い。

ミホに対し怒りが込み上げる…反面かなり凹む…  
早く慎悟來ないかなあ。。。

横を見ると今私が最も会いたくない人が歩いてくる。

敬だ・・・

学校の友達と三人でこっちに歩いてくる。  
私は下を向いた。

( お願い早く通り過ぎて！ )

一人が私の前で立ち止まつた。それに続いてあと二人も私の前に止まつた。  
私は下を向いていたため足しか見えない。…でも私の前で止まつたのは「敬」

だつて分かつた。  
…私は前を向いた。

敬が奇妙な笑みをしながら私を見る。

『先行つて』

あと二人は駅に向いて歩いて行つた。

『梓ちゃん久しぶりだね』

その言い振りは、一時感じた優しい敬ではなかつた。

笑つてはいるが、どこか冷たく、私を見下し、嘲笑うような感じだつた。

『久しぶり』

敬が怖い・・・

そんな私の気持ちを感じとり、楽しむかのよつて語り出した。

『梓ちゃんもしかして処女だったの?』

馬鹿にした言い方・・・

『……』

『梓ちゃん帰つちやつてからシーツに血付いてたから、俺びっくりしたんだけど!』

こんなどこで言わないで!

私は恥ずかしくてまた下を向いた。

『梓ちゃん遊んでる風だから、俺絶対ヤラせてもらひたと思つたんだけどなあ。。。残念だつたよ。俺優しくするから、今度ヤラせてよ!?』

敬は笑いながら去つて行つた。

あの時、私が優しいと感じた敬は嘘だつた。

少しでも私の事を好きでいてくれると思つてた。

それも嘘・・・

私は悔しくて、髪の毛で顔を隠し下を向いたまま泣いた。

あんな奴のせいで慎悟に嫌な思いをさせてしまつた。

敬との事で私達の間に溝が出来たと思った。でも、一瞬でも敬と私はお互い好きだつたんだと思うと・・・仕方ない・・・と思えた時もあつた。

でも、それもこれもすべて嘘だつたんだ。

私は騙されたんだ。

敬はただ私とやりたかっただけだつたんだ。

・・・そんな事で慎悟を傷付けたんだ・・・

悔しくつて悔しくつて、私は大粒の涙を零した。

もうすぐ慎悟が来る。

泣いてるところ見られたら、また慎悟に心配かけりやつ。ハンドタオルを鞄からだし、涙を拭いた。

『梓』

『慎悟！』

『ごめん待つた？』

敬と会つて時間を長く感じたが、実際はそんなに経つてなかつた。

『んん。待つてない』

『ん？ 梓泣いてた？』

『えつ！？』

バレた？

さつきまで泣いてたんだから目は真っ赤で腫れてる。分かるはずだ。

『泣いてないよ！ ヴンタクトズして痛くてさあ』

『そつか大丈夫か？』

『もう大丈夫！』

『ブサイクな顔が一段とブサイクだぞ！ 梓ちゃん』

『もう！ つるさい！』

良かつた！ 敬といたとこを見られてなかつたんだ。

私達は駅に向かつて歩き出した。

…でも、私は気づかなかつたが、敬との一部始終見ていた一人がいた。

## 第15話：大好きだよ。

二人駅に向かつてあるいていると、慎悟の携帯がなつた。

『はい。：そんなん無料だつつのー。』

：？何だらう？

電話はすぐに切れた。

慎悟は言いづらそうに

『俺の連れが梓の事見たいって…さつきいた茶店に連れてきてつて梓が嫌ならいいんだけど…』

『…いいよ！行こ！私も慎悟の友達見たいし！』

『ごめんなあ・・』

『気にはんなつて慎悟』

慎悟の口調を真似て言つてみた。

『おつ！なかなか言つようになつたなあ』

『ふふん。』

やつぱり慎悟といふと楽しい。

慎悟に案内され茶店に向かつた。

駅の商店街に入り、細い路地に入った。昼間なのに少し薄暗い…  
こんなとこがあるなんて知らなかつた。

路地沿いには夜になると開店するんだろうと思う店が並んでいた。  
そこに一件小さな喫茶店があつた。

『モカ』と書かれている看板が立つていた。

慎悟はその店に入り私も後に続いた。

中にいたのは金髪や坊主や店の中なのにサングラスをはめた人など十数人いた。

慎悟もそうだけど…こんな姿で学校に行くの？と思つ人ばかり…

みんな慎悟の友達だ。

朝、駅であつた雅史君もいた。

『梓ちゃんのお出まし〜』

雅史君だ！

『梓ちゃん〜こっちおいで〜俺の隣座んなよ〜』

『俺の隣も空いてるぞ！』

みんなそれぞれに言ひ。

『梓はこっち！』

慎悟に言われ慎悟と一緒に並んで座つた。

『チッ！慎悟ばっかいいとこ取りかよつ』

『俺の女だつづの』

みんな笑つてゐる。

私は分かつてゐる。 私を口説くように言つてゐるが、本当はみんなそんな気なんか全然ない。

俺らが口説きたくなるような女を連れてゐる…

みんな慎悟を祝福してゐるんだ。

そんな事勿論慎悟も分かつてゐる。

慎悟は良い友達が沢山いるんだ。

慎悟はみんなに慕われてゐるんだ。

そんな慎悟の彼女になれた事を思うと鼻が高くなつた。

周りを見ると十数人いる男の中に一人のヤンキーな女の人人がいる。

雅史の隣に座り親しそうに話してゐる。

雅史の彼女だ！直感した

とても綺麗 . . .

茶色く染めた長い髪。

バツチリ決めた化粧。

制服を着ていなかつたら、とても高校生には見えない。

私がとても子供に感じた。

きっと慎悟の周りにはこんな綺麗な女人達がいるんだ。

慎悟は周りから慕わされてて、私は鼻が高い。

でも慎悟は本当に私でいいの？

不安になつた。

私と慎悟はランチを食べると店を後にした。

『梓ちゃん、また俺らとも遊ぼうね』

『うん』

挨拶代わりだと、私は笑つて言った。

店を出ると

『お前あんなところで愛想振りまかなくていいの！ 軽く流しといたらいいんだよ！』

『うん。ごめん』

『分かったらよしつ』

また私の頭をぐちゃぐちゃにした。

慎悟はきつとヤキモチ焼いたんだ。  
嬉しい。

慎悟も私の事好きでいてくれてる。だから一緒にいるんだよね。

慎悟を信じよう。

慎悟の部屋に着き、私は気になっていた雅史君の彼女だらう人に付いて聞いた。

『今日モ力にいた女の人雅史君の彼女？』

『レナの事？』

レナって言うんだ。

『レナは雅史の女、あいつら中学ん時から付き合つてて……もう4年ぐらい経つのかなあ……それがどうかした？』

『綺麗な人だなあつて思つて』

『そりかあ……俺は梓の方が可愛いと思うけど』

『可愛いと綺麗は違うの……なんか大人だなあつて』

『そらそうだろ！ 梓よりも上だし……』

なんだか私の言いたい事が伝わってない気がする……

『……でもレナはすぐよ！雅史つてカッコいいじゃん！だから女とか嫌つてほど寄つて来るわけ……断ることもあつたけど……誘惑に負けちゃう時もあつてさあ。。』

『浮気つて事？』

『そう。それも一回じゃないなあ……でもレナは常に雅史が戻つてくるの待つてたんだよ。まつレナも気が荒いから黙つて待つてた訳じゃないけどな』

笑いながら話してくれた。今笑つて話せるつことは、今は大丈夫つてことだらう。

私は勝手にそう解釈した。

『しかもあいつ、俺らと一緒にアホ校行つてたけど、実はめちゃめちゃ頭いいの！中学ん時から俺らと一緒に馬鹿やつてたのに、何故か勉強は出来てさあ。もつと上の高校だつて余裕で行けたのに……あいつ、俺らと一緒に高校行つてんの！』

『なんでなんだろう……』

『決まつてんじょん！雅史と一緒にいたいからじょん！』

『凄いね。親は何も言わなかつたのかなあ』

『……そらつむさく言われただろ？あいつ、俺らには何も言わなかつたけど……』

『雅史君にも……？』

『言つどころか、雅史には

「別にあんたと一緒にいたいからあの学校選らんだ訳じゃないからね！調子に乗らないでね！」

『だつて！そんな事言つても分かるけどなつ』

レナさんてカッコイい。きっと雅史君の重荷にならなつように気を使つたんだ。

その時、慎悟の携帯がなつた。

『おつ啓太じょん』

『啓太？』

『由希の男だよ！梓ちょっと待つてて  
私に断りを入れ電話にでた。

『啓太かつ！どうした？』

話しの内容まではわからないが、啓太の声が電話から洩れる。  
啓太と話していると、慎悟の声が変わつていった。怒りが混じつ  
た声。

『今、由希も一緒にいるのか？俺今からそっち行くから』

慎悟は電話を切り、私に向き直した。

『梓、今日何かあつた？』

・・・なんだろう。

『何もないよ！』

一瞬、敬がよぎつたが、まさかと思いシラをきつた。

『俺今から啓太のどこ行くから、梓送つてくれ』

只ならぬ感じがした。

いつもは歩いて送つてくれるのを、今日は単車で送つてくれた。

『また連絡するから』

と残し凄い勢いで行つた。

夜になつても慎悟からの電話は来ない。  
どうしたんだろう。

その時、電話が鳴つた。

慎悟ではなかつた。

由希ちやんだ。

さつき慎悟が電話してた時、由希ちやんの名前が出てた。由希ちや  
んなら何か知つてゐかも…と思い電話に出た。

『あずさちやん？』

由希ちやんのいつもの明るい声と違つた。

芯はしつかりしているものの…少し声が震えてた。

『どうしたの？』

『…今日の帰り駅で敬と話してたよね？』

『えつ？』

見られてたの？

『私、啓太と駅で待ち合わせして…そしたら…敬と梓ちゃん話してるの見て…』

『…うん。』

見られてたんだ。。。

『啓太が梓ちゃん達のとこに行いつとしたんだけ…私止めたの…ただ話してるだけだよつて……でも敬が行つたあと梓ちゃん…泣いてたよね…？』

『…』

『気になつて、私達梓ちゃんのとこに行いついたら、慎悟さんの姿見えて…行けなかつた。』

『…』

私は何も言えなかつた。

『でもね…梓ちゃんが泣いてたの凄く気になつたの…。梓ちゃんと敬引き合わせたの私だし…。慎悟さんも泣いてたの知らない感じだつたし…。』

『…うん。』

『その後、啓太がキレちゃつて…』

『…え！なんで！？』

『啓太、慎悟さんのこと凄く慕つて…その慎悟さんの彼女が他の男に泣かされて…でも慎悟さんはそれを知らないから…』

『…うん…』

『…私止めたんだけど…啓太が慎悟さんに伝えたつて電話したの…』

…それで慎悟怒つてたんだ…

『…慎悟…由希ちゃん達のとこ行つたんだよね？』

『…うん。』

『今もいるの？』

『…それが…今飛び出して行つちやつた』

『どこいったの！？』

『…多分…敬のどこ…』

『敬の…どこ？』

『…うん。慎悟さん凄く怒つて…多分敬ヤバいよ。私・直接は見  
たことないけど…啓太が言つてた。…慎悟さん怒らせるとマジやば  
いって！』

『…啓太くんは？いるの？』

『慎悟さんが飛び出して行つてから、啓太…雅史さんに電話して…

啓太も出てつた』

由希ちゃんが泣いてる。

私のせいで、みんなを巻き込んでる。

『由希ちゃんごめん！』

私は一方的に電話を切り家を飛び出した。

『出かけてくる〜！』

『ちょっと！梓〜』

母の目に私が映る前に家を出た。

こんなところで捕まつてる場合じゃない！

話しさは後で聞くから…

どれだけでも聞くから…

今だけは許して…お母さん…

私は夢中で慎悟の家に向かつてた。

夢中過ぎて分からなかつた。家に行つても慎悟はいない。

今じつと慎悟を待つことも出来ない…

でも、慎悟の居場所が分からない…

私は行く宛もなく歩いた。

『ねえねえ。俺らと遊び行かない？』

横を見ると、原付に一人乗りした知らない男。

勿論、無視。今相手してはる場合じゃない。

『無視しないでよお。遊び行こうよお』  
急に怒りが込み上った。

『うつせえんだよ！てめえらの相手してくる場合じやねえんだよー。』  
原付の二人組はブツブツ言いながら去つていった。

早く慎悟を見つけたい！

きつと慎悟は傷付いてる。

私からじゃなく他人から今日の事を聞いた。

それは慎悟が最も嫌うことだから…

分かつてたのに…

そんな事分かつてたのに…言えなかつた。

慎悟にあつて謝りたい。

『彼女～俺らとは遊び行かな～い？』

またかよつ！？俺らとは？馬鹿じやねえの！

『いかねえつ……』

顔を上げてビックリ！

『慎悟！』

単車に乗つた慎悟と雅史君だ。

『梓やるなあ。ナンパ男を追い払つとこ見てたぞ！これで俺も安心だ！』

『梓ちゃんこええ！』

慎悟も雅史君も私の気持ちも知らないで、呑氣だ！

とりあえず私も単車に乗つた。無理やり三人乗りだ。

雅史君を送つて行つた。

雅史君が単車を降りると私を呼んだ。

何だらうと思いつ慎悟の顔をみた。

『…行つてこい』

私は単車を降り雅史君の所に行つた。

『梓ちゃん。今日の事だいたい分かつてるよね？』

『…うん』

慎悟には聞こえない小さな落ち着いた声。

『慎悟の事責めないであげてね』

『責めるなんて！…私が悪いから…』

『梓ちゃんは悪くないよ…慎悟も悪くない…男と女やっぱいろいろあるじゃん！自分の女が泣いてるのはやっぽりほつとけない。特に俺らみたいのは、言葉で上手く言つのは苦手なんだよ！だから今回の慎悟の事許してあげて！それに…あいつ（敬）泣いて謝つてたし（笑）』

『…うん。ありがとう。雅史君もごめんね。迷惑かけちゃって…』

『そんな事はいいよ。親友の事だしさ！親友が傷付いてる時、その親友の彼女が傷付いてる時…やっぱほつとけない…でも俺が行かなかつたら、敬つて奴死んでたな…』

『えつ！…』

『慎悟一度キレると收まんないから…で、いつも俺が止め役つてこと…でもまあ、慎悟の勢いに最初つからビビつてたから…』

『そりなんだ…』

『…梓ちゃん…辛い思いしたんだね。』

優しい言葉に緊張の糸が切れた。

泣けてきちゃうよ…・・・

『梓～！』

慎悟が呼んでる

『多分今日の事慎悟は言わないと思う。梓ちゃんの事も聞かないと思う。だから俺が代わりに伝えたから…』

『ありがとう。雅史君。』

『仲良くするんだよ』

雅史君に手を振り慎悟の元に行つた。

『なげえよ！雅史と何話してたんだよ？…』

分かつてるくせに

『ちょっとねえ』

私は誤魔化した。

私は単車にまたがり、走り出した。

『慎悟はいい友達持つてるね…』

『何！？聞こえない！』

『なんでもない！』

慎悟を掴む腕が強まる。

慎悟が懐かしい…。

数時間前まで一緒にいたのに…ずっと会ってなかつたような…そのまま私は家に送つてもらつた。

『…慎悟…じめんね』

慎悟は何も言わず、バイクにまたがつたまま、私を抱き締めてくれた。

『梓、おやすみ。また明日なつ』

『おやすみ、慎悟。また明日ね』

凄く長く感じた1日…

慎悟。慎悟。

ずっと一緒にいようね！

大好きだよ

## 第1-6話：失ったもの（前書き）

あらすじを変えました。

今回短いです。どうぞ読んで下さい。

## 第16話：失ったもの

私は次の日学校で由希ちゃんに謝った。

『昨日は「ごめんね』

『いいよお。そんな事』

明るい由希ちゃんに戻っていた。

『梓ちゃんと電話切つてからすぐに寛太戻ってきたの…雅史さんに慎悟のところには俺が行くから、お前は戻れって言われたみたいで』

『そりなんだ。寛太君にも迷惑かけちゃって…「ごめんね』』

『そんな事…もとはと言えば、寛太が勝手に慎悟さんに電話してこうなつちやつた訳だし…「ごめんね」…ところで、梓ちゃん敬と…』

『…』

『…「ごめんね』』

そこまで仲良くない私にこんな気遣いをしてくれる。

由希ちゃんはいい子だ。それに比べてミホは…

学校が始まつてから大分経つ…

まだ一度もミホと話していない。

私を避けているのはよく分かる。

それに今まで仲良くしてたクラスメートも、無視まではしないが、どこか素っ気ない。

クラスで除け者にされてる感じ。

どうせ除け者にされるんだつたら、その訳を聞いてみよう…ミホに直接聞こうとしたが私を避けてるため話せない。

最近ミホと仲良くしてる子に聞いた。

『ねえねえ。ミホ私の事避けてるよね?』

『…そう…かなあ』

どこか私を怖がってる感じがした

『私、別に喧嘩したい訳じゃないから…教えて』

言いづらそうに話しかけ始めた

『梓ちゃん 校に彼氏いるんだよね？』

『うん』

何故知ってるんだろう？毎朝一緒にいるから見たのかなあ・・・

『ミホ気になる人がいるって言つてたよね？』

え？知らない。そんな事言つてたかなあ・・・言つてたような気もする・・・

『そりなんだ。それが何か関係あるの？』

とりあえず、知らない振りをした

『ミホが気になつてた人つて、梓ちゃんの彼氏なんだ』

『えつ！？どう言つこと？』

『多分、梓ちゃんが彼と付き合つ前から、ミホは彼のこと好きで、それを知つて梓ちゃんは彼と付き合つたつて、彼を梓に取られたつて』

・・・そんな事知らなかつた・・・

ミホが気になる人がいる事は聞いたような気もするけど、それが慎悟！？

そんな事聞いてない！

しかも取られたつて？どういう事？

知らない。知らないよ私

『取られたつて？どういう事？』

『私もよく分かんないけど、ミホの好きな人を知つて梓が取つたつて』

知らない。本当に知らない。ミホの好きな相手が慎悟なんて・・・

『・・・ありがとう・・・もういいよ』

私は弁解する気力もなかつた。

ここで意地でも誤解を解くことはできたはず

まだミホとやり直せたはず

でも今の私はそんな事考えられなかつた。

誤解を解くどころかミホを憎いとさえ思つた。

ミホは慎悟が好きなんだ。

私から慎悟を奪おうとする人は許さない。

私は慎悟に夢中になり過ぎて分からなくなっていた。

・ミホは私から慎悟を取ろうとはしない。

・ミホはちゃんと言えば分かつてくれる子

・私はミホを親友だと思っていた事。

私は大切な事すべて忘れてしまっていた。 分からなくなっていた。

・今私は慎悟しか見えていなかつた。

その日から私はミホに話しかけようといつ氣をなくした。

それどころか・ミホに対し敵対心を持つよつになつた。

・慎悟は私の！と言わんばかりに。。。。そう思つ反面見下していた。

あんたの好きな慎悟は、私の彼氏なんだから。。。私を選んだんだから

・と。

私には慎悟がいる。

ミホなんていなくてもいい。

一度は親友と思ったミホを私は簡単に切り捨てた。

私は、私の中からミホを捨てた。。

## 第17話：解放

ミホとは話していない。

私は学校で由希ちゃんと過ごすことが多くなった。

慎悟と啓太が知り合いつてこともあり、由希ちゃんととは話しても合つたし、楽しかった。

由希ちゃんのグループの子達とも少しずつ話すようになつた。  
それも・慎悟の存在が大きかった。

由希ちゃんと他10人のグループ

その内由希ちゃん含め7人が彼氏いる。

その内5人が慎悟のいる 校の生徒と付き合つている。

だから、私が慎悟の彼女とあつて興味があるみたいだ。

ミホが居なくなつてから・・学校で友達はいなかつた。  
でも今は慎悟のお陰で由希ちゃん達と友達になれた。  
こんなところでも慎悟に助けられてる

私は自然と由希ちゃん達のグループの一員になつていた。  
学校の外でも一緒にいるときが多くなつた。

外から見ると華やかなグループ、人達に見えた。  
実際中にはいると、イメージとは違つた。

彼氏に悩んでたり

親の事で悩んでたり  
悩み事は一緒だ。

男の人と付き合つたことがない子さえいた。

あとわかつたのは、10人もいるグループ。  
グループの中にもグループがある。

学校で過ごしたりするのはみんな一緒。  
でも、大体みんな2・

3人に軽く別れていた。

私は最初は由希ちゃんと仲が良かつたが、特に真弓と恵里と仲良くなった。

由希ちゃんはあまり学校に来ない。  
かつたるいみたいで…

真弓は高校に入つてから、友達に紹介された他校の同じ年の人と付き合つているみたいだ。

恵里は私達の一つ上の彼氏がいる。慎悟と一緒に学校の人。慎悟の一つ下だ。恵里が中学の時から付き合つてゐみたい。

敬は、慎悟との一件があつてから、私に話しかけることはなかつた。

私と田を合わすこともなかつた。  
最近姿を見ないと思つたら、学校を辞めていた。  
辞めた理由はしらない。

多分、敬が言い出したのだろう。

学校の男の中で、

梓はヤバい人と付き合つてるから、手を出さない方がいい。  
という噂が流れていた。

口説く男は勿論、口説くつもりはなくとも、私に話しかけて慎悟に目を付けられるのが怖いんだろう。

今では、学校で私に声をかける男はいない・・・  
私はそれでもいい。

学校にいれば、真弓や恵里がいる。

学校を出れば慎悟がいる。慎悟以外の男なんかいらない…

- 今日は慎悟と一緒に帰らない。

用事があるから、先に慎悟の部屋に行って待つ事になつていて。他人の家にその家人（慎悟）がいないのに入るのは初めて緊張した。

でも慎悟の親は絶対慎悟の部屋に入つてこない・・・

慎悟と付き合つて、もう3ヶ月、この家・・・この部屋には何十回数えられないほどいるが、一度も慎悟の親に会つた事がない。。。。

私はこの部屋で一人で何をしたらいいか分からず、テレビも付けないで、じつと座つていた。

フツとクローゼットが開きっぱなしになつていてるのが気になつた。クローゼットの中には前に慎悟が見せてくれたアルバムがあつた。その横に、小さなアルバムがもう一つあつた。

私は無性にそのアルバムがきになつた。

見たい！でも勝手に見ちゃいけない・・・

私は自分の好奇心に負け理性を失つた。

慎悟はまだ帰つてこない・・・

私は小さなアルバムを手に取つた。ゆっくりアルバムを開いた・・・

…見なきやよかつた。

一ページ見て思つた。

写真には慎悟と…慎悟の隣には女人の人…悔しいけど、凄く綺麗な人…

レナさんを見たとき綺麗と思つた。でも、写真に映る人はレナさんよりも断然綺麗・・・

ページをめくる手は止まらなかつた。

アルバムは最後まで、慎悟と女人だった・・・。

二人で頬を寄せた写真

幸せそうな笑顔の写真

キスをした写真

二人の思い出がつまつた写真

私は初めて嫉妬した。

足音が聞こえ、私は急いでアルバムを締め合ひた。

慎悟が帰ってきた。

私はなにもなかつた用に慎悟を迎えた。

『おかえり』

『ただいま』

その日私達は久しぶりに躰を重ねた。

慎悟と躰を合わせていても、写真の女の人が気になつた。

あの人ともこいつ事してたんだ…

慎悟に聞きたい。

あの人は昔の彼女なの？

どうして私といひのに、まだアルバムを大切にしてるの？

まだ慎悟の中に彼女はいるの？

聞きたい事が沢山ある。

…聞けない

女々しいのは嫌だから…

女々しいと思われるのが嫌だから…

あれから、どれだけ慎悟と一緒にいても…どれだけ躰を合わせ

ても…どれだけ慎悟に

「愛してる」

と言われても…写真の人を忘れる事はなかつた。

何故なら、慎悟のあんな顔を見たから…

私には見せない顔…

アルバムの中の慎悟はいつも楽しそうで…癒されていた。

私には見せない慎悟の癒された顔。

それだけ、彼女の存在の大きさを魅せられた気がしたから…

彼女に対する嫉妬は日に日に大きくなっていく。

その日たまたま由希ちゃんが学校に来ている。

由希ちゃんなら知っているかも…

『由希ちゃん。 聞きたい事があるんだけど、ちょっとといい?』

『うん。 どうかした?』

『慎悟の事で…』

私達は屋上に向かった。

『慎悟さんと何かあつたの?』

『そういう訳じゃないんだけど… 慎悟が昔付き合つてた人の事なん

だけど…』

『私が知つてることなら話すけど… 梓ちゃんも分かってると思つけど、慎悟さんカッコいいから… 聞いて良いことばかりじゃないよ!… それでもいいの?』

『…いいの』

心の準備は出来ている…

『なら…私の知つてる事は話すよ』

『慎悟の昔の彼女で凄く綺麗な人いた?』

『瑠美さんじゃない?』

『名前は分かんない…』

『瑠美さんは、梓ちゃんと付き合つ前に慎悟さんと付き合つてた人。

凄く綺麗な人だつたなあ』

『…どういう付き合いしてたの?』

『詳しく述べ知らないけど… 慎悟さんと一年ぐらい付き合つてたんじやないかな… 本当に綺麗な人でお似合いの一人だつたよ… あつ

…ごめん』

『いいの。 続けて』

『瑠美さんは梓ちゃんと付き合つ半年前に別れたの。 瑠美さんに

他に好きな人が出来たみたいで…慎悟さん振られたの…それでもまだ瑠美さんのこと引きずつて、瑠美さんが戻つて来るつて信じてたんだつて…でも戻つてこなくて、凄く荒れてた時期もあつたんだつて…で、梓ちゃんと出会つてつて感じかな』

『まだその人の事忘れてないのかなあ』

『ん~。でも、みんな言つてるみたいだよ。梓ちゃんと付き合つてから慎悟さん落ち着いたつて!それつて、梓ちゃんのこと好きだからでしょ?』

『まだ忘れてはないのかなあ』

『私が思うに…人つてそんなに簡単に忘れないと思うよ。特に自分がマジになつた人の事は…ずっと忘れないと思う!上手く言えないけど、もし、私が啓太と別れたとするじゃん!私は他に好きな人が出来たとしても、きっと啓太の事は忘れないよ!自分が真剣に愛した人だしさつ!だから心の中にはずっとこると思つ。おばあちゃんになつてもね』

『そういう物なのかなあ…』

『私はそう思うよ!だから慎悟さんの中に瑠美さんがいても不思議じゃないよ!だからつて今でも瑠美さんが好きつていうのは違う感じがする。今大切なのは梓ちゃんだと思つよ』

『そういう物があ。ありがと!。由希ちゃんの話し聞いて楽になつた』

『よかつた。役に立ててーでもこのこと慎悟さんに言わないでね。啓太に怒られちゃう』

『言わない。私も慎悟に内緒にしたいし』

由希ちゃんの意見に納得した。

相談してよかつた。

私はやつと『眞の人から解放された。

今は私が彼女…

私の彼氏は慎悟。  
お互い好き。  
その気持ちで十分だよね！  
慎悟との今を大切にしよう。

## 第18話：離れないで…

「もつ季節は冬。

慎悟と付き合つて4ヶ月が経つ。

もつすぐクリスマス…という時、一つの事件が起きた。

由希ちゃんと啓太君が別れた。

理由は啓太君の浮氣だった。

由希ちゃんはそれが、どうしても許せなかつたらしい。

それから、由希ちゃんは一段と学校に来なくなつた。

私が最後に由希ちゃんと会つたとき私に言つた

『私、啓太と3年間一緒にいたんだ。離れる事なんて考えた事なかつた…この先ずっと一緒にと思つてた。…でも、案外別れるときはあつさりなんだよね。びっくりしちゃつた。』

『戻ることはないの?』

『ないよ…私の中でちゃんと整理したから…啓太のことも片付けちゃつた…』

とても悲しい声…泣く…にも疲れてしまったかのような…悲しかつた。

それから間もなくして、由希ちゃんは学校を辞めた。

私は相変わらず学校帰りは大抵慎悟といふ。

『もうすぐクリスマスだね』

『だなあ…梓一緒にいれる?』

『うん!…』

『今年クリスマス土日じやん!泊まりにこない?』

『いいの?..』

『梓が良ければ』

『全然いいよ』

彼氏と過ごす初めてのクリスマス。しかもお泊まり私はクリスマスが来るのを楽しみに待った。

12月24日

朝から慎悟の家に向かつた。

親には友達の家に泊まると言った。

今はもう昔の私とは違った。

親と話すことも少なくなり、毎日夜遅く帰る。母親も昔とは違った。

出かけるときも、誰と行くの？早く帰りなさいよ！など言わなくなつた。母がそれを言う前に私がいなくなつてゐるつていう感じだが…夜遅く帰つてもうめでたく言わなくなつた。きつと諦めたんだろう。

今日は夜、慎悟と雅史君とレナさんと飯を食べに行く予定。私が朝から行つても特にすることはない。

でも少しでも長く慎悟といたいから…

私達は雅史君達と待ち合わせの時間まで、テレビを見たり、昼寝をしたり、話をしたり、ゆっくり過ごした。

-集合時間になり、私達はバイクにまたがり向かつた。

4人で会うのは初めて…

雅史君とはよく会つけど、彼女のレナさんと会うのは、私が初めてモ力に行つたあの日以来…近くで見ると一段と綺麗…その時嫌な思いがよぎつた。

きつと数ヶ月前までは、この場所…私がいる場所に瑠美という人がいたんだ…悲しくなるから止めた。

今日は楽しいクリスマスなんだから！

レナさんは優しかった。

もっと怖い人を想像してたけど…凄く気が回る人…

私のお皿にご飯を取ってくれたりした。

-集合時間になり、私達はバイクにまたがり向かつた。

4人で会うのは初めて…

雅史君とはよく会うけど、彼女のレナさんと会うのは、私が初めてモ力に行つたあの日以来…

近くで見ると一段と綺麗…

その時嫌な思いがよぎつた。

きつと数ヶ月前までは、この場所… 私がいる場所に瑠美とい

う人がいたんだ…

悲しくなるから止めた。

今日は楽しいクリスマスなんだから！

レナさんは優しかった。

もつと怖い人を想像してたけど…凄く気が回る人…

私のお皿にご飯を取ってくれたりした。

慎悟や雅史君が煙草を吸えば、軽く灰皿を差し出す。

そんな気遣いが出来る人…

私達はご飯を食べゆつくり色々な事を話した。

私と慎悟の事…

雅史君とレナさんの事…

学校の事…

時間はたっぷりある。私達は今の時間を楽しんだ。

私達は店を出た。雅史君達とはここでサヨナラだ。後はお互い一人きりで過ごす時間…

慎悟・雅史君・私・レナさんといった感じで店を出る。

慎悟と雅史君は楽しそうに大分前にいる…私が店を出て慎悟のところに行こうとしたとき…

レナちゃんが小さな声で、

「梓ちゃん、めん」

て言つた。

私が何だらうと思つて、振り返ったとき、レナちゃんは叫んでいた。

『慎悟～！瑠美！あの人と別れたんだよ…泣いてたよ！

「慎悟に会いたいって」

』

一瞬四人の時間が止まった…。

私は頭の中が真っ白になつた

『レナ！』

一瞬の沈黙を解くかのように、雅史君は怒り混じりに叫んだ。  
止まつた時間は流れ出した。

私はレナさんの言葉の意味を理解した。

理解するとともに、私の居場所がなくなる気がした。

…私どうしたらいいの？

…私ここにいるのに…消えちゃいそうだよ

歩きたいのに…慎悟のところに行きたいのに…地面に張り付いたように足が動かない…

その時足が動いた！

慎悟が私の腕を引っ張つてくれてる。

『じゃあなつ！お休み！』

慎悟は私の肩を強く抱きながら歩き…何もなかつたように雅史君達に別れの挨拶をした。

『……慎悟～！』

私達がバイクに向かつて歩こむときも、レナさんの叫びは聞こえた。

『止めるレナ～！』

レナさんを止める雅史君の声……

慎悟は振り返らなかつた

慎悟に離されたら、止まつてしまつた足……

慎悟はずつと支えてくれた。

慎悟の部屋に着いた。

暗い部屋……

慎悟は部屋の電気は付けず、部屋の隅にあるライトを付けた。  
少し……ほんの少し明るくなつた部屋……

私達は会話をなくした。

私は慎悟に聞きたい事などなかつた。

：瑠美さんることを……

私の頭は壊れてた。

考える力をなくしてた。

『……梓？』

慎悟が読んでるのに……言葉が出ない。  
でも慎悟の方を向いた。

『こっち来て』

黙つて慎悟に並んでベッドに座つた。

『手。出しちゃ……』

慎悟に言われるまま手を出した。

『クリスマスプレゼント～！』

そっと私の指に通した。 指輪

『お揃い!』

慎悟は優しく微笑み自分の手を見せた。

『…ありが…と』

嬉しくて、自然と涙がこぼれる。

『…ありが…と…』

何度も言つた。

何度も言つても足りないくらい…

慎悟はそっと私を抱き締めた。ずっと抱き締めてくれた。

慎悟がいてくれたら私は何もいらない！

何も望まない。

慎悟が側にいてくれるなら何でもする  
だから…私から離れていかないで…

12月25日

クリスマスも終わっちゃうといつも寂しさがあった。

『今日は一人で出かけようぜ！』

『うん』

私達は付き合つてから、いつも一緒にいたけど、出かけるって事をしてなかつた。

学校帰りは、大抵モ力に寄り、慎悟の友達と過ごす。

休みの日は慎悟の家でまつたり…

といった感じで数ヶ月過ごしてきました。

私は慎悟と過ごすどれも楽しかつた。

嫌だなんて思つた事一度もない。

…でも、デートはやっぱり嬉しい。

慎悟は水族館に連れて行つてくれた。

本当に楽しかつた。

帰り道海に連れて行つてくれた。

冬の海つて綺麗・・つて事慎悟に教えてもらつた。

夜景を見に連れて行つてくれた。

初めて見た夜景・

言葉を失うほど綺麗・・

今日1日私達は色々なとこに行つた。

思い出を作るよう

別れ際、慎悟は言つた

『梓、愛してゐる』

いつもより重い言葉・・

『私もだよ!』

私は一人になり、幸せを噛み締めていた。

それと共に、恐さが込み上げた。

慎悟の事大好き…好きで好きでたまらない。

その分、慎悟がいなくなつた事を考えると恐い…

## 第19話：別れ

慎悟を好きになればなるほど……不安になる。

今日も学校帰り、慎悟と王力に寄り、慎悟の家にいき、いつも通りの一日……

……慎悟の携帯が鳴るまでは……

慎悟の携帯が鳴った。慎悟は携帯の画面を見ると、携帯を閉じた。

『……出ないの？』

『梓と一緒にいるのに、電話に出るのが時間が勿体無いじゃんー。』

慎悟は冗談っぽく言った。

でも私は見逃さなかつた。

着信の画面を見た慎悟の切ない表情……

……まだ鳴っている。

……切れた。

……また鳴つた。

……慎悟はまた携帯を閉じた。

『出ないの？』

また聞いた。

『いいんだよ！』

少しムキになる慎悟……

そうしているうちも、携帯は鳴つたり止んだりを繰り返していく。

『出なよー。』

ムキになつてるのは私だ……

『……はー。』

静かに出た

電話の向こうの相手は女だ。しかも泣いてる……

電話からかすかに漏れる声……

瑠美さんだと直感した。

意外に私は冷静だった。

慎悟が電話に出る前から…私が

「出なよ」

と言った時から…んん。最初に携帯を閉じた時から分かつっていた。

…瑠美さんからの電話だつて…

分かつてた…

慎悟は電話を切ると

『「めん梓！」』

そう言い残し、飛び出して言った。

私の返事を聞く前に…

慎悟が飛び出して行くことも分かつっていたような…

私は一人部屋にいる。

不思議と泣くこともなかつた。

最後の結末までも分かつっていたように落ち着いていた…

私は静かに立ち上がり、慎悟の部屋を後にした。指輪を置いて…

もう一度来ることのない部屋

静かな夜の道をゆっくり歩いた。

いつも慎悟と歩いた道を今は一人歩いている

…慎悟と過ごした楽しい時間が蘇ってきた。

今になつて涙が出る。

でも私の足は止まることなく歩いてる…前に進んでる…

涙と一緒に慎悟を流してしまおう。

私はゆっくり、ゆっくり歩き泣いた。

慎悟を流すにはまだ涙がたりないよ…

慎悟との事…流すには歩く距離が短いよ…

…

枯れるかと思つほど涙はでた。。

沢山泣いた。。

家の前で涙を拭いた。

この扉を開ければ慎悟とは完全に終わり……

勢いよく家に入った。

ベッドに横になり、ボーッとした。

…終わっちゃった…

もう涙は出ない

出れない。

由希ちゃんの言葉を思い出した。

「案外終わりはあつさりなんだよね」

ほんと…自分がここまであつさりいくとは思つてもみなかつた。

もつと泣きじゅくり、もつと氣を荒らすと思つてた。

よく別れは突然くると言つ。

…でも、私も由希ちゃんも、きつと別れを予感してた。  
好きだから…愛してるから…ずっと見てるから…  
一つ一つの表情・変化を見逃さない。

そして、別れの予感を感じるんだ。

そして、知らない間に自分の気持ちを整理してゐる。  
私も由希ちゃんもその整理が別れだつた。

私は疲れて、とつても疲れて、眠つた。

慎悟の事好き過ぎて、だから不安で、私疲れちゃつたよ慎悟。

私はぐつすり寝た。起きたのは暁。

携帯のランプが光つてゐる…お知らせだ…

慎悟からの電話

履歴が埋まるほどの着信。

こんなに鳴つてたのに私寝てたんだ。

私は慎悟に電話をしなかつた。

私は昨日しつかり自分の気持ちにケリを付けた。

でも、慎悟の声聞いたら気持ちが揺らぎそうだから…

それに、慎悟に別れを告げられるのが怖かった。

今日は久しぶりに咲美に会う。最初慎悟とばかりで咲美と会つてなかつたから…

私はもう一度自分に言い聞かすよつて、慎悟との別れを咲美に伝えた。

私が普通に話している事が不思議だつたのか

『梓強くなつたね』

『そうかなあ』

強くなるつて決めたから…

『私、もつと落ち込んでると思つてた』

『ん。自分でちやんと整理したから…落ち込んだつて、泣いたつて、何も変わらない。ならそんなこと止めよつて…』

『強いなあ…梓』

慎悟からの電話はまだ鳴つてゐる。1日5回ぐらい…私の携帯のメモりから慎悟は消えてる。でもずっと…毎日見てきた番号…覚えてる。知らない番組からも鳴る。多分雅史君だらう。

私は出なかつた。

しばらくすると、一人からの電話は鳴らなくなつた。本当に終わつた

私はいつもの日常に戻つた。ただ隣に慎悟がいないだけ…寂しさを紛らわすように、毎日遊んだ。

恵里や真弓と…毎日…毎日…夜遅くまで…家には寝に帰るだけ…

学校に行かない日もある。静かに授業を聞いていると、慎悟を思い

出し寂しくなるから…

一人で歩いていても、ナンパはされる。  
なんの抵抗もなく付いて行つたりした。  
好きでもない男と付き合つたり…好きになれるかもしれない…  
でも好きになれず、すぐに私が別れを言ひ。  
また違う男…男…男

転々とした。

どれも長くは続かない。1ヶ月…半月と保たない。

一夜限りの男も沢山いた。

どれも駄目。

慎悟と別れて2ヶ月が経つ…

短い間に私は色々な男と関係を持つた。家に帰ること、学校に行く  
ことも忘れて…

どれも、私の心を満たしてくれない…  
どれだけの男と寝ても…

どれだけの男に

「愛してる」

と言われても…

私の心は満たされなかつた。

躰目当ての男は、その場だけ…  
会つて間もない私の事を

「愛してる」

と言つ男…

どれも信じられない。  
どれも詰まらない。

今日は恵里と真弓と遊ぶ事になつてゐし、卒業式だけだから、午前中で終わるから学校に行つた。

一年の私には卒業式なんて関係ない。  
ずっと寝てた。寝てる間に終わつてた。

私達は早々に学校を後にし、バスに乗り込んだ。

『とりあえずカラオケでも行こうよ』

『行こ行こ』

恵里の提案に私と真弓は乗つた。

私達は行きつけの駅の近くにあるカラオケに行くことにした。  
バスが駅に近付いて行くと、

今日は卒業式とあつて、駅には、花束を持つた色々な学校の卒業生  
らしき人がたむろつていた。

慎悟も卒業かあ

いつも私の隣にいてくれた慎悟

短い間だつたが、私達は愛し合つた。

ほんの少し前の事なのに、凄く懐かしく感じた。

駅に沢山いる卒業生の中に慎悟の姿を見つけた。

まだ私は慎悟を目で追つてゐる。

慎悟と毎朝歩いた場所を歩いてても…

慎悟と帰つたこの駅にいても…

慎悟の姿を常に探してた。

…でも、別れてから一度も会つことはなかつた。

私は窓際に座り、動くバスの中から慎悟を目で追つた。

慎悟達がいる前を通り過ぎバスが止まつた。

慎悟は私に気付いていない。

私は見てたよ…慎悟…慎悟の晴れ姿…この日に焼き

付けたから…ありがとう慎悟…

私は慎悟にお別れ出来ないままでいた。

でも今出来た。

慎悟は私に気付いていない。  
それで良かった。

今の私は慎悟と付き合つてた私と違つてしまつたから。  
汚れてしまつたから。

慎悟に合わず顔ないから。

私達はバスを降りた。

カラオケに行くには慎悟達の前を通らないといけない。…どうしよ  
う…

恵里と真弓は慎悟達とは逆の方向に歩きだした。

『カラオケ行かないの?』

私は聞いた。

『カラオケこっちからでも行けるじゃん!』

恵里が言った。

『梓が向こうから行きたいならいいけど?』

真弓が悪戯っぽく言つた。

私を思つてくれたんだ。

『…ありがと』

慎悟に気付かれることなく、私達は歩き出した。

『梓ちゃん!』

聞き覚えのある声…

振り返ると雅史君が立つていた。

私は恵里と真弓に先に行つてゆく伝えた。

『梓ちゃん。久しぶり!』

あの頃と同じ笑顔…

『久しぶりだね』

『元気してた?』

『元気してたよ!雅史君卒業だね。おめでとう。』

『ありがとっ!』

『よく私がいる分かつたね?』

『バスの中に梓ちゃんの姿見つけて!梓ちゃんは俺に全然気付いてなかつたけど!…慎悟見てたもんね?』

雅史君はするどいなあ。

『何言つてんのお?』

誤魔化すのでいつぱいだ。

『梓ちゃんの元気な顔見れて良かつた!…心配してたんだ!』

『私は元気だよ!…慎悟は元気?』

『相変わらずだよ!』

『…そつか』

『またどこかで会えるといいなつ』

『そうだね!』

雅史君と別れ際、私は雅史君と田を反らしながら、遠くの慎悟を見た。

一瞬慎悟と田が合つた気がした。

私は慎悟を見つめる事はしなかつた。

そのまま後ろを向き歩き出した。

雅史君は私が一瞬慎悟を見た事を見逃さなかつた。

『梓ちゃん!』

『何?』

軽く振り返つた。

『まだ戻れるんじやねえの?』

『どこに?』

雅史君が真剣な顔をして近付いて來た。

『慎悟と…まだやり直せるんじやねえの?』

『何言つてんのお?』

『今でも慎悟の事好きなんだろ?』

『慎悟の事は良い思い出だよ』

雅史君とは逆に落ち着いた口調で言った。

『なんでだよ。なんでお前らそういうなんだよ…』

『私はもう変わっちゃったの…慎悟といった時の私とは違うの私は笑顔を作れなくなりそうで、後ろを向きました歩き出した。』

『梓ちゃん、変わつたりしてねえよー今でも慎悟の事見てるじゃん！…好き合つてのになんでだよ…』

私は泣いてた。

後ろから雅史君にバレないよう泣いた。

雅史君、私、本当はまだ今でも慎悟の事好きだよー思い出になんかなつてない。

でもね…どうしても、あの時…慎悟が部屋を飛び出して行ったときの事が忘れられないの。

私…寂しかったんだよ。

慎悟に置いてかれて一人で寂しかったんだ。

悲しくて…淋しくて…心細くて…

私の中空っぽになっちゃったんだよ。

雅史君が言うように、慎悟の所に戻ることも出来るのかもしれない…でも、これも私の意地なんだ。

何の意地かは分からぬ…。

でも慎悟がいなくなつてから、私はこの意地で立つていられるの。

サヨナラ雅史君。

サヨナラ慎悟

『真』と恵里は部屋には入らず、カウンターの所で待つてくれた。

『ごめん。遅くなつて』

『いいつて！行こ！』

私達はカラオケに来ると、決まったパターンがある。

…暗黙の了解つていつのかな…

恵里が一番に歌う。

恵里が最初に歌う歌は決まっている。

いつも恵里が歌っているのに、今日はその歌が滲みた。  
昔の歌、恵里がいつも歌うから覚えた。

恋すると・苦しくて・諦めようとするけれど・ツボミのまま、この思い揃むなんて出来ない・またいつか会いたいね・でも・もう一度と会えないね・サヨウナラ…

・・涙が出ちゃう・・

その時、真弓が自分のハンドタオルを渡してきた。

『梓・・泣いていいよ・私ら側にいるから』

体の力が抜け涙がどつと溢れた。

私は泣いた。泣いて・泣いて・泣きまくった。

真弓も泣いてる…

恵里も泣いてる…

私のために泣いてくれてる…

ありがとう。

## 第20話：失い。

春

私達は二年生になった。

嬉しいことに、恵里と真弓と同じクラスになった。

毎日楽しかった。

新しい彼氏も出来た。

同じ学校で一つ上の亮。

出会いは簡単。

学校で声をかけられて、電話やメールをするようになり、付き合つことになった。

付き合つてから亮とは、大抵一緒にいた。

亮は学校では目立つた存在。

私達グループみたいな感じ。

学校では男もグループがある。

男前は自然と集まる。

同級生からは羨ましがられたが、先輩には目を付けられる。

今日も学校帰り亮の家に行つた。

真つ暗になつた部屋に電気も付けず、テレビの灯りだけ：

一人掛けの低いソファーに座りテレビを見ると、亮が私の顔を自分の方に向かせた。

私達は唇を合わせた。

亮の舌が入つてきた…私も舌を絡ませた。

亮の手が私の体を触り始めた。

私達はソファーからずり落ちるよつこ、じゅうたんの上に寝そべつている。

それでも私達は続けた。

亮は私のお腹に出し、私の隣でぐつたりしている。

『梓ちゃん…』

『梓でいいよ…』

『梓、俺の事好き?』

『好きだよ』

亮は満足そうだ。

本当に亮が好きなのかは分からない。でも、やり終えてこんな事聞かれたら、そう答えるしかない…

亮と付き合って3ヶ月…

季節も変わり制服も夏物に替えた。

この3ヶ月私は亮と付き合いながらも、色々な男と遊んだ。

勿論、亮には内緒…

亮のことは好き。

一緒にいるにつれ、徐々に好きになつていった。

…でも亮だけでは、私は満たされなかつた。その隙間を埋めるように、男友達と遊んでた。

あと数日で夏休みという時、私は体調を崩した。

体がダルい…

胃がムカムカする…

食事も喉を通らない…

風邪引いたかな…?

それでも遊びに行つてた。

少し辛いくらいで寝込むなんてもつたひない！

私は毎日胃のムカつきを感じながらも、亮と会い…体を重ねたり、

恵里や真弓とはしゃいだり、

男友達と遊んだり…体を重ねたり、繰り返してた。

…でも今日は本当にえらい…。

ベッドから起き上がりれない…

どうじちやつたんだろ？…私。

今日の予定はすべて断り一日中寝てた。

『梓～！ご飯は～？』

母の声が頭に響く。

『いらない！』

精一杯、声を出した。

その日の夜…強烈な吐き気に襲われた。  
我慢出来ずトイレへ直行した。

…本当、体調不良だ。。

そんな翌朝

『梓～！』

母の大きな声

『何～？』

『出かける用意しなさい』

なんなの！？ 私えらいのに…

『どこいくの？』

『病院連れてつてあげるから…何度もしなさい』

病院か…こんなに体調悪いし、行つとくか…

母に連れられ病院へ向かった。

えつ～？ なんで！？ 来てびっくり

『なんで産婦人科？』

かつたるそうに言つた。

『…梓、ここ二ヶ月生理きてないでしょ…』

…そういえば、きてない。

私は、生理がきてない事を忘れるほど、遊ぶ事に夢中だった。

私は何がどうなつてゐるのか分からぬまま、病院に入った。

名前を呼ばれて、看護士さんに案内され、診察場に入った。

椅子が一台あり、椅子の横にはカーテンが掛けられている。

『下着を脱いで椅子に腰かけてくださいね』

カーテンの向こうから指示された。

言われるまま、下着を脱ぎ、椅子に腰掛けた。

すると、椅子はカーテンの方に回転した。

椅子は回転するとともに、背もたれが少し倒れ、腰が上がり、足が開きだした。

男の前で私はもう何十回と股を開いている。

男の人の前で股を開く恥ずかしさを無くした。

なのに、凄く恥ずかしい・・・

器具らしき物が中に入ってきた。凄く違和感を感じる。

男の人が入る感じと全然違う・・・

すると今度はカーテンが開いた。

『これが赤ちゃんね』

先生は、私の斜め前にあるテレビにはを指差しながら、淡々と説明した。

『今ちょうど、12週あたりね』

『赤ちゃん？ 12週？

『どういう事？ 私、分かんないよ...』

『では、下着を付けて今度は隣の部屋に来てくれる？』

『はい・・・』

椅子はゆっくり元の位置に戻った。

言われるまま隣の部屋に行くと、先生は何か書き物をしていた。

看護士に誘導され、丸い椅子に座つた。

『今3ヶ月に入ったとこね。最後に来た生理はいつ？』

『いつだっけ...』

『お腹の子どうするか決めてるの？』

『どうするて...』

『… 今日お母さん一緒にね？ お母さん呼んできて  
私に確認をとり、看護士に母を呼ぶよう命じた。

『どうも…』

母は入るなり頭を下げた。

『娘さんは今妊娠しています。どうするかは決めていますか？』

『中絶します』

『そうですか。では時期も時期なんで早めに行つた方がいいのや、  
来週辺りでどうでしょ？』

『お願いします』

母はまた頭を下げた。

・ 帰り道母は何も言わなかつた

・ 私も何も言わなかつた。

・ 言えなかつた。

・ 家に帰つても母は何も言わなかつた。

・ いつもと変わらない母…

私は今の状況を把握出来ず、部屋に閉じこもつた。

真弓に電話しよう…

真弓は同じ年だが、お姉さん的存在。

『はい』

明るい真弓の声…

『… 真弓…』

『どうしたの！？』

私の声で、いつもと違つ事を察したんだね。

『私… 妊娠してた…』

『…えつ！？ 本当に？』

真弓は信じられない感じだ。

そら信じられないよ…… 私達まだ16歳だもん……。

『本当だよ…… 今日病院行つてきた』

『……亮君との……?』

『……うん』

実際は分からぬ……

真弓は私が他の男と遊んでたの知らない。

私は、亮の子だと信じたい。

その気持ちは、亮が好きだから……とは違つた。

私あんなに遊んでた……色々な人と寝た……。すべてが、どうでもよかつた……。

でも、私はここまできて、誠実さを守りたかった。

……違つ……。真弓に少しでも誠実さを見せたかった。

どうでもいいと思ってた……

所詮、男は体を許せば、満足してる。簡単だと見下していた。

友達なんか、所詮、仲良いのはその場だけ……と、諦めていた。辛

い時側にいてくれた優しさも忘れて……

なのに、こんなところで真弓に頼つてる。

真弓に側にいて欲しいと思つてる。

友達だと思ってる。

都合がいいと言えばそれまで。

でも、大切だと思った。

真弓が大切だと思った。

今日は終業式

……学校なんて行く気になれない……

真弓は、そんな私を心配して、終業式の後来てくれた。

『梓、調子どうづへ。』

『まあまあ』

『梓の親は何て言つてゐるの?』

『一瞬に病院行つてから話してなによ。こんな私はさぞうしたんじゃない』

『… なんだ… 亮君には言つたの?』

『… 言つてない。親がまだ言つなかつて… お母さんから亮に話すから… つて』

『… つか』

… つか… も母さんから亮に話すから… 確かにつかった。

それから一回… また一回と過ぎたが、母は亮に話していなかつた。

… やつぱり、あいつ(母)の言つことなんか信じられない!

私は自分の口から亮に話すこととに決めた。

面と向かつて話す勇氣はなく電話した。

『梓へどうじたあ?』

… 馬鹿な奴… 吞氣な奴…

『亮… 私… 妊娠してゐる…』

『梓、その冗談はキツいってえ…

『本當だよ…』

『マ…ジ…?』

『… マジ』

『… どうするの?』

それは私が聞きたいよ…

『おうす事にした…』

『そつか…辛いけど、それが一番いいかもな』

… 嘘つき…

辛いなんて思つてないくせに

本当はホツとしたんでしょう？ バレバレだよ。

私が今どんな気持ちでいるか分かる？ 分かんないよね…

『 そうだね…』

それしか言えない。これ以上亮と話しても無駄だ…

泣けてきた…

悔しくつて、悲しくつて…

こうなつてしまつた事、自業自得だつて分かる。

でも、こんな男と出会つてしまつた事…

こんな情けもない男を一瞬でもパパに持つたお腹の子…

悔しい。悔しい。

『 でもさ。本当に俺の子？ 梓他でも遊んでたじやん！ 俺知つてると  
私もそれぐらい考えたよ。

確かに他にも遊んでた。…子供が出来たつて分かつてから色々考え  
たよ。

今までの事、鮮明に思い浮かんだ。

他の男は必ず避妊してた。

亮は一回も付けなかつた。

それなら、亮の子つて思つた。

『 亮の子だよ…』

確信じやない。

でも、そんな事言えない。 だって言つたら私が不利じやん。

『 梓がそう言つなら信じる…けど、俺つて偉いよなあ』

・・・はあ？

『 何が？』

『 俺の子つて認めた訳じやん！ 他の男は違うよきっと…』

『 ……』

馬鹿。馬鹿。

お願ひだからこれ以上喋らないで！  
嫌になるだけだから…

『あとさあ…もう私達別れようね…』

これ以上亮と付き合つていく理由がない。

続けたつて、うまくいかないのは目に見えてる。

『そうだな。俺からも…』

『何？』

『この事、俺の親には言わないで。』

…最低…

言われなくとも、言わないよ。誰だつて嫌じゃん！親に知れたら…普通、暗黙の了解でしょ！？

口に出してしまった亮は男の価値を下げた…

それとともに私の亮に対する憎しみが膨れ上がった。

…亮だけずるい

…私は親に知られて、家の居場所をなくした。きっとこれからも…

…亮だけ何もなかつたように、のうのうと暮らしていくの？

…亮だけ…亮だけ…

私の中は亮への憎しみと憎悪で埋め尽くした。

…

次の日真弓はまた来てくれた。

昨日、妊娠することを亮に云ふえた事、亮との会話、全て真弓に話した。

『亮君最低…』

『梓このまま悔しくないの？』

『悔しこよ…悔しいけど、どうする事も出来ない…』

少し考えたすえに真弓は言った

『亮君の親に言つたら？』

『えつ！？』

『だつて悔しいじゃん！…傷ついてるの梓だけじゃん』

『……』

『梓が言えないんだつたら、私が言つてあげる』

『真弓は私の携帯を掴んだ。』

『…私が言つよ』

正直…亮の親に言つてやりたいと思つてた。  
でも、一人で立ち向かう事が出来なかつた。

今は真弓がいる。真弓も同じ意見でいてくれてる。  
今なら言える。

私は亮の自宅に電話した。

『はい。』

亮の母が出た。

『もしもし…梓です』

『梓ちゃん？どうしたの家に電話なんて…亮今いないのよ』

『…今日はおばさんに話しがあつて』

『どうしたの？』

優しいおばさんの声…亮の家にいるときは、必ず私の分も夕食を作つてくれた。

優しいおばさん…「めんね…

『…私…妊娠してるの…亮の子…』

『…亮は知つてるの？』

おばさんの声が沈んだ。

『…知つてる』

おばさんのため息が聞こえた

『お腹の子どうするか話したの？…』

『…おろすことにした』

『……そり』

え！？ ．．．それだけ！？ 自分の息子がしたこと分かつてゐるの？

また、ため息が聞こえた

『子供が出来たつて事は、そういう行為をしてたつて事よね？… おばさんの知らないところで。それは、梓ちゃんも同意だつたはずよね？』

『…うん』

おばさんの優しかつた声が、冷たい ．．．感情が無くなつた声になつた。

『それで、子供が出来るなんて分かつてたはず…。亮とあなたが勝手にした事。亮とあなたが出した答えでしょ？今更おばさんに言われても、何も言えないわ。とりあえず、話は聞いたから。』

電話は切られた。

『おばさん何て言つてた？』

『…困るつて…亮と私が決めたことでしょつて…』

『…最低。子が子なら親も親だね・・・』

私は親に訴つこと、亮に復讐出来ると思つてた。

・・おばさんは怒り、家中はめつけやくめつけになり、亮の居場所はなるなる。

そうなると思つてた。

・・おばさんは分かつてくれると思つた。同じ女だから…だから言つてくれると思つた。『じめんね』つて・・・

私の考えは甘かつた

復讐にもならなかつた。

私を分かつてくれるどころか、亮をかばつた。

…無駄だつたんだ…

手術当日までずっと真弓は一緒にいてくれた。  
せつかくの夏休み彼氏といいたいはずなのに…

『梓、準備できてる?』

『うん』

私は病院に向かつた。今日も真弓は来ててくれた。  
一緒に付いてくれた。

今日は手術。

私の赤ちゃんとがいなくなる日。

手術後2時間ほど病院のベッドで休み、家に帰つた。

姿も人の形もない命。…でも確かに存在した命が無くなつた。無  
くした。

今まで私を勢上がらせていたものが崩れていく。

見栄も…

プライドも…

体を許せば付いてくる…甘いもんだ…と見下していた男。…そう  
思つてた男に一生の傷を負わされた。

傷付いたのは私だけ…

亮とその家族は、きっと忘れるだら…「梓の嘘」

そう片付けるだら…

私の親は、恥じるだら…。こんな私を…出来た子供を…  
真弓はいつもそばにいてくれた…でも、真弓は傷ついてはない。

傷つくのは女

その言葉が支えだつた。自分が弱者になることで、支えられた。

自業自得

そんな事考えたら私は、生きる意味がなくなっちゃうから・・・

高校一年生の夏休み、一つの命がこの世を絶つた。

## 第21話：入り口

高校生活一度目の夏休み……私は子供を失った……自らが決めた事……

……この事を知ってるのは、私と母と亮とその親と真尋だけ……

『梓ちゃん、今日飲み会あるんだけど、来てくれない?』

私は高校生になつて、世間が広くなつた。

仲が良い友達ではないが、知り合は沢山出来た。

友達の友達……その友達……

横の繋がりで増えていった。

こんな誘いもショッちゅうだ。

『いいよ』

家にいてもマイナス思考になるだけ。

出よつー

私を飲み会に誘つたのは 典美<sup>のづみ</sup>。

高校は違つけど、ちよくちよくは会つてる。

まあそのほとんどが、飲み会の誘い。

私達は高校生で勿論未成年。

でも、飲み会もするし、煙草でいつも部屋ムンムン。

私もいつからか煙草を吸うようになった。

でも、その場だけ。周りが吸つてたら吸う感じの付き合い程度……

飲み会の待ち合わせの場所に向かつた。

電車で向かうから、駅まで典美が迎えに来てくれるこになつてゐる。

『梓ちゃんー!』

典美が原付にまたがりやつて來た。

運転してるのは、今日一緒に飲み会をする男の子・・・

『こんばんは』

『こんばんは……』

私と男の子は軽く挨拶を交わし、私も原付にまたがり、三人乗りで、飲み会が行われる家へと向かつた。

私が着いたときには、メンバーは揃っていた。  
挨拶も早々に交わし

『はい。梓ちゃん』  
ビールを手渡された。

『じゃあ、乾杯!』

かけ声と共にみんな一気に飲み出した。

私は戸惑つた。

…おろしてまだ一週間…お酒飲んでもいいのかなあ…

ここまできて、そんな事考へてた。

『梓ちゃん飲んでないじゃん!飲もうよー!』

この言葉も、私の状況を知らなければ仕方ない。

・・飲もうー今更自分を守る理由もない。今を楽しもう。

私は渡されたビールを一気に飲み干した。

亮の事も忘れよつ。こつまでも、憎むのは止めよつ。憎むほゞ血  
分が惨めだ。

親も… おひしたことも…

何もかも忘れるようにはしゃいだ。

夜中まで騒いで…お酒を飲んで…

無免許で原付に乗つたり…

今ある原付は2台。1台に三人乗つても台数が足りない。

今日は8人いるから、あと1台あれば、みんなで動ける。

『梓ちゃん原付乗れる?』

駅まで典美と一緒に迎えに来てくれた高哉たかやが私に向かって聞いた。

『乗れるよ』

私は数回だけ乗つた事があつた。…慎悟と付き合つてたときに、教えてもらつた。

『じゃあ付いてきて!原付パクリにいこー俺マジ上手いぜパクる(盜む)のー』

高哉は皿懶氣に言った。

今ある2台の原付も高哉が盗んできたもの。

「原付なんてその辺に『ロロロ』転がつてる(人様の)。買ひのなんて馬鹿らしい」

だつて…

『いいよ!行こー』

私と高哉は1台の原付に乗り、探しに行つた。

高哉は原付を停めた。

『ここでいいよ！俺ずっと狙つてたのあるんだ。梓ちゃんは先に帰つてて、俺もすぐに行くから』

『分かつた！じゃあ後でね』

私は来た道を戻つた。

みんなが待つ家に戻つた。原付を停めようとしたら、高哉が来た。

『高哉君早いじゃん！』

『だから俺上手いって言つたじゃん！梓ちゃんのも今度持つてきてあげるね』

『本当に？ありがとー。』

私達はみんなの所に戻り、パクつたばかりの原付を加え夜の闇に溶けて行つた。

行く宛なんてない。

夜の街をただ走り…大声を出し騒ぎ…

私達は一睡もすることなくはしゃいだ。

…こんな感じ初めて。

今までに飲み会なんて腐るほどした。

でも、ここまで楽しくはしゃいだのは初めてだつた。

今までの飲み会は、すぐに男と女意識し合つてた。

カツコイい男はいなか…。

会つた瞬間からお互い目当ての相手を見つけ、友達は女同士でいるときには見せたことのない、甘い声を出し、甘い視線を送り、誘いを待つ。

男女大勢ですることが多いので、他の女の子がラブラブ光線を送り出したら、自分の氣に入る男がないからといって、帰る事は出来ない…。次第にカップルが出来てしまつから、余り物の相手をしなくてはならない。

目当ての男がいればいいけど、いなければ最悪な飲み会になる。天と地の飲み会だ。

今回は違う。状況が今までと違う。

4人いる男のうち3人は彼女もちで、隠すことなく言つてる。

勿論、今回の飲み会は内緒らしい……。

女4人も、私と典美以外の2人は彼氏もち。それもみんな知つてる。

今回はみんな男や女を目当てで集まつた訳じゃないんだ……。飲み会が始まりしばらくしてその空気が分かつた。

みんな普段の憂さ晴らしをしたいだけ……

家にいれば口うるさい親から

私達は決して優等生ではない。学校に行けば先生にのけ者にされ彼氏や彼女……友達との悩み……

普段の日常から少しでも逃げたいだけ……忘れないだけ……

そんな気持ちが同じで集まつてるんだ。

私は典美以外会うのは今日が初めて。でもすぐに打ち解けれた。

男女の友達関係なんて成立しないと思ってた。今日それが覆された日だった。

やつと、私は居場所を見つけた。仲間を見つけた。

最高の出会いが出来た日だ。

満足感に浸りながら、朝方みんな解散した。

…最高だと思った出会いが、下り坂の入り口とも知らずに…

## 第22話：高哉の過去

飲み会以来私達は頻繁に集まるようになった。

といつても、私と典美と高哉の3人・・・

飲み会の8人揃うことはなかつた。

飲み会の時にいた私と典美以外の女の子2人は彼氏もち。高哉以外の男はみんな彼女もち。

普段の日常に戻れば、不満はありながらも、それぞれ元のサヤに戻つていく。

でも、私と典美と高哉は一緒にいた。

それぞれ用事が無いときは、高哉の家に自然といた。

私も、真弓や恵里と遊ぶ意外は高哉の家にいた。

典美がいなくとも高哉の家に行くようになった。典美も大抵高哉の家にいた。

まるで自分の家に帰るよつに私達は高哉の家に帰つた。

3人でいても気楽だつた。

一緒に空間にいるけど、みんなそれぞれの事をしてる。

携帯をいじつてたり、テレビを見てたり、雑誌を読んだり・・・

用事が出来れば、それぞれ出かけていなくなる。

それでも、家にいるよりよかつた。

家で一人でいると寂しさだけが押し寄せる。

誰かのそばにいないと不安で押しつぶされる。

世間から一人取り残されているようすで・・・

一人でいるのが嫌だつた。

典美も高哉も一緒なんだろ'づ。

私達は、その寂しさを支えてくれる相手＝彼氏、彼女、だつたりする。

友達は、結局は彼氏のとこに戻つけや'づ。

いくら一緒にいても、最後は彼氏の所に行つちや'づ。…その後私は戻る場所がない。

彼氏の所に行く友達を見ると、寂しさが倍増する。

今の私達にはその相手がいない。  
似たもの同士支え合'づしかなかつた。

私と典美が毎日高哉の家に入り浸つていても、高哉の親は何も言わない。

小さな家の庭に無数に放置してある原付を見ても何も言わない。

高哉の家は小さな長屋。 部屋に入るときも窓から。 たまに外で高哉の母と会つても私の方を見ない。  
知らん顔。

挨拶もしたことない。

今日は、典美は来ていない。 ふと気になつて、高哉に聞いてみた。

私達はお互の悩みを言い合つた事はない。  
お互い何らかの事情があるのは分かつてた。  
あえて聞かない。  
暗黙の了解だ。

でも、私は聞いた。

『私達いつもいるけど、高哉のお母さん何も言わないの？』

私は家にいる居場所がないから高哉のことについて。  
でも高哉がその事で親に言われて、嫌な思いをしてたら、私達が一  
緒にいる意味がない。

『ああ。あいつは何も言わないよ』

『そうなんだ』

それ以上は聞いちゃいけないって思った。

高哉がいいならいいや。

そう思った。…でも高哉は話を続けた。

『あいつ本当の親じゃないから…俺のことなんてどうでもここの』

『…そうなんだ』

これ以上は言えない。

でも高哉は続けた。

『俺が赤ちゃんのとき、親父とお袋が離婚して…お袋が男作つて逃  
げたんだけじゃな。で、俺と姉貴を置いて家を出た訳。…これは、  
ばあちゃんから聞いたんだけど』

私は軽く頷いた。

『それから…親父はあんま家に帰つてこなくてさつ。まあ毎日飲  
み歩いてたんじゃねえのかな。だからほほ俺と姉貴はばあちゃん  
に育てられた感じかな…俺が小学4年の時に、今のあいつと再婚し  
たんだ。話によると、親父、あいつと結婚するとき、

「子供達は置いてく」

つて言つてたみたいだけど、実際捨てれなかつたみたい。親父の心中まだ親の心が残つてたみたいで……』

高哉は淡々と話を続けた。

そう見せていただけ……きっと心の中は寂しさを思ひ出していたね。』

『あいつは渋々俺らと暮らすことになつて、でもさー結婚したからつて親父が家に落ち着くはずもなく、また帰つてこなくなつたんだよ。……それで、あいつの怒りの矛先がまだ小さかつた俺らに向けられて……』

そこまできて高哉は話すのを止めた。

『どうしたの？』

『まだ話す？これ以上話すと暗くなるよ？……まつーもう暗くなつてるか』

『高哉君がよかつたら話しつづけて』

ただ単に興味があつた。

そんな環境の子が実際いるなんて……

『今で言つて虐待？受けだしたんだ。あいつ気狂つてたから……ばあちゃんも怖くてあいつに何も言えなかつたんだ。俺が小4、姉貴が小5だったかなつ。親父とあいつの喧嘩が絶えなくなつてから、……最初は言葉で俺と姉貴を罵つたんだ。

『あんたらのせいよ』

つて感じで……それがエスカレートして、『飯食べさせて貰えなかつたり、風呂にも入れなかつたり……そう思えば、

『飯よ』

つて出て来たのが、残飯だつたり…普通野菜の捨てる部分が皿に盛られてんの！消費期限が過ぎたのとかさつ！でも、次いつ食べれるか分かんないからさあ…がつついで食べたよ…』

・言葉が出なかつた。胸が締め付けられた。

高哉は顔色一つ変えず話した。それどころか笑つてる。

その笑顔が辛い…。

辛かつただろうね。

そんな簡単に片付けられない…

『姉貴が中学入つてもまだ虐待はあつてさ。しかも、学校で姉貴がイジメにあうようになつて…風呂も入つてないし、服は毎日一緒で臭いじやん！それが始まりでさつ！幸い俺はイジメには合わなかつたけど…辛かつたと思うよ。家でも、学校でも…俺より姉貴の方があいつにひどい目に遭わされてて…女同士つてのもあつたのかなあ…姉貴は学校に行かなくなつて…家にも帰つてこなくて』

高哉は一息おいてまた話し始めた。

『こんな環境で育つて、真つ直ぐ行くわけないじやん。姉貴は中学で他校のヤンキーと付き合つようになつて…そのままヤンキーまつしげりつて感じ…多分、一人でぶらついててナンパで知り合つたんだと思つけど…勿論イジメもなくなつたし』

『高哉君にお姉ちゃんいたの知らなかつた…』毎日来てるのに姉の姿は家になかつた。

『姉貴は中学もろくに行かないまま、この家出たんだ…その時付き合つた人が19歳で、一緒に住むつて…俺も一緒に誘われたけど

断つた。姉貴は俺より辛い目にあつてたから、やつとの幸せ邪魔しきくなかったし…ばあちゃん置いて行けないじやん…その頃はもう、あいつがどうにか出来る姉貴じゃなかつたから…俺も反発するようになつて、あいつの思い通りにならなくなつたし…逆に今度は成長していく俺らにビビるようになつて、何もしなくなつたんだけど…』

『どうしたの?』

『あいつの相手が俺と姉貴から…ばあちゃんにいつたんだ…姉貴も俺も家にほほ帰つてなくて、気付かなかつた…ばあちゃん一人で耐えてたんだよ…』

『…』

『その事に気付いたときは姉貴は家を出る寸前でさつ…ばあちゃんは姉貴に謝つたんだよ

「「めんね。」「めんね。守つてあげられなくて」

つて…俺らはさあ、ばあちゃん恨んだことなんて一度もなかつたんだよ。逆に感謝してた。ばあちゃんが親みたいだつたから。姉貴との最後の別れんときに姉貴がばあちゃんの変化に気付いてさ…ばあちゃんの服をそつと捲つたんだ…。ばあちゃん…体がアザだらけでさ…』

初めて高哉の表情が曇つた…・・

『俺、姉貴の後ろに立つてたんだけど、何も言わず、あいつが居る台所に向かつたんだ…あいつがばあちゃんを…つて、その時初めてきづいたんだ…自分が情けなくてさあ。ばあちゃん辛かつただろうつて…俺はあいつのとこに歩きだしてた。あいつを殺そうつて…そしたらさ…姉貴が凄い勢いで後ろから俺を押しのけてつたんだ。俺もその後に続いて台所に入つたら、姉貴は包丁をあいつの喉元に当てる…』

「てめえ…ばあちゃんに何してたんだよ!」

つて、すげえ勢いでやつ、あいつが何も言こ返せなくて』

高哉はすつきりしたよつに笑つた。

『「てめえ今度ばあちゃんに近付いたら殺すぞ…」つて…もつあいつ完全にびっくりして、その後姉貴は俺に言つたんだ

「ごめんね。高哉。ばあちゃん守つてあげて…」つて…

姉貴はばあちゃんに何度も何度も泣いて謝つてた。で、姉貴は家を出たんだ。』

『…今お姉ちゃんは…』

『今はその頃の彼氏とは別の男と一緒に住んでる。俺もばあちゃんも姉貴が一人で家を出た事恨んでなんかない…幸せになつてほしいし…。今もたまに顔だすよ…』

『おばあちゃんは…』

おばあちゃんがいた事も知らなかつた。

『…ばあちゃんは姉貴が家を出て半年ぐらいして…死んだ。それから、あいつと俺とこの家で一人つてこと…姉貴があいつを怒鳴つてから、あいつは俺やばあちゃんと話さなくなつたんだ。お陰で…短い間だけ、ばあちゃんと昔に戻つたみたいに過ごせたし…だから俺が何してもあいつは何も言わないつて訳。親父も帰つてこないんだし、あいつ出て行けばいいのに…ずっとこいつの』

高哉は茶田の氣たつぶりに言つた。

『向でおばあちゃんは…』

『俺が思つて、まだ親父のこと好きなんだと思つ。』『…れば親

父が帰つてくる・・・って思つてゐるんぢやねえ?』

・ まだ好きだからか...

おばさんも大変だつたんだ... でもーおばさんのしてきた事は人として許せない。

『... 高哉君は... もつといの?... おばさんの事許してゐ?』

『ん~。 一言ド<sup>ト</sup>詰<sup>ハ</sup>れば許せない。 でも、何年も親父を待ち続けてる事は凄いと思ひ。』

『それって、許してるのは違つの?』

『違う! 俺が受けてきた仕打ちは今は何も思わない... けび、ばあちゃんを思い出すと、今でも、あいつを殺したいって思つ... あいつを家族とは昔も今も認めてない... 他人と暮らしてる感じかな』

高哉は幼い頃から凄く重いものを背負つてゐるんだ... 今笑つて話してゐるのも、高哉の意地だと思つた。

『梓ちゃんは?』

『ん?』

『俺ばつか話したじやんー梓ちゃんも自分の事話してよ』

『... 私があ』

『そつそつーー一人で暴露大会ー』

高哉は明るく言つた。

『私は何もないよ... 強いて言つならただ親がウザいだけ』

・ 『ひめん高哉。 私まだ言えない。』

・ 一番愛した慎悟の事

・ 子供の事

まだ言えない。

忘れたつもりでいたのに…

本当は、私は何も忘れてない。

無理やり胸の中の箱に仕舞い込んでるだけ…

出でこないよつて、無理やり蓋をしてる。

私の中の箱はもう一杯になつて、少しの揺れでこぼれ出しきつくなつてゐる。

今、高哉に話したら…全てがめちゃくちゃにこぼれちやう…  
高哉は辛い過去を話してくれたのに…でも、もう少し待つて…もう  
少し片付けたい。私の箱の中が全て過去になり、順番に出てくれるま  
で…

『最近、典美こないねえ』

『そういうやうだなあ……』

あれほど毎日高哉の家にいたのに、最近・典美的姿がない。

『ちよつと電話してみるわ』

『おう』

高哉は寝転がって漫画を読みながら返事をした。

・・・・・

『はーー』

『典美？ 最近何してるの？』

『実は…彼氏できたの…』

『やつこいつ…』

理由が分かった私は、さつさと電話を切った。

『典美何て？』

『彼氏出来たんだって』

『…そつか。良かつたじやん』

高哉は漫画から話を反らすことなく答えた。

『私は寂しい。』

『彼氏が出来た事は良かつたと思つ。でも、寂しいよ。』

『私…また取り残されてる…』

『…梓ちゃんも早く彼氏見つかって。こつまでもこなとこに居な

いで。』

…高哉も私が邪魔になつたの…？

『私…こない方がいいの？』

『そういう意味じやなくて…ただ単に梓ちゃんにも彼氏できたら  
なあ…つて…『めん…』

思わぬ返答に高哉は汗つて言い訳した。

高哉の慰めも耳に入らない…

…私、寂しいよ…

いつも、典美と高哉と三人でいた。

私は孤独だった。

典美も高哉も私と同じ気持ちなんだと思つてた。そこに私は居場所  
を見つけたと思つていた。

でも本当は違つたの？

…私は、誰かに必要とされたい  
そう思つていたのは私だけ…？

典美は彼氏が出来て新しい居場所を見つけた。

高哉も、彼女が出来たら、違う居場所を見つけ、私はここには居れ  
ない…

そう思つた私は平常心を失いかけていた。

『…私…どこにいけばいいの？ ほかに行くところなんてないよ…』

『急にどうした？』

高哉は訳が分からなといつた感じだ。

『私にはここしか居場所がないの…ずっと孤独なんだよ…』

『なんでそんな事言つんだよ！ 梓ちゃん友達いるじゃん！』

『友達はさあ。結局最後は男んとこいぐのー。』

『だったら梓ちゃんも彼氏作つたらいじちゃんーすぐ出来るでしょー?』

『』

私の気持ちを分かつてくれない高哉にムキになつた。  
高哉は私がムキなる理由が分からぬから、高哉の声も荒だつてい  
つた。

『男はさあー……』

その先を言つのを止めた。

確かに高哉の言つ通り、彼氏を作つと思えば作れる。

でもね、私を

「好き」

だと言つてくれる男…

体だけでも私を必要としてくれる男…

どんな男と付き合つても…

どんな男と寝ても…

相手を好きじやないと私の寂しさは埋まらなかつた。

私の居場所じやなかつたんだよ…

現に寂しさを紛らわすのに男に走つた私は…

子供を失つた。

私の身勝手な行動が生んでしまつた命…

私の身勝手で命を失つた子…

『男は何だよー?』

『…男は裏切るんだよー』

「うとしか言えない。

この言葉を高哉なりに考えたのか、高哉は黙りこんだ

『……『めん。俺だつて孤独だよ……。でも・言葉に出すとひれあ……余計辛いから……強がつてんだよ』

落ち着いた声で高哉はいった。

私の頬に涙が伝つた。

その涙は寂しいから……辛いから……って出た涙じゃなかつた。高哉も同じなんだつていう安堵感から出た涙だつた。

高哉は座つている私に近付き、私を抱き締めた。

私も高哉を抱き締めた。

今まで男と抱き合つた感じとは違つ。とても力強く、私を抱こうとする感じではない。でも、凄く落ち着く感じ。

『梓ちゃんの居場所はここ……』

高哉は小さい声で力強く言つた。

『いいの?』

『いいよ!梓が来たい時に来たらいい……梓がいるところが俺の居場所

……』

『あつ今、梓つて言つた』

『うん。俺の事も高哉つて呼んでよー』

『分かつた高哉』

お互に寂しさを分かち合ひよつて抱き合つた。

『でも高哉に彼女が出来たら、来れないよね？』

高哉の体を離し、『冗談。ぼく聞いた。  
でも内心は本気の問いだ。

『ん～。その時はどうするかなあ。また別の場所に俺と梓の居場所  
作るか？』

『だね！』

それで私は満足。

高哉とはずっと一緒にいれるんだ。

## 第24話：誓い

高校一度田の夏休みも半分を過ぎた。

この夏休み私は一生忘れる事のない思いをした。  
その事で分かった男の本音

家で無くなつた居場所

一人になると思ひだす。

中絶するときの麻酔の感じや、あれほど私を

「好き」

だと言つてた亮の軽はずみな言葉。  
だから一人でいたくない。辛くなるから・・・

今日も高哉の家に向かつた。

寂しさを分かち会つ事で居場所を感じるから…

・・ガラガラ・・

いつも通り窓から部屋に入つた。

一瞬でいつもと違う事を察した。

臭つ

この鼻を突く臭い何？

でもどこかで搔いた臭い・・・?

！油性マジックの臭いだ！

高哉はベッドに座り、ビニール袋を口にあてている…

?

『高哉？何してんの？』

私の問ひに答えない。

私は高哉のそばに寄り顔を覗き込んだ。

『高哉？』

高哉は私の顔をジッと見つめた。

・・・いつもの高哉と違う・・

私は分かった。今高哉が何をしているのか…

高哉はシンナーを吸つてる・・・

『あるさかつ…』

舌が回つていない。

…私どうしたらいいの？

いつもと違う高哉。

高哉を初めて怖いと思つた。

『あるさも吸つ・・・？』

ビニール袋を私に差し出した…

『・・・・・つと』

断つたら高哉を裏切る事になると思つた。

高哉は私の寂しさを分かつてくれた。今高哉がこいつしてゐるのも何か訳があるはず…

高哉は私を居場所だと言つてくれた。

断れば高哉を一人にさせちゃう。

私は高哉が差し出したビニール袋を受け取つた。

高哉は笑つた。

とても嬉しそうに…

とても無邪気な笑顔で…

高哉はまた違うビニール袋に透明の液体を入れ、口に当てる。  
私は見よう見まねで、高哉から受け取ったビニール袋を口に当てる。  
た。

・ なんだろうこの感じ ・・

気持ちいい ・・

今まで考えていた事が分からなくなる・・

目の前に見える物がどうでもよくなる・・

今自分がしている事がどういう事なのか考えられない・・

私の頭は止まつた。

きつと考える事を止めてしまったんだ。  
なんて楽なんだろう。

時が止まつたよつに私達は吸い続けた。

私は知らない間に寝ていた。

横を見ると高哉も寝てる。

時間は AM 1 : 00

こんな時間か：

起こすのは止めよつ。

私は暗がりの中、テレビを付けた。  
高哉を起こさないよつ…小さな音で。

・ ・・とつとう私やつちやつたなあ ・・

煙草だつて吸うし、お酒だつて飲んでる。

でも、私はまだ16歳。煙草もお酒も本当は駄目。20歳になつて  
からつて分かつてる。

でも世間ではそれを許されてる部分もあるんだよね ・・ .  
明らかに未成年なのに、外で煙草を吸つても大人達は何も言わな  
い。

夜コンビニでお酒を買(う)いとも出来る。未成年は駄目って張り紙してあるけど、実際ちゃんと売つてくれてるし…警察を呼んだりもしない。

そんな私達を大人は見て見ぬ振りなんだよね。

でも、今さつきした事は違う。

外でしてたら、きっと見て見ぬ振りはしないだろ？

警察のお世話になるんだ…

テレビは付けたけど見てなかつた。今自分がした事を考えていた。駄目な事をしたのは分かつてる。

でも、罪悪感はない。

そんな事より、高哉を一人にさせなかつた事や、あの一時嫌な事を忘れられた事の感覚の方が強かつた。

そんな事を考えていたら高哉が起きた

『梓…』

『起きたの？』

『うん。…』『めんな

『何が？』

高哉の

「『めんな

の意味は分かつた。

私を巻き込んだことへの謝罪だつて…

でも、私は知らない振りをした。

それが高哉への優しさだと思つたから…

『今日…お袋が来たんだ…』

『高哉が小さい時に家出た?』

『… そう。俺一瞬誰だかわからなくてさあ。大分老けてたけど『写真で見たお袋だつて分かつた…』

『何しにきたの?』

『入るなり家ん中あさりだしてさつ… ありえねえよなつ！ 16年振りに息子に会つたつつの挨拶もなしでさ!』

高哉は私の問いかに答えることなく話出した。

私は高哉のいるベッドを背もたれにして、テレビの方を向いたまま聞いた。

『お母さん… 何しにきたの?』

『金だよ…。さすがに引くわあ。初めて見たお袋が、金金言つて走り回つてる姿は…』

開き直つたように呟くべくひたむけ、悲しさを隠しきれていない。

『… つん』

後向けない…

高哉の顔見れない…

きっと今、高哉の顔は言葉ほど明るくないから…  
そんな顔、私に見られたくないだらうから…

心は泣いてる…

だから今日こんなことしてたんだ。

私は今日高哉が悲しい時に…

高哉と共にシンナーに手を出した事に…

高哉の寂しさを分かつてあげられた気がして満足だった。後悔はない。

『俺らを捨てたお袋なのに…俺ん中で母親はこうこうこうイメージ

があつたのかなあ…… そんなお袋見たくなくて、バイトして貯めた金渡したんだ。そしたら素直に帰つて行くんだよー・薄情だよな……』

『……うん』

『家出てくとお言つたんだ……俺に背むけてさー・

『「じめんね高哉』

つて…… お袋に掛けでもらつた最初で最後の言葉……』

高哉が泣いてるのが分かつた。

私は高哉の方を振り返り、そつと高哉を抱き締めた。高哉の寂しさを少しでも吸い取つてあげるよつて……

そつと抱き締めた

悲しかつたね

寂しかつたね

辛かつたね

そんな言葉は言わない。

言葉にしちやうとその気持ちが伝播するから……

『「じめんなあ。梓……』

私の胸に顔を埋め、高哉はまた謝つた……。

『うん。気にしないで……』

『もう、こんな事しないから……』

『……うん』

そうだよ。一度の過ちなら誰でもある。

一度としなきやいいんだから・・・

高哉は寂しさを一人で抱えきれず、薬物に手を出した。

私は高哉の寂しさを少しでも分かつてあげたくて、薬物に手を出した。

私は他に手段を知らなかつた。

私達はいけない事をした……と分かつてゐる。  
だから、同じ事を繰り返さなければいいんだ。……と思い。一度  
としない事を違つた。

## 第25話：困惑

高哉と共にシンナーを吸つた日から私達は分かち合えたかのよう  
に今まで話さなかつた事も語るようになつた。

私達：といつより高哉が…だ。

いつもと同じように今日も高哉の部屋でお互い好きな事をしてい  
た。

『梓さあ。シンナー吸つたのあの時が初めて?』

『そうだよ。高哉は?』

『俺は違つ…。初めてしたときは中3だった』

…初めてじゃなかつたんだ…

確かにそうだよね…

気が滅入つて=シンナー

だなんて一回も経験ないのに、しないよね。

『梓には本当のこと云えといひと思つて…』

真剣な高哉…

『きつかけはなんだつたの?』

『前に言つたと思うけど、その頃俺あんま家に帰つてなくてや』

『おばさんの事があつたときだよね?』

高哉は義母に小さい時に虐待を受けで中学になりその反動で家に  
帰らなくなつた。

『そう。その時連んでたのが中学ん時の先輩でさあ。その人が、もう  
う中毒になるほどシンナー吸つてたんだ…。最初はヤバい!って思  
つたんだけど…。その頃、家の事とかで逃げ道ほしくて…。一緒に

やつちやつたんだ』

『そりなんだ…。』

昔の高哉の状況だつたら逃げたくなる気持ちもわかる。

『…一回で止めようと思つた…でも辛くなるとまた手出しだ…

そのうち止めらんなくなつて…』

『それからずつとしてたの?』

『…うん』

『私と会つてからもしてた時あつたの…つ』

私は少し声を荒立てた。

そんな私に、高哉は焦り気味に言つた。

『違つよ…梓と出会つてからはしてない』

ホッとした…

私と出会つてからもしていたなら、私はきっと怒つていた。  
その怒りは、高哉がシンナーに手を出し、悪いことをしていたから  
じゃない。

私の知らない高哉がいるのが嫌だつた。

私は高哉の全てを知つていい。

高哉の好きなものや嫌いなもの…

良い高哉も悪い高哉も…

全て受け入れたい。

高哉という人間を把握しておきたいつて思つ。  
でも、この気持ちは愛情じやない。

友情

私は高哉に友情を感じている。だからこそ、全てを私に見せてほしい。

汚い事も隠さないでほしい。

愛情なら許せる嘘も友情なら許せない。

『本当に。』

高哉の言葉を信じてるけど、確認した。

『本当に。でも梓と会った前まではしてた。』私が次の言葉を言う前に高哉は話しを続けた。

『梓と会つてから、俺…梓に支えられてた。いつも一緒にいてくれて、俺…寂しさなんて忘れてた。だからシンナーなんかに手出さなくなつたのかも…』

高哉がそう思つていてくれた事が嬉しかつた。でも納得できない。…じゃあ何故あのとき…

『ありがと。でも本当に支えになつてなかつたんだよね?』

遠回しに聞いてみた。

本当の支えになつてなかつたから、あの時高哉は、またシンナーに手を出したんだよね? …つて。

『それは違う。俺の気持ちが弱すぎたんだ…。梓はマジで俺の支えになつてくれる』

『…私も高哉が支え』

私は高哉の支えでありたい。ずっと…。

高哉を支えるために強くなりたい。

そして私は高哉に支えてもらいたい。ずっと…。

言葉には出さなかつたが、私達は誓い合つた。。

梓 16歳

高哉 16歳

私達は若かった。  
分からなかつた。

自分の事を支えられないのに、他人を支える事なんてできるはずがない・・・。

私達は弱かつた。

真剣に誓つたはずのものが簡単に壊れるなんて・・・。

でも、間違いなくその一時…一瞬。私達の気持ちは真剣だつた。

夏休みも後半に差し掛かつた

今日は珍しく1日家にいた。時間は18時になり、少し日も落ちてきた。

たまには家でのんびりするのも悪くない。…その時・・・携帯が鳴つた。

着信?・・・誰だろ?つ?

私の携帯はあまり着信がない。

高哉も真弓も恵里も…みんなほぼメールだから。

この夏休み私はほとんど高哉といふ。真弓も恵里はほぼ彼氏といふらしい…

せつかくの夏休みだからしようがない…。

でも一人とはメールは毎日つてぐらいいしてゐる。  
だから…急なようがない限り電話が鳴ることはずはない。

携帯を開けた。

知らない番号・・・

いつもは、知らない番号からの着信は出ないようしている。  
勝手に私の番号を他人に教える奴がいるからだ。

同じ年頃の男は女に敏感らしく、少しでも可愛いって噂を聞けば、  
その女の子会つてみたいらしく・・・。正確にはやりたい。んだけど・・・。  
そういうのでも、ちょっととした知り合い程度の子は私に許可なく勝手  
に番号を教えてるみたい。

だから、知らない男から携帯にかかることがあるから、知ら  
ない番号は出ない。

けど、この電話はしつこく程鳴つてゐる。  
恐る恐る出た。

『もしもし』

『もしもしー梓ちゃん?』

『そうだけど...』

やつぱり...。また男か...

『雅史だけど、覚えてる?』

ん?雅史?つてあの? 慎悟の友達の雅史君?

『...雅史君?...どうして...?』

私はこの状況を理解出来ていない。

何故雅史君が電話してきたのか

何故今頃になつて...

そんな私の思いを余所に雅史君は話し出した。

『久しぶりだね。梓ちゃん元気してた?』

相変わらず優しい声… 懐かしい。

『元気してたよ。雅史君は元気?』

なんだかあの時に戻つたみたい…。

『梓ちゃんもう高校一年だよね?学校楽しい?』

『うん。楽しいよ』

何故、電話してきたのか。

私は聞きたい事も忘れて、私はあの時に戻つたよつ…そして、懐かしく雅史君との話は盛り上がつた。

楽しかつたあの時…

何もかも初めてで新鮮だつたあの時…

タイムスリップしたように鮮明に蘇つた。

『雅史君は今何してるの?働いてるの?それとも進学?』

『俺が進学出来るわけないつしょ!働いてるよ!汗水流してね』

『そりなんだあ。頑張つてるんだね』

雅史君は直ぐに言葉を出さなかつた。

一瞬、本当に一瞬の沈黙があり、何故かその一瞬の沈黙がぎこちない感じがした。

そして、私を現代に戻した。

『…慎悟も一緒に…慎悟も一緒に働いてる』

雅史君の声が変わつた…。

『…そりなんだ。慎悟も頑張つてるんだね!』

慎悟はもう過去。

そう言わんばかりに明るく言った。

本當は、一瞬詰まりそうな声を押し出した。

…慎悟…

言いたくても言えなかつた名前…  
雅史君の口からやつと出た名前。待つてた。

あの時から私は一時も慎悟を忘れた事はない。  
でも辛いから…。

慎悟の事を過去こじよつて私の中の箱に無理やり詰め込んである。

蓋を開けると一度と箱に納められない気がして、怖いから。  
本当は過去になんかなつてない。

慎悟といつも近くに感じてた。

『あれから一年ぐらいい経つよなあ…』

『やうだね！』

…やう。慎悟と出会つたのは、ちょうど一年前の夏休み。

『俺が電話したのびっくりしたでしょー…？』

『びっくりしたよ。なんで分かつたの？番号』

雅史君は一息吐いて本題に入った。

『慎悟の部屋で見つけたんだ』

『何を？』

雅史君が何を言いたいのか分からない。

『梓ちゃんの電話番号』

『どうこうこと…』

『俺さあ。ずっと誤解解きたくて。梓ちゃんに電話したかつたけ

ど、番号わからなくてさ。でも、最近慎悟の部屋で見つけたんだ。

梓ちゃんの番号が書いてある紙を…』

『紙?』

『多分、あいつが梓ちゃんの電話番号を初めて聞いたときに、メモつた物だと思つよ。あいつまだ捨てらんなくて持つてんの…』

『そりなんだ…。』

正直嬉しい。

でも、もう止めて!

私の中の箱が苦しがつてゐる…。

『慎悟は今日俺が梓ちゃんに電話した事は知らない。でも、どうして梓ちゃんに知つてほしくて、電話したんだ…』

『…』

聞くのが怖い。

『あの時さあ…。梓ちゃんを部屋に残して、慎悟が部屋を出たとき… 慎悟電話してたでしょ?』

『…うん』

『あれ…慎悟の元カノの瑠美からだつたんだよ…』

『…知つてるよ』

『やつぱり…。知つてたんだ』

『その人電話の向こうで泣いてた…』

あの時の記憶は今でも鮮明に覚えてる。

思い出せば出す程あの時の虚しさも蘇る。今でも虚しさを感じる。

『…うん。瑠美はどうしても慎悟と寄りを戻したかったみたいなんだ…。都合いいよなつ。慎悟と付き合つてたときは、他に男作つて別れたのに…。その男が駄目だつたらまた慎悟…つて

『でも、慎悟もまだ好きだつたんでしょ?』

私はあえて慎悟を自分から遠ざけた。

『確かに慎悟はずっと瑠美を引きずつてた…梓ちゃんは今までね！梓ちゃんと付き合つてからは、慎悟は梓ちゃんだけだったよ』

私の中の箱が疼き出した。

ずっと閉じ込めてた慎悟を好きといつ『気持ちが、出てきちゃうよ。

『なら…ならどうして、あの時慎悟は行ひやつたの？』

もう平常心を保てなくなつた。

本当は慎悟に問い合わせたかった事…。

『あの時、電話で瑠美が言つたんだって。

「助けて」

つて。泣いてて訳も言わなくて…。ただ事じやないと思つて瑠美の元に向かつたんだ…。けど本当は何もなかつた…。慎悟が瑠美を引きずつてた事、瑠美も知つてたんだ。だから慎悟と寄りを戻す事は簡単つて思つてたみたいだけど…、慎悟が梓ちゃんと付き合つた事を知つた瑠美が、慎悟を取り戻そうとついた嘘だつたんだ。あの時あいつはマジで梓ちゃんだけだつたから…。』

私は雅史君の言葉を遮つた。

『でも！まだその人を思う気持ちがあつたから、慎悟は出て行つたんでしょ…。』

『違うよ！それは違う！あの時間違いなく慎悟は梓ちゃんだけを思つてた…慎悟を庇つ訳じやないけど…。人つてさあ。どんな別れ方をしても真剣に好きになつた奴を嫌いにはなれないし、困つたら助けたいつて思うんだよ。特に慎悟は…。でもそれはまだ好きだからとか愛してるからとは違つんだよ…。慎悟が愛してたのは梓ちゃんだけだつたよ。』

『そんなの分かんないよーどんな理由があれ、私は慎悟についてほしかつた！何より私を選んで欲しかつた』

私の箱から押し込めてた気持ちが暴れだした。

慎悟を過去に出来ていたら、雅史君の言葉を素直に聞けたのかもしれない。

でも、まだ慎悟を過去に出来ていない。

慎悟と一緒に過ごした時が今でも最近の事の様に思つんだよ。

…まだ慎悟を愛してる。

『ごめん。俺梓ちゃんの気持ちも考えないで…。でも最後に言わせて。あの時、瑠美の嘘が分かつて慎悟は直ぐに戻ったんだよ。でも梓ちゃんはいなかつた。慎悟後悔してた。…今でも後悔してる。今でも…』

雅史君はその先を言うのを止めた。

私が泣いているのが分かつたんだろう。

これ以上、私の心を乱すのは止めようと…。

…ごめん…雅史君はそう言い残し電話を切つた。

あの時、部屋で慎悟の帰りを待てていれば…

あの時、意地でも慎悟にすがりついていれば…

今は違つたの？

慎悟と一緒にいたの？

…もう遅いよ。

もう遅い。後には戻れないんだから。

なのに、会いたいよ。

慎悟に会いたいよ。

私の中の箱が蓋をあけてしまった。

今直ぐにでも慎悟のもとに飛んで行きたい。

その気持ちを抑えられたのは、慎悟を愛してゐるから……。

慎悟に愛してもらいたいから……。

慎悟が愛したのは一年前の梓。今の梓は違うから……。

今の私をきっと愛してはくれない……。

慎悟にはあの時の梓でいたいから……。  
だから会えない。

私は高哉に会いに行つた。

今の自分をコントロール出来ないから……。

## 第26話：誓いが崩れた日

高哉といえば今の気持ちも落ち着くだらう……  
その一心で高哉の元に向かつた。

高哉の部屋に着いた。

こんな日に限つて高哉はいない。  
電話した。：でない。

高哉。早く帰つてきて。

私は一人高哉の帰りを待つた。

まだ部屋は微かにシンナーの匂いがする。  
そう簡単に消える匂いではない。

私の中でのシンナーを吸つたときの感覚が蘇る。  
楽になりたい。

忘れたい。

私は夢中で部屋中を漁つていた。

：もう一度…もう一度… と。  
押し入れを探ると一番奥にあつた。

その物を取り出すと、私は躊躇することなく、快樂の世界に飛び込んでいった。

どれぐらい経つた頃だらう…・・・高哉が帰つてきた。

高哉が帰つてきて嬉しくて高哉に飛びついた。

でも高哉は私がシンナーをしているのが分かり、私からシンナーを取り上げようとした。

私から快樂を取り上げる高哉を許せなくなり、やつをまでの喜びを忘れ、高哉から離れた。

私は思い惱んでいた事も忘れ、その一瞬、一瞬の感情のみだけだった。

『たかやも一緒にしよ?』

私が初めて手を出したあの時の高哉のよう、私は高哉に勧めた。

高哉はあの時の私のように受け取った。

私達はハイになつた氣分を家の中だけに止めておけず、外に飛び出した。

・・初めて高哉と会つたあの日のように、盗んできた原付に一人乗りして……。

怖さなんて感じなかつた。

怖さなんて知らなかつた。

警察に捕まつたら…。など微塵も感じなかつた。

どれぐらい走つただろう?・・・。

陽も明け始め、私達の快樂も冷めだした。

快樂が冷めるとともに、私には罪悪感が押し寄せた。

…高哉を誘つちゃつた。

…もうしないつて決めたのに…。

高哉の顔を見れないのでいた。

高哉に謝りたい。

「『めんね』

その一言が素直に言えない。

何でもないときなら言える言葉なの、本当に言わなきゃいけないときもほんの一言言えない。

『梓、楽しかつたなあ』

高哉は明るく言った。

『うん』

私は高哉の言葉に逃げた。

「じめんね」

を言わないまま、その場の雰囲気を高哉に任せた。

何故、私がシンナーに手を出したのか、高哉は聞かなかつた。私も言わなかつた。

高哉と私は他愛もない話をして、高哉の家に帰つた。

私が初めてシンナーをした日とは気持ちが違つっていた。

高哉に対し、罪悪感はあつたものの…、シンナーを吸つていた時の楽しき…、快樂の方が勝つっていた。

…それは、高哉も同じだつたのかもしれない。

この時から私と高哉の関係は崩れたのかもしれない

今日も高哉の家に向かつた。

やつぱり部屋はまだシンナーの匂いがする。

『俺、煙草買つてくるわ』

やつぱり高哉が部屋を出た瞬間、私はシンナーに手を出した。今高哉がいないからつて、帰つてきたらバレちゃう。でも一緒にいるときに、手を出せない。

やつちやつたら、もつじちのものー。

：そんな感覺だ。

別に今日辛い事があつた訳じやない。

今寂しい訳じやない。

：ただ私の体が欲しがつてゐる。

部屋に残る残臭が私を誘つのだ。

高哉が帰つてきた。

高哉は私に一瞬目を向けたが、何もないよつと普通だつた。

私はシンナーの入つたビニールを口にあて、明らかにシンナーを吸つてゐる私。

高哉は普通だつた。

いつもと変わらない高哉。

高哉は煙草の入つた袋を置き、テレビを見たり、漫画を見たり…。しばりくすると、シンナーの入つたペットボトルを手に取り、ビニール袋に注ぎ、吸い出した。

・・一度は止めようとしてくれた高哉。

今はもう私を止めようとはしてくれない。

それどころか、一度は止めようとしたシンナーにまたハマつてしまつた。

私達は変わつてしまつた。

私達はお互に止めよつとはしない。

もうしない

あれほど真剣に誓い合つたのに…。

こんなにも簡単に崩れてしまうなんて・・・。  
ただ・・・。ただ高哉を一人にさせたくない。

最初はその思いだけだった・・・。

お互いを支え合いたかった・・・。

今はそんな思いを遠い遠い昔の事のように忘れてる。 私達は抜け出せなくなつた。 暗い闇から

毎日、毎日シンナーを吸つよつになつた。

いつからか、高哉に会いに・・・。ではなく、シンナーを吸いに高哉のもとへ・・・。  
に変わつていつた。

今は、ただそれだけの付き合い・・・

## 第27話：汚染

高哉と私は支え合いつといつた関係ではなくなった。

今ではそんな事、ただの奇麗事だったかのよひにも思ひつ。

・・チャラチャラ  
携帯が鳴つた。

『はい』

『梓！いい物手に入つたから、今からおいでの』

『ちょうど今から行こうとしてたとこ』

『じゃあ待つてるからなつ！早く来いよ！』

：何だろ？

高哉が来いだなんて催促の電話初めて。

いい物つて言つてたし…？

まつ！行けば分かるかつ！

『梓！やつと来たか！待ちくたびれたよ！』

『いつたいどうしたの？』

『これだよ！これ！』

高哉が手を差し伸べて持つてているものを私に見せた。

高哉が持つていたものは、

「パイプ」

だった。

テレビの中では昔の人が煙草を吸うときのパイプみたい。

『これ何?』

『これで吸うんだよ』

『何を?』

『葉っぱだよー。』

『葉っぱ?』

『マリファナー!』

『えつー!?』

マリファナ…

名前は聞いた事ある。

吸っちゃいけない事も知ってる。

『さつき先輩が持つてきてくれたんだー！やめさせー！』

『うんー。』

私には断る理由がなかった。

それには、好奇心があつたから…。

『これ…どうやってするの?』

『確か…。…うして…。…うやって…。…』

一人、ぶつぶつ言いながら、高哉は準備を始めた。

ジッパー付きの小さいビニール袋を取り出した。

中にはお茶の葉を細かくしたような物が入っていて、高哉はその葉をパイプに詰めた。

パイプの先に口を付け、葉の入ったところにライターで火を付け、一気に吸い込んだ。

『どんな感じなの?』

『……』

高哉は何も言わず、持っていたパイプを私に差し出した。

『煙草吸う感じと一緒にいいの？』

高哉は何も言わず、頷いた。

私はパイプに口を付けた。

『吸い込んだら少し肺で止めて』

私は頷いた。

『熱い！

吸つた瞬間の感想。

・・ん？

私には葉っぱの良さが分からなかつた。

この時の“良さ”とは、気分の高まつていく良さの事だ。

・私はシンナーの方が好きだなあ…

それ以来、私が葉っぱに手を出すことはなかつた。

一方で高哉は、葉っぱを気に入つたらしく、シンナーを吸つたり、葉っぱを吸つたり…色々だつた。

高哉曰く、その時の気分なんだつて…。

私達は毎日…毎日シンナーを吸つた。

家には一樣毎日帰つてゐるけど、親と顔を合わせない時間帯。親が寝た時間に。そして、まだ寝てる時間に家をでる。でもちゃんと家に帰つた証拠は残しておく。

・片付けられた台所のテーブルに飲みかけのコップを置いておいたり…。

親には会いたくない。

顔を見れば何かと文句を言つ。

無視すればいいのだけれど、耳障りだ。

でも…やはり、シンナーの臭いをわせて親には会えないから…。

今の私の体は常にシンナーを欲しがつてゐる。

私の脳は何よりもシンナーを優先している。

そんな私が唯一まともな考えが出来るのがここだ。

そう思つていても、シンナーを止めれない。止めようとも思わない。

シンナー…。私達は一日と空けることはなかつた。

高哉と語り合つ事も今は…。

きつとお互にを思つやる気持ちもなくなつてしまつたんだ…。

今は向よりも…誰よりも…シンナーに夢中だ。

夏休みも後わずか。。。

毎年この時期行われる地域全体の祭りがある。この地域一番の祭り。  
おじいちゃんおばあちゃんから、子供まで集まる。

夜になれば、ここぞとばかりに暴走族が集まる。

この祭りが始まると夏休みもあと少しと感じる。

今日がその祭りの日

私も毎年行っていたが、今年は行かない。  
真弓も恵里も彼氏と行くって言つてたし…。

何より今の私には祭りよりも大事なものがあるから。

高哉の家に向かう途中、昼間つから浴衣姿の人々が溢れていた。  
…今から祭りに行くんだろうなあ…。

ガラガラ

あれ？ 高哉は？

部屋に入った瞬間、高哉の姿を探した。

部屋を見渡すと高哉は部屋の隅に膝を丸め座っていた。

高哉が今正常でないのはすぐ分かつた。

部屋は臭くないから、葉っぱでもしてるんだろう？・・・。

私は高哉に構いつらじなく、テレビを付けじせりへ何もせざ見ていた。

『梓…。これ…マジヤバいわ…』

やつと高哉が喋つた。

『何が?』

高哉はテレビを見る私の前に座つた。

高哉が手に持つてゐる物に田が釘付けになつた。

注射器だつた

聞かずとも分かつた。

今高哉がしてるのは、葉っぱではない…。シンナーとも違つ。

シャブだ

『梓もする?』

高哉は笑つてゐる。けど、目が笑つてない…。

『…いい…』

初めて高哉の誘いを断つた。

怖い…。

シャブが怖いんじやない。

…高哉が怖い。

『なんで? 一緒にしよひよ』

『いいよ私は…』

『なんでそんな事言つんだよ…。いじやんしよひよ』

必要以上に私を誘つ。

高哉が怖い…

シャブをした高哉が怖い…

高哉をこれほどまでに変えてしまつたシャブが怖い…

笑つても目が笑つていいない。

何をしでかすか分からぬ様な…。

そんな高哉を見たらシャブに手を出す好奇心は私にはない。

『なあ。一緒にしようよ』

まだ言い寄つてくる。

笑いながら言つてゐるけど、田つきはだんだん鋭くなつてく。

これ以上断つて高哉を興奮させたら、何をされるか分からぬ…。

これ以上断つて高哉を興奮させたら、何をされるか分からぬ。

…この場から逃げ出したい。

…高哉から逃げたい。

でも怖くて体が動かない。

…諦めるしかないか。

…今更自分を守つたつて、仕方がないよね。

私はシャブを打つことを決めた。

私は高哉の誘いに頷いた。

その瞬間、玄関のドアが開く音がした。凄い勢いで誰かがこっちに向かつてくる足音。

『高哉 ！』

その声とともに勢いよく部屋のドアが開いた。  
私は部屋に入ってきた人から目が離せない。

深い紫色の特攻服を着たキツ目なとても綺麗な女人の人・・・。  
・・・誰なんだろう。

高哉は注射器を持つて固まつたまま、その人を見ていた。

『遅かつたか・・・』

その人は高哉を見つめ悲しそうに言った。  
高哉から目を反らすと次に私を見た。

『あんたもしたの？』

私は首を横に降った。

さつきまでの怖さとこの人が突然現れた驚きで声が出ない。

私から目を離すと、その人は高哉の持つ注射器を取り上げ、無造作に置かれたシャブの入った袋を持つて部屋を出た。

すると、水の流れる音が聞こえた。

・・・トイレに流したんだ。

私は高哉を見た。

シャブを捨てられ、暴れるんじゃないか.....。

・・・私の思いとは逆に、高哉は凄く怯えていた。

膝を抱えるように座り、体が微妙に震えている。

下を向き何か言っているけど、声が小さくて聞き取れない。

高哉が何に怯えているのか . . . 。

「この女人に . . . ?

・違う。

高哉の精神が変になつてゐるんだ。

これがシャブなんだ . . 。

これが薬物 . . なんだ . . 。

私が高哉から目が離せないでいると . . 女の人が戻ってきた。

『高哉！ しつかりしなつ！ 姉ちゃんだよ！』

・姉ちゃん . . . ?

この人が高哉のお姉さん？

お姉さんは高哉の前にしゃがみ、うつむいた高哉の肩を揺すつてゐる。  
それでも高哉は顔を上げない。

お姉さんの声など聞こえていないような . . .  
下を向き震えてゐる。

『 . . 駄目か . . . 』

そう言つと、立ち上がり、押し入れの中を物色しだした。

ここにあることを知つていたかのよう、押し入れの中から、1  
0本ほどの注射器とシンナー . . 葉っぱ . .

高哉が持つてゐる薬物をすべて袋に詰めだした。

『おいで!』

『え!?』

『あんたは、私とおいで』

私に向かつて言ひつと、お姉さんは薬物をいれた袋を持ち部屋を出ようとした。

私は何故呼ばれているのか分からず、動けないでいた。

『早くおいでー!』のままここにいると、高哉何するか分かんないよ!』

私はお姉さんの後に続いて部屋を出た。

…高哉を残して。

玄関前には大きな改造した単車が止まっている。

…もしかして、これお姉さんの単車?

『乗りなつ』

お姉さんはバイクにまたがり、顎で後を指した。

『…はい』

私がまたがつたと同時にエンジンがかかり、マフラーが凄い爆音を鳴らした。

…・一体何処に連れて行かれるんだらう・・。

しばらく走ると川沿いの土手に着いた。

お姉さんはバイクを停め、さつき高哉の部屋から持つてきただ薬物入りの紙袋を持ち、河原に向かい歩き出した。

私は訳が分からなかつたが、後に続いて歩いた。

お姉さんは、袋からシンナー入りのペットボトルを出し蓋をはずして、歩きながらシンナーを流し出した。  
中身を全部捨てると、またペットボトルを袋にしまつた。  
それでもお姉さんはまだ川沿いを歩いている。  
私はお姉さんの2m後を歩き続けた。

私達が歩く少し前に高架が見える。

高架下には、ダンボールを上手くつなげ、ダンボールの上にペーパーリシートを被せてある大きな物がある。

… あつと、ホームレスの家だらう。

お姉さんはダンボールの家の前で止まつた。

『おーいーおつさん！ ドラム缶借つるよー！』

お姉さんはダンボールの家に向かつて言つた。

『おつ』

中から声がした。

姿は見せなかつたが、年の頃は70代ぐらいだらう。と、私は勝手に想像した。

すると、ダンボールの中から手だけが出て新聞紙が出された。

お姉さんはその新聞紙を持ち、ダンボールの家から少し離れた所に置かれているドラム缶に向かつた。

新聞紙にライターで火を付け、ドラム缶の中に投げた。

火が燃えだしたとこで、持っていた紙袋「」とドラム缶に投げ入れた。

・シンナーが入っていたペットボトル

・葉っぱ

・注射器

・シャブ

すべてが燃えだした。

ペットボトルの焼ける嫌な臭いがしていく。

お姉さんは、川沿いの土手に座った。

私も後に続き、少し離れて座った。

お姉さんは特攻服のポケットから煙草を出し、火をつけた。

『私、広香。<sup>ひろか</sup> 高哉の姉ちゃん。あんたは?』

私に顔を向けることもなく、前を流れる川を見ながら言った。

『梓です…』

広香さんは煙草を大きく一息吸うと話しう出した。

『高哉はさあ、小さい頃から寂しい思いをしていたんだ…。高哉を庇う訳じゃないよ。誰だって寂しい時や辛い時はある。……でもさあ。人ってそんなに強くないんだよ。簡単に流されちゃうんだよ。』

『……』

私は黙つて話しを聞いた。

『私らみたいのはさあ、はけ口がないんだよ。家には居場所がない

…誰も自分を守ってくれない…。だから高哉も薬物に溺れたんだ。特に私らみたいに、やんちゃしてる奴は、簡単に手に入るんだよね。最初はシンナー。そしてシャブ…。エスカレートしてくんだ。でも一度手を出したら最後…。見ただろ?…さつきの高哉…』

『…はい』

『今までいろんな奴見てきたけど、シャブに手出したら最後だよ…。簡単にはシャブから離れられない。そして全てを失うんだ。…親…兄弟…友達…自分自身も…。あんたシャブしなくて良かつたよ。…何でしなかつた?高哉誘つてこなかつた?』『誘つてきたけど…出来なかつた…怖かつた…』

正直な私の気持ち。

『それが普通だよ…。そう思うのが普通。』

『……高哉はこれからどおなつちゃうんですか…』

一人残してきた高哉が気になつた。

『私にも分かんないよ…。多分…また何処かで、シャブを手に入れようとすると思うよ。あんたも、もう高哉のところに行かない方がいい』

『どうして?』

『だから言つたろ!…人は流されちゃうんだよ…。そんなに強くない…』

確かに、私は高哉の誘いを断りきれずシャブに手を出そうとした。たまたま広香さんが来たから手を出さなくて済んだだけ…。

これから高哉はどうなつてしまつんだろう…。

私が無傷で逃げてしまつた…。

高哉を止める…とも出来なかつた。

高哉に付き合つてあげることも出来なかつた。

私は高哉を見捨ててしまつた。

そんな思いが胸の中を埋め尽くした。

『あんたこは高哉を助ける…と出来ない…』

私の思いを分かつたように広香さんは言つた。

『どうして…どうして何も出来ないの?』

分かつてる。

広香さんの言つた通り私には何も出来ない。  
でもそんな無力な自分を認めたくなかった。

『じゃあ何が出来る?…何も出来ないんだよ…あんたこも…私にも…。悔しいけど…』

今まで表情一つ変えず話していた広香さんの顔が変わつた。

…悲しい顔…。

私は偽善者の振りをしていただけなんだ。

…高哉を見捨ててしまつた。

…何もしてあげられない自分が悔しい。

そう思う事で自分を守つていたのかも…。

今本当に悔しくつて、悲しいのは広香さんなんだ。

ただ一人の兄弟がこうなつてしまつたんだ…。

『もう焼けたなつ』

そう言つとドラム缶に向かい歩き出した。  
中身が燃えたことを確認すると、戻ってきた。

『一緒に来る?』

『どこにですか?』

『祭り』

…そうだ。今日は祭りなんだ。

『行きます』

行く宛もないし、一人でいたくない。  
きっと今一人になると、高哉の事ばかり考えて、怖さに押しつぶさ  
れる。

私はまた広香さんのバイクの後に乗つた。

街は祭りで大賑わい。

対向する歩く人が肩が触れずには歩けないほど、人が溢れている。車も通行止めになつて、交差点ごとに警察官が立つてゐる。

・・さつきまでの怖さを忘れてしまうくらいの熱気。

：来て良かった。

そう思う反面、今日この楽しい祭りの日。その裏では、高哉はクラブに溺れている。

・・・暗い闇だ。

広香さんは、祭りの中心から少し離れた公園にバイクを停めた。

外れた公園でも人は沢山いる。

公園は、若者でいっぱいだ。

特攻服を来た人。

髪の毛は金髪。

パツとみただけで、ヤンキーの溜まり場と思つた。

私達が着いた頃には陽も落ち始めて、薄暗くなつてきている。

今からの時間は街中のヤンキーが集まる時間。

もちろん見て分かる様に、広香さんもレディース（暴走族）だ。

広香さんはバイクを降りると、公園の中心に向かい歩いて行つた。

広香さんの姿を見た他のレディースの人達が深々と頭を下げて挨拶をしてゐる。

『広香さんーおはよーい』

軽く挨拶を返し、広香さんは公園の真ん中へと歩いている。

私も後に続いた。

公園にいる人達（暴走族）の視線を感じる。

・・誰あいつ・・みたいな、暖かい視線ではなく・・かと言つて、  
冷たい視線でもない。

不思議がつている視線だ。

すれ違う人達が広香さんに挨拶をする一方で、その後必ず私をじつと見る。

広香さんが向かつた先には、黒の集まりがいた。パッと見ただけでも30人はいる。

『おはようござこます!』

広香さんが行くと、みんな一世に挨拶をした。

…これが広香さんのいるチーム?  
でもみんな黒の特攻服だし…。広香さんは紫だし…。?

『広香遅いじやん』

声のする方を見ると、黒集団の奥に広香さんと同じ紫の特攻服を来た人がいた。

『「じめん」じめん。弟のとこ寄つててさあ』

広香さんは黒集団の間を通り前へと進んだ。

私はここに来たことに後悔した。  
ここにいても私の居場所はない…。

黒の特攻服を来た人が30人以上…。その中で、広香さんと、広香

さんに声をかけた人と、もう一人は紫の特攻服。  
紫の三人はチームのトップだと分かった。

そんな広香さんがずっと私に構つててくれる訳がない……。  
勿論知つている子もないし、帰りたいよ……。

『梓！こつちこつち』

どうしたらしいのか分からず突つ立つて『梓』に広香さんは呼んでくれた。

『誰？』

私が広香さんの元に行くなり、紫の特攻服を着た人が広香さんに聞いた。でもその人の目は私を凝視している。

・・怖い・・

『梓つていうのー弟のツレ。ちょっとした縁で今日連れてきたんだ』

広香さんに紹介され、私はペコッと頭を下げた。

『じつちが副総の翔子で、じつちが特攻の佳奈。で、私が総長の広香』

広香さん総長だつたんだ……。

私に一人を紹介し終わると、後を振り返り、黒服の方に向いた。

『みんなー。こいつは梓つづうんだけど、私の知り合いで今日連れてきた！仲良くしてやつて』

『はいっー』

広香さんが私の紹介を終えると、副総の翔子さんが立ち上がり黒服達の前に出た。

『じゃあこれで揃つたから、22時まで自由にしなつーチームの揃忘れんなよー』

『はいっー』

翔子さんのかけ声でみんな散らばりだした。

私は広香さんの隣にいるが、このまま広香さんと一緒にいていいのか分からず困惑つた。

『菜奈ー』

広香さんが黒服の一人を呼び止めた。

『はい』

『梓と遊んでやつてーお前と同じ年だし』

『はい』

広香さんは私に気を使つて、私と一緒にいてくれる子を紹介してくれた。

『じゃあ行こっかー』

菜奈ちゃんは明るく私を誘つてくれた。

『つよ』

菜奈ちゃんはどちらかといつと、広香さんの様な美人な感じではなく、可愛らしい感じの子だ。

広香さんと同じ、濃い口紅。キツいアイシャドウをしていても、どこか柔らかな感じの子。

…菜奈ちゃんで良かつた。

『どこ行こつかあ？ 梓ちゃんは祭り来たらいつも何する？』

『ん~。かき氷食べて…』

『じゃあ、かき氷食べに行こー。』

私が話し終わる前に菜奈ちゃんは決めてしまった。でも全然嫌じやない。

『うん』

私達はかき氷の屋台を見つけに歩いた。  
さすがに特攻服で歩く菜奈ちゃんに周りの人達は避けるように歩いている。

こっちを見ようともしない。

菜奈ちゃんと一緒に歩く私にも同じ。  
こんなに人が混雑しているのに、誰とも体が触れることなく歩ける。

目が合つてもすぐそらす。

私はこの空気が心地よかつた。

…強くなつたような…。

『あつたよー！かき氷』

菜奈ちゃんは早速屋台を見つけた。

私達はかき氷を買い、道の脇に座り、歩く人を眺めながら食べた。

『ねえねえ。梓ちゃんは広香さんとビーフシチュー繋がりなの？』  
突然私に聞いてきた。

『広香さんの弟と友達で…』

『高哉君の友達なんだ!』

『高哉のこと知ってるの?』

『見た事はないけど、名前は聞いた事あるよ。『いつ世界にいると、大抵やんちゃしてる子の名前は耳に入るんだ!しかも広香さんの弟だし』

『そつかつ。菜奈ちゃんはレディース入ってどれくらいなの?』

『ちょうど一年かなあ。広香さんに憧れてねーでもまさかこのチームに入れると思わなかつた』

『難しいの? レディースに入るのつて…』

『他のチームは結構簡単に入れるみたいだけど…。

「紗童」

つて聞いた事ない?』

知つてる!

もう何年で代々続いている県で最大で最強のレディース。

『聞いたことある』

『それがうちのチームなんだよね! 広香さんで11代目なの。うちのチームは、ハンパ者は入れないんだ。最初に総長と副総の面接があつて、またこれが厳しいの』

『へえ。他のレディースは面接とかがないの? しかもハンパ者で?』

『ハンパ者っていうのは…』

菜奈ちゃんは困った様子だ。

『ハンパ者っていうのは！男にもツレにも喧嘩にも中途半端な奴だよ！男には一途で…。ツレは裏切らない…。って事。後、さつき副総が言ってた捷つていうのは、喧嘩ね。目が合つたら絶対そらすな！売られた喧嘩は買え！相手が誰だらが逃げるな…つて！』

『…へえ』

正直怖い。

『レディースもさあ。名目はケツ持ちのヤクザって感じで付いてるけど、実際はヤクザのシノギに作られたチームがここらは多くて…だから毎月会費がいつたりするんだよ。だから誰彼構わずチームに入れたりする事がよくあるみたい。でもうちは一切そういうのはなし！』

『じゃあ紗童はケツ持ちは付いてないの？』

…ケツ持ち…

その名の通り、何かあつた時はヤクザが尻拭いをしてくれる。

ケツ持ちのヤクザがいなってことは、潰される可能性高いんじゃないの？

断然ケツ持ちが付いてるチームのほうが強いじゃん！

なのに、県最強と言われてるのは何で？

私は何故か紗童が心配になつた。

『ちゃんと紗童にもケツ持ち付いてるよー。』

でも、会費は入らないんでしょう？  
良く意味がわからない。

私が不思議な顔をしていると、菜奈ちゃんは説明しました。

『私が聞いた話しだと…。紗童初代のときはケツ持ちも何もなくチーク作つて、四代目のときにケツ持ち付いたみたい。詳しくは知らないけど…。私が知ってる間では紗童がケツ持ち出した事はないなあ。どんな事も総長の広香さんと、副総の翔子さんと、特攻の佳奈さんが片付けちゃうから…。あの三人は無敵だね!』

『凄いんだね』

『凄いよ!でも今年で広香さん達引退なんだよね。寂しいけど…。』

『引退?』

『紗童は18歳の3月で引退なんだ。高校生と一緒にだね!これも代々変わることのない決まりなんだ』

笑つて話してるけど…寂しい顔。

それだけ広香さん達は慕わてる証拠なんだ。

私と菜奈ちゃんはかき氷を食べ終えて、どこに行くともなく、話した。

紗童の事。

広香さんの事。

色々私に聞かせてくれた。

『そろそろ公園戻ろうか!』

『うん。今からは何するの?』

『今からは…みんなで走るの』

菜奈ちゃんはワクワクしたようだった。

『私…帰つたほうがいいのかなあ』

『なんで？あつ！でも一緒に走るのは無理か…。さすがに広香さん  
の知り合いでも、紗童のメンバーじゃないからなあ。』

『…』

『公園戻つたら広香さんに聞いてあげる…。それと今日チームの事  
色々話したの広香さんには内緒ね。チーム以外の子に話したのバレ  
ると怒られちゃうから…。』

『うん！内緒ね！』

『いつそ梓ちゃんも紗童に入っちゃえばいいのに…』

レディースか。

ちょっと抵抗あるけど、憧れちゃうなあ。

私はその思いを口には出さなかつた。

再び公園に戻つた

今はもう辺りは真つ暗。

公園は熱気で溢れている。爆音のマフラーを吹かすバイク。  
さつきより人数が増えている。

私服の私が浮いてる感じ…。  
場違いな感じ…。

集団の前にいる広香さん元に菜奈ちゃんが歩いていった。

『広香さん…梓ちゃんはどうあるんですか？一緒に走れないですか…』

『梓…』

菜奈ちゃんに返事をせず、広香さんは私を呼んだ。

『梓は今からあの車に乗りな』

『えつ?』

広香さんは公園の外にある車を指差した。

『梓をバイクに乗せる訳にいかないから、私の男の車なんだけど、乗つて!集会終わったら飯でもおごるよ』

『…はい』

私は広香さんに言われるまま車に向かつて立った。

『行くよつー』

広香さんのかけ声に乗つて十数台のバイクは爆音を響かせ公園を出て行つた。

『…すいません』

恐る恐る車の窓をノックした。  
フルスモークで中は見えない…。

『どうぞつ』

運転席の窓ガラスが開いた。

『…お邪魔します』

私は後部座席に乗つた。

『…いんばんは』

『…いんばんは』

助手席にも男の人が座っている。  
二人とも見たからにヤンキーだ。どっちが広香さんの彼氏なんだろう  
う…と思つていると、

『俺達也』  
たつや

運転席の人が言つた。

『俺は茂貴』  
しげき

助手席の人が言つた。

『…梓です』

『梓ちゃん幾つ?』

運転席の人が言つた。

『16歳です』

『若いねえ。高一?』

『高一です。誕生日まだなんで…』

『梓ちゃん可愛いいねえ。彼氏いるの?』

『いないです』

『じゃあ俺なんかどう?』

『つてお前広香に殺されるぞ!』

助手席の人が突つ込んだ。…つて事は運転席の達也さんが広香さんの彼氏だ。

二人とも見た目は凄く怖そうで無口っぽい。その印象とは裏腹に二人とも凄くお喋り。ギャグを言つたり、色々な話をして私を笑わせてくれる。

広香さんが帰つてくるまで、会話は途切れることはなかつた。

・・達也さんと広香さんは達也さんが暴走族現役のときに知り合つたと  
り。

達也さんと広香さんは達也さんが暴走族現役のときに知り合つたと  
か…。広香さんの「目惚れから始まつたとか…。

「今じゃあ広香の尻にひかれつぱなし」

など…。聞かせてくれた。

2時間ほどして、また爆音が響きだした。

『戻つてきたか』

達也さんが言つた直後、公園に次々とバイクが入り、物凄い爆音が  
響いている。

耳が痛くなるほどの爆音が一世に静かになった。

公園に目をやると、みんなバイクを降り広香さんを前に並んでいた。

『あの広香が今じゃあ紗童の頭だもんなあ…』

茂貴さんが呟いた。『ああ。時が経つのは早いよなあ…』

達也さんが言つと一人は笑い出した。

二人にしか分からぬ思いがきつとあるんだろつ……。

公園から次々とバイクが出ていく。

すると達也さんの携帯が鳴つた。

『はい。おつ、分かつた』

やつと電話を切り車を走らせた。

『広香は一田バイクを置いてから来るから先に飯行つてよ』

私達はファミレスに入った。

席に着いたところで広香さんが來た。

『じめ～ん』

広香さんと私。向に達也さんと茂貴さん。  
広香さんは特攻服姿で周りの田をひいていた。  
普段なら有り得ないだろうけど、今日は祭りとあって、特攻服姿も  
そう珍しくない。

### 第30話：新しい道

『今田は達也のおじつだからじやんじやん食べて』

『おひーならお言葉に甘えて！』

広香ちゃんのノリに茂貴さんも乗つた。

『お前らなあ……』

達也さんは困つていい。私は三人のやり取りがおかしくて笑つた。楽しい。

年が違う人達とこんなに楽しくいられるなんて初めて。ご飯を食べているときも会話は続いた。私はおかしくって笑つてばかりいた。

一緒にいればいる程広香さんという人に魅了されていく。

高哉の危険を察知し、必死で飛んできた広香さん。レディースで頭を務める広香さん。

達也さんといふ広香さん。

強くも逞しくもあり、優しくもあり、女としての可愛らしさ一面もあり、素敵な女性。

菜奈ちゃんが広香さんに憧れると言つた意味を1田で分かつた。

『広香ももつ紗童引退なんだよなあ』

言い出したのは茂貴さんだ。

『そうだよー私もそんな年になっちゃつたよ』

広香さんは明るく言い合つた。

『寂しいんじやねえの？』

茂貴さんが茶化す様にまた突つ込んだ。

『寂しかねえよ！』

笑いながら言い返した。そして一息ついて言った。

『…これが紗童の決まり。…悔いはないよ』

真剣な表情。

でも寂しさはない。満足した表情。

：悔いはない…か。

私もそんな生き方がしたい。

自分の歩いてきた道を満足だと言える生き方がしたい。

『ところで梓。うちに入らない?』

『えつ?』

『紗童に入らないかつて聞いてんの!』

『……』

返事が出来ない。

確かに広香さんには憧れる。けど…レディースとなると…。しかも紗童に入るの難しいんじゃ…?どうして私?

『無理に入れとは言わないよ!梓が決める事だし』

私は戸惑い、助け舟を求め達也さんと茂貴さんの顔を伺った。二人とも何も言わない。それどころか一人で違う話しが始めた。私は諦め広香さんに目を戻した。

『…噂で聞いたんですけど…。紗童は入るの難しいって。…何故私なんですか』

『え?つー誰が言つてんのそんな事!』広香さんは驚いていた。

『噂で…。違うんですか』

『…違うとは言い切れないかも。チームに入れるにはそれなりに人

を選ぶよー。』

『私…喧嘩とかは…』

『はははは。』

広香さんは腹を抱えて笑い出した。

『そんな事考えてたの？喧嘩なんかは自分次第。するかしないかは自分で決める事』

『それでいいんですか？』

『当たり前じゃん！それはレディースだからじゃなく、今の梓でも有り得ることだと思うよー。友達や彼氏と楽しくしてる時は喧嘩なんてしようと思わないでしょ？でも大切な友達がイジメられてたり、彼氏にちよつかい出す奴がいたら、ムカつくし、文句言つてやりたって思うでしょ？レディースでもそう言つ感覺だよー。』

『そうですね』

『そう！私は逆に訳もなく喧嘩したり弱い奴をイジメてる奴を軽蔑するよ』

やつぱり広香さんはしつかりしてる人だ。

私が今まで描いていたレディースのイメージを一気に覆された。

『梓はずっと高哉の側にいてくれてたんだしょ？高哉の事を思つてくれたんだよね…。』

広香さんの言葉に胸が痛くなつた。

確かに初めは高哉を一人にさせたくないと思つた。そう思い合つていた。

でも今はどうだろ。

私達は薬物に溺れてそんな事忘れてしまつている。

それにシャブに手を出した高哉を遠退け自分を守つとした。

『…でも』

『人は強くない!』

広香さんは私の言葉を遮った。

『梓はあんな高哉だけど側にいてあげてくれた。姉の私もしてやれなかつたのに…』

『それはつ』

『どんな理由だらうと』

それは高哉がシンナーを持つていたから…。広香さんはお見通しの様に言った。

『それがどんな理由だらうと梓も高哉もお互いを居場所にしてたはず。私は高哉の居場所を作ってくれた梓に感謝してるよ』

『でも高哉はあんな事になつて…』

『あれは高哉が自らした事だろ? 梓のせいじゃない。自分を攻めるんじゃないよ! ワイワイ仲良くするシンナーとは訳が違うだ。梓は手を出さなくて正確だつたよ。勿論シンナーだつてよくない! 紗童は一切薬物禁止! あんな物に逃げたつて自分を滅ぼすだけ…』

話しているときの広香さんの表情は強張つている。

広香さんは煙草をくわえ一息ついた。

『だから、私はそんな梓が気に入つた訳。めちゃめちゃ自分の事情持ちだしてるけど、一瞬でも弟の居場所を作ってくれた梓が気に入つたから。チームに入つてほしいと思う。それに梓も高哉があなつて居場所を無くしたと思う。私の思い込みだつたら』『めんな』私は首を横に降つた。

確かに私は唯一の居場所がなくなつたから。

『高哉の代わりと言つたらなんだけど、チームに入ることで梓の居場所になればいいと思う。でも無理にとは言わないよ。梓が決める

『…よろしくお願ひします』

『それって紗童に入つていひつて事?』

『…はい』

『梓が正式に紗童のメンバーになつたから…』

向にいる達也さんと茂貴さんに言つた。

『そつかあ。梓ちゃんも等々紗童のメンバーになつたかあ』

『等々つて今日初めて会つたばっかじやん』

達也さんのノリに茂貴さんが突つ込んだ。

そのお陰で、場の雰囲気は和んだ。

『じゃあ早速、翔子と佳奈に報告するよ。みんなこは来週の金曜日の集会で報告するか?』

『…はい』

私は紗童に入ることを決めた。

広香さんはその場で、副総の翔子さんと特攻の佳奈さんに電話で報告をし、私の紗童入りは決定した。

### 第31話： 親友

今日の夜の集会で、紗童のメンバーと顔合わせする。

私が正式に紗童のメンバーと認められる日だ。

昨日の夜から緊張して良く寝れなくて、今日も朝早く目が覚めてしまった。

こんなことも珍しいので、今日は朝から学校へ行こう。

久しぶり朝の通勤、通学ラッシュに揉まれた。

嫌で嫌で省がなかつた朝のラッシュも偶にだと新鮮に感じる。

教室の扉を開けると、既に真弓は来ていた。

一人退屈そうに座っている真弓の背中を叩いた。

『おはよー』

『……おつ……』

不意打ちだったことに、真弓はひどく驚いた様子だ。

しかもそれが私だったから、一瞬言葉を失つた。

その真弓のポカーンとした姿が可笑しくって思わず笑ってしまった。

『むつー・ビックリするじやん!』

声は怒っているものの、顔は笑顔だ。

『「めん」「めん。… 恵里は?』

真弓に軽く謝り、教室を見渡した。

『恵里休みだよ。学校サボって彼氏とデートだつて…』

まあ、いつもの事だ。

恵里は彼氏以外何も見えなくなる様なタイプ。

彼氏となると、学校なんて二の次。

恵里の彼氏も学生だが、一人して良くサボって遊びに行っている。

私は彼氏がどうとうよつ、学校へ行く事自体がかつたるい。朝から一日中学校に閉じ込められる事も苦痛だ。

だから、たまにしか学校へ来ない。

来ても昼からとか…

朝から来た日は晩で帰つたり…

それに比べ真弓は毎日ちゃんと学校へ通つている。

当たり前の事なんだよつが、そんな真弓を偉いと想つ。

一時間田～六時間田までちゃんと居た事は久しぶりだった。

早々に帰る支度をし、教室を出ようとした時、真弓に声をかけられた。

『今日は遊びに行けないの?』

前までは、当たり前の様に、毎日学校帰り真弓と恵里と遊びに行っていた。

しかし、私は学校に来なくなり、恵里も毎日来る訳ではない。

今日みたいな日ぐらい真弓と遊びたいが、今日は初の集会だから…。

『じめえ〜ん』

顔の前で手を合わせ謝った。

『そつかあ。何か用事?』

そう言えば、真弓に紗童に入った事を言つていなかた。

別に隠している訳でもないし、隠すつもりもないから、真弓に云えた。

紗童に入ったこと。

今日は集会があることを。

『… そ、うなんだ』

真弓は特に驚いた様子もなく、冷静に聞き入れてくれた。

いや、決して、冷静ではなかつたのかもしれない。

真弓から寂しさを感じた。

真弓が感じている寂しさを痛い程分かる。

私と真弓の立場が逆だったなら、私は寂しいから…。

親友の事は誰よりも分かつてみたい。

親友が悩んでいるとき、進むべき道を決断するときは、相談してほしい。

親友とは、同じ時、同じ場所を感じてみたい。

……そう思つから。

私は真弓に何の相談もする事無く、紗童入りを決めてしまった。

真弓に相談する余間もなく、事が運んでしまったから仕方がないが、直ぐに報告することなく、今に至ってしまったから。

真弓は私との距離を感じてしまったんじゃないかな…。

私が新しい世界、真弓と違う世界に行ってしまう様に感じててるんじゃないかな…。

私が真弓なら、そう思つから…。

ごめんね。

でも、私は変わらないよ。

レディースに入ったって、新しい世界を見つけても、真弓との関係は変わらない。

真弓の知る私で居続けるから。

真弓は私の大切な親友だよ。

口に出し言つのは照れる。

けど、この思いを精一杯真弓に伝えたい。

そう思い、帰り道真弓と別れるまで、話し続けた。  
くだらない話しを耐えることなく、話し続けた。  
真弓の寂しさを取り扱つてあげたくて…。

きっと私の気持ちは真弓に届いたはず…。

届いたよね…。

届いてほしい…。

集会場所は祭りの日に集まっていた公園。

紗童の集会は第2第4金曜日にこの公園で行われる。

この公園はここでは一番広い公園。

公園は一つに別れていて、遊具やアスレチックなどがある場所と、その遊具のある場所を抜けると、広場になっている。広場の真ん中には、噴水があり、ベンチが並んでいる。その広場の方が、紗童の集会場所になつていて。

私と広香さんが集会場所に着いた頃には、すでにメンバーは揃つていた。

広香さんがバイクで公園に入ると、さつきまで群がつていたメンバーが脇に寄り、道を作つた。

広香さんは、その人混みの間をバイクで通り抜けた。

広香さんの紗童での偉大さを見せられた。

…と共に、私は優越感を感じた。

広香さんの後ろに乗り、人混みを分けて通り抜ける感じ…。

広香さんのお下がりの特攻服を着ている私…。

普通、下つ端が広香さんのバイクに乗せてもらえる訳もないだろう。まして、広香さんの特攻服を譲つてもらつ事もないだろう。

それが私は出来る。

きっとみんなは羨ましがつているはず…。

・私は特別なんだ。

みんなが尊敬し、怖れ、目標としている広香さん。  
何十人といる紗童をまとめ、トップに立つ広香さん。  
高い存在の広香さん。

でも、私はみんなよりも広香さんと近い場所に居るんだ。

広香さんは私を特別だと思つてくれているんだ。

紗童のメンバーは、トップ3の、広香さん、翔子さん、佳奈さん  
を除き、現在29名いるらしい。

私はその29名の前に立ち、挨拶をした。最初は緊張でガクガクだ  
つたが、私の挨拶は早々に終わつた。

奥のほうに菜奈ちゃんの姿を見つけた。  
こつちを見て笑いかけている。

挨拶が終わると、副総の翔子さんが話しだし、私はどこに行つたら  
いいか分からず、後ろを振り返ると、広香さんが首を振り後ろに行  
けと合図してくれ、私はそのまま菜奈ちゃんの居る場所に行つた。

「梓ちゃん紗童に入つたんだ」

小さな声で話し掛けてきた。

私は笑顔で頷いた。

菜奈ちゃんも笑顔を返してくれた。

集会は一時間くらいで終わり、今日はバイクで走ることなく、解散になった。

私はしばらく公園に残り、菜奈ちゃんと話した。

『びっくりしたよ。まさか梓ちゃんがメンバーになるなんて！』

『私もまさかだよ！急に決まった事だから…』

『しかも、梓ちゃんの特攻服つて広香さんのじやない？』

『えつ！？どうして分かつたの？』

『後…』

私は後を振り返った。

後には誰もいない。

『違うよ！特攻服の後ろの文字だよ！』

『それがどうしたの？みんな一緒じゃん』

『梓ちゃん知らないの？私達黒服のメンバーは、特攻服に無駄に刺繡入れれないの…。でもバックに花の刺繡を入れるのは唯一許されているの』

『そりなんだ。知らなかつた』

『でね！大体みんな薔薇とか牡丹とか入れてるんだけど、広香さんは椿なんだ！』

菜奈ちゃんは私の背中の刺繡を見ていた。

『他にはいないの？』

『広香さんより前にも入れてた人はいなかつたらしいけど、後に入つた人は入れたくても入れれないんだよね』

『……じひじへ.』

『広香さん黒服の時からみんなに慕われてたし、名前もかなり知れてたぐらいだし、そんな広香さんと同じ刺繡を入れる度胸はみんなないんだよ！椿＝広香さん。みたいな感じで定着したって訳』

『…… そうなの？』

何だか大変な物を貰つてしまつた様な…。不安だ。

『うん。 でも羨ましいなあ……』

菜奈ちゃんの一言で私の不安は吹つ飛んだ。

みんなが手に出来なかつた物を私は広香さん直々に譲り受けたんだ。

やつぱり私は特別なんだ！

『梓ー！』

その声は広香さんだつた。

私は振り返り、広香さんに体を向けた。

『私帰るけど、梓じつする？帰るんなら送つてってやるよ』

私は振り返り、菜奈ちゃんを見た。

『私もう帰ります。お疲れ様でした』

菜奈ちゃんは広香さんに一礼し、私に笑いかけ手を振り、公園を後にした。

『じゃ！行こつか！』

『はい』

私達はバイクの置いてある場所まで歩いた。

『梓まだ時間大丈夫？』

『はい。大丈夫ですよ』

『お腹すいたから飯付き合つてよ』

『はい』

私はまた広香さんの運転するバイクの後ろに乗り、バイクは走り出した。

風が気持ち良い。

私は居場所を見つけた気がした。

それは、紗童という居場所ではなく、広香さんといつ強く大きな壁に守られた居場所。

### 第33話：茂貴

集会後、広香さんに連れられファミレスに来た。

メイコーの注文をしたところで広香さんの携帯が鳴った。  
私に断りをいれ、電話にでた。  
このあたりの些細な気遣いが大人だ。

『はい。…終わつたよ。…今梓どじ飯食べに来てる…』

電話の途中、広香さんは電話口を押さえ私を見た。

『達也達も呼んでもいい?』

私は笑顔で頷いた。

広香さんは電話に戻つた。

『来なよ。…うん。…じゃあ待つてるね』

『じめんなあ…急に』

電話を切ると私に言った。

私は笑顔で首を横に振つた。  
達也さんなら大歓迎。

『今日の集会どうだつた?』

急に話しを振られた。

『…緊張しました』

『やつだらつなあ。誰だつて始めは緊張するよーみんな良い奴だからね。すぐ馴染めると思つよ』

『はー』

メニューがテーブルに置き、食べ始めたところで達也さんが来た。その後ろには茂貴さんもいた。

私は広香さんは向かって坐つてこるため、達也さんは広香さんの横。茂貴さんは私の隣に座つた。

『梓ちゃんー紗童入りおめでとー』

達也さんは満面の笑みだ。

『あつがとーれこます』

面と向かつて言われると恥ずかしい。

『これからは広香を目標に頑張るんだよ』  
達也さんは広香さんの頭をポンと叩いた。

『つねせよ』

広香さんは達也さんの頭を叩き返した。

達也さんは『冗談で言つただらつけど、私は本気で広香さんを目標としたい。

それはレディースの頭ではなく、広香さんの様な女性になりたいと思つ。

情に厚く、いつも冷静で、大らかで…

広香さんの様なカッコイイ女性になりたい。

『 もつもろそろ帰らつか 』

広香さんの声にみんな時計を見た。  
三時間は話し込んでいただろつか。

日付は変わっていた。

『 茂貴。 梓ちゃん送つてやれば? 』

達也さんが言い出した。

『 セウだよー。 』

広香さんも乗つてきた。

『 俺はいいけど、梓ちゃんどうなの? 』

茂貴さんが顔を私に向けた。

広香さんも達也さんも私を見ている…。

私は送つてもらつ立場。誰に送つてもらつかなんて指名できない。  
しかも広香さんも茂貴さんに送つてもらうこと贊成している。い  
こで、嫌だと言えば、ただのわがままになってしまつ…。

『 …お願いします』

私は茂貴さんに送つてもらつ事にした。

私は茂貴はフアミレスを出た。

『 じゃあなつ 』

『 茂貴! 梓に変なことするなよ 』

広香さんと達也さんは笑いながら歩いて行った。

広香さんは単車に乗り、達也さんは自分の車に乗った。二人は同じ方向に走つて行つた。

『俺らも行こつか

茂貴さんの車はかなり車高が下がつてゐるセダンで、フルスモークで社内は全然見えない。

『…失礼します』

茂貴さんの車の助手席に乗つた。

…芳香剤のいい匂いがする。

自宅の場所を伝えると茂貴さんは車を走らせた。

社内は沈黙が続いた。

茂貴さんはそんなにお喋りではない。

みんなでいるときも達也さんのノリに突つ込む程度。

私も話す事が見当たらず、流れる外の景色を見ていた。でも、そつと視線を茂貴さんに移した。ただ何気に……。

しかし、何気に見た茂貴さんに私は見とれてしまった。

運転する茂貴さんの横顔。

決して格好いい訳ではない。

格好良さでは達也さんの方が断然だ。

しかし、その落ち着いた面持ちが妙に大人に感じる。

でもさすが元ヤンキー。その風格は未だ漂わせている。  
そこにそそられる。

暴走族を引退した今でも、名前は知られている。  
達也さんにも同じだが、現役の暴走族からも一目置かれている  
らしい…。

…「Jの人の側にいれば、怖いものなんてないんだろうな…。

『どうしたの?』

私の視線を感じてか、前を向いていた視線が一瞬私に移された。

『…何もないです』

まさかそんな事を考えていたなんて言える訳はない。

また沈黙になつた。

しばらくすると茂貴さんが口を開いた。

『梓ちゃん本当に彼氏いないの?』

『はい』

『でもモテるつしょ?』

『そんな事ないですよ  
『またまたあ…』

少し場の雰囲気が和んできた。

『茂貴さん』そ彼女は?  
』の言葉を自分で言つてから思つた。

…そうだよ。この人の側に… とか思つ前に彼女がいるかどうかま  
だ知らなかつたんだ。

『俺はないよ…』

『本当に?』

笑みを浮かべて聞き返した。

『本当に?』

さつきまでのぎこちない沈黙が嘘の様に社内は和み、あつとう間  
に血色に着いた。

『わざわざありがとうございます』

少し寂しさを感じながら車のドアを開けた。

『ちょっと待つてー携帯の番号教えて』

『…はい』

私はその言葉を待っていた。

携帯の番号を聞かれたかったばかりではない。  
このまま何もなく、さよならだけは嫌だつた。  
少しでも進展が欲しかつた…。

少しでも私に興味を持つてもらいたかった。  
女として意識して欲しい。

社内での短い間に私はそう思った。

それから茂貴さんと連絡をとるようになり、一人で会う様にもなつ  
た。

茂貴さんは長距離のトラックの運転手をしていて、平日仕事が休み  
のときもあり、学校まで迎えに来てくれることもあった。  
私はそれが嬉しくて学校に行く回数が前に比べ断然増えた。

みんな徒歩で帰る中、私は車で男に迎えに来てもらひて帰る…。かなり気分がいいものだ。

「」のことは、広香さんにも報告はしてある。

「茂ちゃん梓の事気に入つてたからなあ」

そう言われた。

広香さんは茂貴さんの事を茂ちゃんと呼んでいる。

…私と茂貴さんが付き合つまで、そう時間はからなかつた。

初めて茂貴さんの家に行き、初めて一人が体を重ねた、その最中に  
「付き合つて」  
つて言われた。

そんな場面で言われて断れる訳がない…。

まあ断るつもりもなかつたから、即〇〇で付き合つ様になつた。

「」のことを広香さんに報告したら…

『茂ちゃんなら大事にしてくれると頼つよ』

祝福の言葉をもらつた。

私達は付き合つてから、ほぼ毎日一緒に過ごした。

茂貴さんが仕事が終われば自宅まで迎えに来てくれて、そのまま茂貴さんの家に泊まる。

当然泊まつた次の日は茂貴さんは仕事。

私は移動する足がないため、学校は休む。

茂貴さんの帰りをひたすら暇を潰しながら待つ。

茂貴さんが帰ってきたといいで、私は自宅に送つてもいい。

だから、その日は別々に寝る。

…また次の日は茂貴さんは仕事を終え迎えに来る…。

そんな日々を続けた。

当然、増えていた学校に行くことも、以前にも増し、行かなくなつた。

…行けなくなつた。

### 第34話：茂貴の思い

週に一回…。行つても一回…の学校。

月に一回の紗童の集会。

それ以外の日は茂貴。

…それ以外の時間は茂貴と過ごす様になつた。

夏は終わりを迎えるとしている。

私は毎日の日々に追われていた。

たまに行く学校。

たまにしか会わなくなつた真弓と恵里。

たまにだから二人との時間を少しでも持ちたい。

…学校が終わり茂貴と会つまでの数時間、真弓と恵里と過ごした。  
どこに行く訳でもない。

学校帰り近くの喫茶店に入りお喋りするだけ。

…それだけでいい。

私の存在を感じられるから。

真弓と恵里の中に私の存在を感じられる時間だから…。

紗童の集会が終われば、茂貴が迎えに来る。

集会後、広香ちゃんと茂貴さんは「飯を食べに行くことがあるから」。

紗童に入り、菜奈ちゃんと仲良くなつたが、プライベートでは遊んだことがない。

菜奈ちゃんのためにあける時間の余裕は今の私にはない。

今の私には、これだけの関係しかない。  
凄く小さな世界で生きている。

でも今の環境に不満はない。

たまにしか会わなくても、私を受け入れてくれる友達がいる……。

たまに真面目  
「もつと学校来なよ」  
とか

「たまにはゆつくり私達とも遊ぼうよ」とか言つけど、それは聞き流している。その点恵里は私に対しても言わない。その場その場の私を受け入れてくれる。

広香ちゃんと達也さんは私を可愛がってくれる。

茂貴は私を愛してくれている。

小さな世界だが、私のいる世界は大きな壁に守られ、世間の若者の間では、地位と名譽を取ってくれる場所。

……満足だ。

今私は、これだけの関係しかない。  
凄く小さな世界で生きている。

でも今の環境に不満はない。

たまにしか会わなくても、私を受け入れてくれる友達がいる……。

たまに真尋は

「もつと学校来なよ

とか

「たまにはゆつくり私達とも遊ぼうよ」  
とか言つけど、それは聞き流している。  
その点恵里は私に対しても言わない。  
その場その場の私を受け入れてくれる。

広香さんと達也さんは私を可愛がってくれる。

茂貴は私を愛してくれている。

小さな世界だが、私のいる世界は広香さんや達也さんや茂貴によつて、大きな壁で守られ、世間の若者の間では、地位と名前をうながしてくれる場所。

……満足だ。

今日は茂貴が学校まで迎えに来てくれる。『真尋』と恵里とは学校を出たところで別れた。

いつもの様に茂貴の家に向かつた。

私達はまだ付き合つて1ヶ月とない。  
毎日一緒に居るせいか、まだ付き合つて1ヶ月と経つていなうこと  
にびっくりするへりい。

陽も暮れ、のんびり過ごしてみると、達也さんが來た。

達也さんはよく会つてゐるが、茂貴の家で会つことは初めて。  
しかも今日は一人だ。

『珍しいじゃん一人で…』

達也さんを見るなり茂貴が言つた。

『今日は翔子と出かけるんだつてよ』

…ちゃんと広香さんは自分の時間を持つてゐるんだ。

広香さんを羨ましいと感じた。

…私だつて、真下や恵里がいる。  
ゆつくり遊ぶ時はないが、会つてはしてゐる。

そう自分で自分で言い聞かせた。

『それにしても良かつたなあ 茂貴』

達也さんは煙草に火を付け部屋の真ん中に座った。

『何が?』

『梓ちゃんと同じで』

『ああ……』

茂貴は素つ気ない。

『つてか、お前まだこんなのは持つてんの?』

部屋の片隅に置いてある箱を指指した。

私もこの箱に違和感を感じていた。

茂貴の部屋は角にテレビが置いてあり、無造作に布団が敷いてあり、後は灰皿がある程度の何もないシンプルな部屋。

その片隅にピンクのプラスチックの箱が置いてある。蓋が閉まっている中は見えない。

最初は違和感を感じたが、今は気にならなくなっていた。

『まつとけよ』

達也さんの問いかにも茂貴は素つ気ない。

『いつまでもこんなのは置いてたら梓ちゃんも嫌だよなあ?』

達也さんは私に手を向けた。

『えつ?』

急に話を振られ言葉が見当たらない。  
しかも、氣にも止めなかつた箱の話題。

『お前も早くケジメつけよ』

茂貴は達也さんを無視しテレビを見ている。

何故、達也さんは今まで箱の話をするんだ?。

この箱が凄く気になつてきた。  
一体何が入つてるんだ?。

茂貴の様子もいつもと違つ。

今ここで聞かなきゃ聞けない……。  
達也さんはいるこの場で聞かなきゃ。

そう直感した。

『この箱何なの?』

『お前』

達也さんは茂貴を見た。

『俺バツイチなんだ……』

やつと口を開いた茂貴の言葉。

『……え?』

『俺結婚してたんだ。子供もいる』

私に背中を向けたまま座つてこる茂貴。

今茂貴はどんな顔をしてるの？

私はどうしたらいいの？

沈黙が続いた。

誰も話そうとしない。

その時達也さんの携帯が鳴つた。

『ねい。…分かった』

電話を切ると達也さんは立ち上がり上がつた。

『広香帰つてきたから、俺…帰るわ』

茂貴はまだ何も言わない。

帰らないで…。

今茂貴と二人きりにしないで…。

そんな思いを視線に込めて達也さんを見た。

私の思いにも虚しく達也さんは部屋を出た。

『ちやんと梓ちやんに話せよ』

『今は梓ちやんだけだから…』

そう私達に声を掛け出て行つてしまつた。

『…あこつまよべ蝶るよなつー！本當』

茂貴が私に向き直った。

私は茂貴の目を見れない。

『…『めんな。騙してた訳じやないんだ』

『…もういいよ』

言い訳なんて聞きたくない。

『これが最後になつてもいい。お願ひだから聞いて…』

茂貴は私に頭を下げた。

私が返事をする前に茂貴は話出した。

『半年前に別れたんだ。男作つて出でいつたよ。…子供は嫁が引き取つた。これは子供が残して行つたおもちゃ箱…。ずっと忘れられなくて…引きずつてた…』

茂貴の目を見れない。

涙が溢れてくる…。

この涙は、怒りからなのか、悲しさからなのか自分でも分からない。

今この場で涙を流したくはない。

私の気持ちとは裏腹に涙はどんどん溢れてくる。

『…『めんな。俺…自分が思つてたかった。…梓に嫌われたくない…。…『めん。俺…自分が思つてた以上に梓に惹かれて…。…今は誰よりも梓を愛して…』』』

茂貴が私を愛してくれていてることは嘘ではなかつたんだ。

『もつといよ…茂貴

涙で震える声を絞り出した。

『やつぱ俺ら終わりつ..』

私は首を横に振つた。

『じゃあ…』

今度は縦に振つた。

…私は茂貴を許そつと決めた。

『…ありがと…』

茂貴は私を抱き締めた。

茂貴の暖かさを感じ、涙が止まらない。

茂貴の震える肩。

泣いているのだろうか。

今茂貴は私を思つていてくれている。

それでいい…。

それでいいんだ。

### 第35話：理想の女

日曜日といふのに私は昼間から家で一人。

昨日はいつものように、茂貴と一緒にだった。

…日曜日は茂貴も仕事は休みで、土曜日の夜はゆっくり過いで、朝も一緒に目覚め、一日中一緒にいられる。

だから私は土曜日の夜からをいつも楽しみにしている。

しかし、昨日は違った。

茂貴は仕事が終わるといつものように私を迎えてきた。

いつものように、茂貴の部屋でゆっくり過ごした。

私達は布団に寝転がり、部屋の明かりは付けずテレビの明かりだけで過ごした。

まだ時間は早いが、私は少し眠くなってきたので、仰向けになり目を閉じた。

その時、茂貴は私に覆い被さった。

今から何が始まるのかは分かる。

私達は大抵寝る前に体を重ねる。。

…まだ時間早くない…？

…そう思いながらも私は茂貴を受け入れる体勢をとった。

唇と唇が軽く触れ、舌と舌が絡まる。

そのまま私は服を脱がされ、茂貴の唇が私の首筋へ…胸へ…。

また茂貴は私の唇に戻り、唇を離すことなく、今度は私が茂貴を覆い被さつた。

私は茂貴を愛撫し、また茂貴が私を愛撫し…。

茂貴はその行為の良さを私に教えてくれた人。

茂貴と会つまでの私は、SEXをあまり好まなかつた。

…ただその場雰囲気や、付き合い程度でしていた。

茂貴を知つてから、私は毎日茂貴を欲しがつてゐる。

私達は頂点に達し、ぐつたりと横になつた。

目を閉じ余韻に浸つてゐると、茂貴が布団から出た氣配を感じ目を開けた。

茂貴は服を着初めていた。

いつもなら一緒に寝ているのに……。

その思いを抑え、私も起き上がり服を着た。

終えた後、男が服を着初めているのに、何時までも一人裸で浸つて  
いるのは虚しいから。

そう思ったのも、茂貴が何時もと違うことを感じていたから……。

二人共服を着て、煙草を吸い終えたとき……

『今日は送つていいくよ……』

やはりきた。

その言葉。

…今日は茂貴と一緒に朝を迎えるれない…  
そう心のどこかで感じた。

『…………うん』

私の心の中はこんなに素直じやない。

…帰りたくない。

…茂貴と居たい。

…どうして今日は帰すの？

…私の事嫌いになつたの？

そう縋り付きたい気持ちを押さえた。

私が縋つたところで、ただ茂貴を困らせるだけ。

うつん。縋り付く女は醜い。

私はそう思つ。

醜い私を見られたくないから。

嫌われたくないから。

でも、頷くだけで精一杯。

明るくいつも通りなんて出来ないよ。

帰りの車内で沈黙が続く。

私が感じている空気の重たさは、茂貴も同様に感じているだらう。

『…『めんな

茂貴が沈黙を破つた。

『何が?』

一緒に居れないことを謝つているんだろう。しかし、私は何も感じていない振りをした。

それが大人だと思うから。

それが理解ある格好いい女だと思うから。

『明日、子供と会つんだ…』

子供？

前の奥さんが引き取つた子供？

『…ひん』

私は暴れ出ししそうな感情を押し殺した。

『月に一回、会わせてくれる約束なんだ』

『前の奥さんは?』

聞いてしまつた…。

素直に頷けなかつた。

慎悟のときを思い出したから…。

あの時真実は慎悟は前の彼女に戻つたりはしていなかつた。

でもそれは後になつて分かつたこと…。

あの時の様な寂しい思いはもうしたくないから…。

後悔したくないから…。

『前の嫁も一緒…。でも!俺は子供に会いに行くだけ!前の嫁とはもう何もないし、何も思わない。信じてほしい。…今は梓が一番だ

から…』

『さん…ひん』

素直に嬉しい。

これでちちんと茂貴を送り出せる。

『明日の夜会おつな。迎えに行くから』

『…まだわかんない』

『やつか。でも帰つたら連絡するから』

茂貴が私を気遣つて言つてくれたんだろう。

ありがとう茂貴。

でも私、少し反抗したかつたんだ。  
少し茂貴に心配かけたかつた。

だから、こんな返事をしちやつたの。

「めんね茂貴。  
愛してゐよ茂貴。

だから今田は田曜日なのに、一人茂貴の帰りを待つてゐる。

寂しくなんてない。  
不安なんて感じない。

茂貴がちゃんと戻つてくるつて確信してゐるから。

何時茂貴が迎えにきてもいい様に既に準備は出来ている。

携帯が鳴った。

茂貴だ。

「はい……」

待っていた茂貴からの電話。  
嬉しくてたまらない電話。  
でも私は冷静を装った。

茂貴は直ぐ迎えに来てくれた。

昨日も会ったはずなのに、茂貴と会えた喜びは半端ではなかつた。

その感情を押さえているつもりでも、言葉が止まらなく出る。

茂貴と話したい。

茂貴を近くで感じたい。

『帰り早かつたね』

『そうか？もつと早く帰るつもりだったんだけど……』

『そうなんだ』

その話を引つ張るのは止めた。

聞きたくないから。

前の奥さんの事も……

子供と何をしていたとか…

聞きたくないから。

『今日はもう会ってくれないかと思つたよ』

『どうして?』

『…昨日そんな感じだつたから』

それは茂貴に意地悪したかつただけ…。本当は会いたくて、会いたくて、ずっと待つてた。

『もうかなあ』

『…そうだよ! もう梓怒つて、遊びにでも行つたんじやねえかと心配したんだからなつ!』

眉間に皺を寄せ、ムキになつてゐる。

…心配してくれてたんだ。

ありがとう茂貴。

『遊びに行つと思つたけど、寝過ぎちゃつて、行けなかつたよ』

嘘。

ずっと待つてた。

茂貴に会いたくて、遊びになんて行けなによ。

本当の事は言わない。

『茂貴の帰りをずっと待つてた』

なんて、言えない。

だって、重いじゃん。

茂貴に重い女なんて思われたくないから。

茂貴には心の広い、理解のある女でいたいから。

茂貴が好きだから。

嫌われたくないから。

ずっと好きでいてほしいから。

その為だったら、気持ちを押し殺す事なんて、ビリッて事ない。

茂貴に愛される女でいたい。

それが偽りの私だとしても……。

辛いなんて思わない。

茂貴が結婚してたことも過去の事。

子供がいても仕方がない事。

全てを受け入れよう……。

### 第36話：突然

茂貴と付き合い、3ヶ月が経つ。

寒さもピークに達し、今年も終わりに近づいている。  
一学期も今日で最後…。

12月といえば、カツプル最大のイベントがある。クリスマスだ。  
真弓と恵里はクリスマスの予定を楽しそうに話している。  
真弓は彼氏と遠出をして泊まりでイルミネーションを見に行く  
そうだ。

恵里は彼氏にクリスマスプレゼントを買いに連れて行つてもら  
ううらしき。

『梓、クリスマスの予定は？』

真弓が笑顔で聞いてきた。

『もち彼氏と過ごすでしょ？』

恵里も笑顔を私に向ける。

『……うん』

笑顔の一人に笑顔で返した。

クリスマスが待ち遠しくてたまらない

…かの様に。

本当の私は、クリスマスなんて楽しみじゃない。  
かと言つて、嫌な訳でもない。

真弓や恵里と違つて、…ただ私には、いつもと同じ日常だから。  
茂貴とはクリスマスも一緒に過ごすだろう。

でもそれは、クリスマスだからじゃなく、いつも通りの事。

だから、クリスマスなんて関係ない。

遠出をすることも、買い物に行くこともない。  
家で過ごすのだろう。

遠出をすれば、ガソリン代だってかかる。  
宿泊料だっている。

勿論、買い物に行くにはお金がいる。

だから私達はいつも家で過ごしている。

『梓はきっとプレゼントも良いもの貰えるんだろうなあ』

恵里が呟いた。

『だつて梓の彼氏は社会人だもんね』

…私も最初はそう思つたよ。  
働いていても、お金がない人だつているの。

茂貴がどれだけ働いたって、余るお金なんてないんだよ。

私は心の中で眞理と恵里に言った。

茂貴と付き合つて二ヶ月が過ぎた頃だつた。

夜いつもの様に茂貴の家にいたら、一人のおじさんが何も言わずに平氣で部屋に入つてきた。

年の頃は40歳ぐらいだろう。

髪の毛には少し白髪があり、見た感じは、生真面目なサラリーマンといった感じだ。

しかし、おじさんの登場に驚いたのは私だけ。

そのおじさんは茂貴のお兄さんだつたから。

茂貴に外に行くよう言われ、私は家を出た。

茂貴の家は平屋の小さい家。

玄関を入つて直ぐ左が茂貴の部屋。

右には小さいキッチン。

キッチンを通つて、奥に部屋が二つあるらしい。

茂貴の部屋以外の家の中は聞いただけで知らない。

部屋から出たものの、どうしたらいいか分からず、外に出た。

私は寒空の中、お兄さんが帰るのを待つた。

少しでも寒さを感じない様に、身を丸め座つていた。

15分程し、お兄さんは家から出てきた。

私には田もくれず、前を通り過ぎ歩いて行つた。

茂貴に呼ばれ、部屋に入ると、明らかに、お兄さんが来る前の茂貴とは別人になつていた。

表情は強張つていて、私の存在を忘れたかの様に、黙々と煙草を吸つてゐる。

私はお兄さんと茂貴が一体何を話していたのかは知らない。

だから普通に話しがければいいのに、私は、その茂貴の放つ空気の重たさで、声を掛けることも出来ない。

茂貴の側に静かに座つた。

『…俺つて…駄目な奴だよ…』

茂貴は頭を抱え呟いた。

『…何が?』

その言葉しか出てこなかつた。

『…別れよつ

…?

…何?

…どうして?

…私に言つてるの?

『……』

言葉を失つたとこりのせいかこいつ事だ。  
状況が全く把握出来ない。

何故急に……。

『……俺ら別れよ』

煙草を灰皿に押し付けるように消し、私を見る事なく、もう一度言つた。

『……どうして？何で急にそんな事言つの？』

こんな別れつてないよ……。

訳ぐらい教えてよ。

私は必死な思いで問い合わせた。

『……俺は梓を幸せに出来ない。……俺じゃ駄目なんだ』

茂貴と目が合つた。

茂貴の目にまうつすら涙が浮かんでいる。

『どうして？意味分かんないよ……』

茂貴は私から目を反らし、また煙草を吸い出した。  
その姿は、何もかも吹つ切つた様な……  
もう私を消し去りつとしている様に見える。

……お願い私を一人にしないで。

……捨てないで……

……茂貴は私のじやなくなる。

……茂貴が私から離れて行つちやう。

泣いたら茂貴を困らせるだけ……。

嫌われちやう……。

だけど茂貴の横顔を見ると、涙が止まらない。

これ以上嫌われたくないから、涙を見せない様、茂貴に背を向けた。その時、後ろに感じたのは、茂貴の温もりだった。

後ろから私を抱きしめていた。

この温もりが最後の別れだと……

最後の優しさだと……

言葉の代わりに、茂貴の温もりがそう言つている感じがした。

寂しさ。

悲しみ。

悔しさ。

無念さ。

全てが私を襲う。

声が出そつなくらい涙が出る。

『……梓……俺のこと好き?』

さつきまでとは違い、茂貴の声は落ち着いていた。

『好き…だよ…。』

話す事も出来ないほど涙は出る。

でも、必死で答えた。

『…でちやんと自分の気持ちを言わないと駄目だと思ったから。

『俺も、梓の事好き』

耳元で囁いた茂貴の言葉に戸惑いを隠せなかつた。

『なじびつして…?…びつして別れるの?..』

茂貴の腕を離し、振り返つた。

向き合つた状況も一瞬。

今度は前から抱き締められた。

『好きだから別れるんだよ…。梓が大切だから』

『そんなの分かんないよ…』

茂貴を押し退けた。

お互い好きなのに別れなきやいけない理由なんてあるの?

そんなの納得出来ない!

好きだから…大切だから別れる…。

それが私の幸せ？

好きな相手と別れる事が幸せな訳がない。

幸せを感じられない。

私は、気持ちをありのまま茂貴に打つけた。

これほど、自分の感情を露わにした事は初めてだった。

…友達にも

…茂貴にも

嫌われたくないから…。

常に

「良い人」

でいたかった。

でも…今は良い人でいられない。

茂貴を離したくないから。

今ある気持ちを伝えないと、きっと茂貴とは終わってしまう。

その危機感が私を露わにさせた。

私の必死の思いが届いたのか、茂貴が訳を話し出した。

## 番外編・茂貴の過去。これが現実。

父、母、兄の四人家族。

父は家族の為に働き、母は家族の為に戻へし、何處にでもある幸せな家族。

父と母は40代半ばにして茂貴を設けた。

茂貴が生まれたときには既に兄は中学三年生。

一人つ子同然に育てられ、ビビリかといつと甘やかされて育つた。

永遠に続くはずの幸せがあるとき、一瞬で崩れた。

茂貴が10歳のとき、母が倒れた。

診断は大腸癌。

気付いた時にはもう遅く、じぱりくし、母はこの世を去った。

享年54歳。

母の死を境に家族は崩れてしまった。

父は母の死から立ち直れず、仕事にも行かなくなり、一日中酒に溺れる日々が続いた。

社会人だった兄はそんな父に嫌気がさし、家を出て行つた。

茂貴はその時まだ小学校4年生。家を出ることすら出来ない。

自分を置いて、一人で出て行き……

一人だけ逃げた兄に対し憎しみしか感じなくなつた。

その頃から、茂貴は炊事、洗濯、家事全般をこなす様になつた。

生前、母が蓄えた貯金を崩し、何とか日々食べていく事は出来た。

しかし、父は仕事を辞め、入つてくるお金はない。  
貯金がそこを付いたのはあつという間だつた。

食事を取りれない日々が続いた。

父は相変わらず、一人部屋に隠り、浴びる程、酒を飲んでいた。

同じ家にいても、父と顔を合わすことはなく、やせ細つしていく茂貴に気付きもしない。

その時、茂貴は感じた。

自分の身は自分で守らないと……。

酒に溺れ、顔も合わすことのない父。  
そんな父だが、自分を守ってくれる。  
助けてくれると……。

母が居た頃の父とは、全く変わつてしまつたが、昔の父の面影を、未だ心の片隅にまだ描いていたのだ。

もつ苗の父はいない…。

そう確信してから、茂貴は変わった。

働きたくても、働くことの出来ない茂貴は、自分が生き延びる手段を考えた。

……万引きだ。

茂貴は万引きで、生活を立てた。

しかし、毎回毎回上手くいはずもなく、一度捕まつた事があった。未成年。しかも子供とあって、警察を呼ぶこともなく、その場はとりあえず親の出番だ。

勿論、家に電話をした所で父が出るはずもない。

茂貴はずつと泣きじやくつっていた。

困り果てた店員は、軽く注意し、そのまま茂貴を釈放した。

これも全て茂貴の計算済み。生きて行く為の手段だ。

中学に入り、そんな生活にも疲れた頃。

茂貴は良い案を思い付いた。

簡単にお金を手に入れる方法。

……喝上げだ。

標的を見つけると、直ぐに実行した。

それは以外にも簡単で、あっさりと事は運んだ。

今度は、そんな生活を続けていると、茂貴が喝上げをしていくことを知った上級生に目を付けられる様になつた。

茂貴も、目を付けられている事を知つていたが、そんな事では止められない。

生活が掛かっているのだから…。

等々、上級生は実行に表した。

茂貴は下校途中に囲まれたのだ。

しかし、それぐらいで、怯えていたら喝上げなんて出来ない。

自分を囲む上級生は、茂貴にはただの邪魔な壁にしか映らなかつた。

…かと言つて、相手は5人…。

壁は大き過ぎる。

『てめえら、下級生相手にタイムマンも張れねえのかよー。』

相手はまんまと乗ってきた。

リーダーらしき奴とタイムマン張る事になつた。

茂貴は今まで強がつてはいたものの、喧嘩は初めてだつた。

しかし、負ける気がしない…。

実際、結果は茂貴の圧勝だった。

茂貴をそこまでさせたのは、ただ生きて行く為…。

それを妨げるものは、誰であろうと許さない。

その欲望が茂貴を強くさせた。

それからりと言つもの、茂貴の敵は増える一方だった。

それと同時に、相手を倒し、茂貴に平伏した分、収入は増えた。

喧嘩に明け暮れ、茂貴は圧勝を続けた。

暴走族の頭が、その噂を聞きつけ、茂貴を口説き落とし、チームに入れた。

その暴走族で、達也と出会った。

茂貴、中学三年生だった。

中学を卒業し、茂貴は就職した。

その頃の父は、もはや、母の死に立ち直れないといった状況ではなかつた。

只、家でゴロゴロ酒を飲む。

その墮落した生活から抜け出せないだけだった。

その証拠に、娼婦が家を出入りする様になつた。

狭い家。

襖一枚向こうの出来事なんてまる分かりだ。

茂貴から見たら、古汚い婆（娼婦）の、汚い枯れた喘ぎ声までも聞こえてくる。

…酒を買つ金は？

…娼婦を買つ金は？

苛立ちと嫌悪感を感じない日はない。

それでも、茂貴が家を出る事は出来なかつた。

中卒で、まだ16歳の茂貴の収入なんてしれていますから。

それに、父の事なんて、もうどうでもいい。

何処かで金を借りていようが、何をしていようが俺には関係ない。

そう思つていた。

そんな茂貴が癒やされる場所を見つけた。

前の妻との出会いだ。

茂貴は暴走族に入つてから一段と名前が売れた。

そんな茂貴に憧れを抱き、彼女から攻めたのだ。

付き合つて半年と経たない内に、彼女は妊娠。そのまま結婚。

茂貴 18歳。

若すぎる一人には、お金はなかつた。

一人で新居を構える事も出来ず、茂貴の自宅で結婚生活はスタートした。

父親は一緒だけど、気にしなければいい。

一人は幸せだった。

お金がなくて…

父が一緒でも…

これから産まれてくる子供と二人。

裕福じゃなくていい、幸せな家庭を築いていこうと…。

しかし、幸せも一瞬。

やはり父は酒と女を買つため、多額の借金をしていたのだ。

働いてもいない父が、表企業の金融会社から借りれる筈もない。裏企業からお金を借りていたのだ。

返済が届こうつていたのか、取り立てが来たのだ…。

朝晩構わず毎日めぢやくぢやな取り立てが来る。

居留守を使つても、そのストレスは半端ではない。

家に居ると、取り立てが来る。

妻は家に居る事が少なくなり、等々帰つて来なくなつた。

父親に返済能力が無いと見切ると、取り立ては茂貴へと回つた。

家を出た処で、自分への取り立ては避けられない。

そう思つた茂貴は、父親の借金を肩代わりする事を決めた…。

父親の借金は、利息が山となり、膨大な額だった。

茂貴の収入では利息を払つていいくのも間々成らない。

茂貴はプライドを捨て、数年連絡を取つていない兄に助けて貰おうと頭を下げ頼んだ。

しかし、兄から返つてきた言葉は無残だった。

兄は結婚していて、子供にも恵まれ、幸せを掴んでいた。

『人の幸せを邪魔するな！  
俺には関係ない。』

あつたり見捨てられた。

茂貴は仕事を掛け持ち、寝る間を惜しんで働き、借金の返済に宛てた。

それは、父の為ではない。

愛する妻が戻つて来てくれる信じていいから。

また幸せを取り戻したいから。

その一心だった。

しかし現実は、利息を返して行くのが精一杯。

そんなある日、一通の手紙が届いた。

・家庭裁判所からだ。

妻が離婚調停の申し立てたのだ。

・何故、直接妻の口から言つてくれなかつたのか。

しかし、妻の取つた行動は正しかつた。

直接、離婚を言われた処で、すんなり承諾しなかつただろう。

妻はまだ自分を愛していると信じていたから。  
何より妻を愛しているから。

夫には多額の借金があり、取り立てが厳しい

その申し立ては離婚にはかなり有利な証言だった。

まだ産まれていない子供を見ることなく離婚。

これで茂貴は働く理由も、借金を返済する理由もなくなつた。

茂貴は掛け持ちしていた仕事を辞めた。

それでも、取り立ては止まない。

父の言動も変わらない。

変わつてしまつたのは茂貴だけ。

愛する妻を…子供を失つた。

父に対する憎しみは増す一方。

父を殺して仕舞おうと、包丁を突き付けた事もあつた。

…でも、出来なかつた。

昔の優しい父。

頼もしい父を忘れていなかつたからだ。

離婚してからも、茂貴は返済を続けた。

三食の食事を一食にし、無駄な金は一切使わず、全てを返済に宛てた。

そんな時、私達は出会つたのだ。

### 第37話： 気付いてしまった思い

茂貴は洗いざらい過去の出来事を話してくれた。

今日、兄が来た理由も……。

最近、利息分の支払いが滞りぎみになり、金融会社は兄の存在を調べ、兄の元へも返済の請求に行つたのだ。

兄には家族があり、勿論、妻は何も知らない。

父の借金や、父、茂貴の存在までも知られていなかつたのだ。

その場は、妻を誤魔化せたが、これ以上取り立てが来る事があると困る。

俺はもうこの家とは、縁を切つた。

この家に居るお前が始末するのが当然だ。

人の幸せを壊す様な真似をするな。

迷惑だ。

兄はその事を言つ為に、何年も近寄る事のなかつた自宅にて、茂貴の元へ来たのだ。

確かに俺はこの家に居座り続けている。

しかし、それは出たくても、出れなかつたから。

それに、この借金は俺が作つたものじゃない！

親父が勝手に作つただけだ！

俺の親父だが、お前の親父でもあるじゃないか！

なのにどうして俺だけが……。

そう言い返す事も出来た。

でも茂貴には、言い返すだけの気力もなかつた。  
それに、兄には、妻と子供がいる。

茂貴は愛する家族を失い、その辛さを知つている。  
だからこそ、兄の気持ちも痛い程分かる。

……俺には失うものは何もない。

そう思つた茂貴は、兄に言い返す事を止めたのだ。

それは、この状況を一人で背負つていくという事だ。決意だつた。

『だから……俺と居たら梓は幸せになれない。俺……梓に嫌われたくないんだ……。愛する人が去つて行くのが嫌なんだ……。それなら、梓が俺の事を好きでいてくれている内に別れたいから……』

初めて見せた茂貴の弱さ。

『……それは茂貴の考え方でしょ？……茂貴と別れたくないよ……私は茂貴を一人にはしないよ……』

こんなに弱りきつた茂貴を一人にはさせておけない。  
放つておけないよ。

私で出来るのならば、茂貴の辛さを和らげてあげたい。

茂貴の安らげる居場所になりたい。

茂貴の側にいよつ。  
そう誓つた。

だから、私はクリスマスだからといつて、真弓や恵里の様な楽しみはない。

茂貴と一緒にそれでも構わない。

私の状況を知らない真弓と恵里は、まだクリスマスの話題で盛り上がり、年上の社会人の彼氏がいる私を羨ましがっている。

真弓と恵里には茂貴の事情を話していないのだから、しょうがない。

此からだつて話すつもりはない。

話したらきっと、茂貴との付き合いで反対されると想つから……。

茂貴を好きだから……と言つ気持ちを言葉で上手く伝えられないことと思うから……。

きっと真弓や恵里には、借金があり、出かける事も、食事を探ることも出来ない彼氏。

そういう印象でしか残らないと思つから。

友達には祝福されたい。

だから、茂貴の事情は言わない。  
：此からも。

12月24日  
クリスマスイヴ

私は朝からケーキを作っている。  
料理なんてした事のない私。

本を見ながら、見よう見ま似で、精一杯作った。

クリスマスなんて関係ない。そう思っていたが、やはり私もクリスマスを感じたい。

贅沢なんてしなくていい、プレゼントも欲しくない。

でもクリスマスを茂貴と過ごしたという思い出を作りたいから。

私は冬休みだが、茂貴は仕事。  
張り切つて朝からケーキを作ったものの、会つのは夜だ。  
夜までの時間を持て余していると…  
携帯が鳴った。

広香さんだ。

今から会えないか？といつ電話だった。

茂貴と会つまで時間もかなりあるし、私はOKし、広香さんの迎えを待つた。

広香さんのバイクの後ろに跨り、向かった先は広香さんの家（実際

には達也さんの家）だった。

プレハブの部屋に入ると、中には達也さんがいた。  
広香さんと達也さんは同棲している。

家を捨て、行き場を無くしていた広香さんと出会い、それから達也さんとの生活で一緒に住んでこられるのだ。

正確には、庭に建つ六畳ほどのプレハブの部屋に住んでいる。

達也さんに挨拶し、部屋の中央にあるテーブルの元に座った。

広香さんは私の隣に、向かいのベッドには達也さんが座った。

いつもとは違う雰囲気。  
和やかな空氣ではない。

話じつて一体何？

自然と私も強張った。

そんな重苦しい空氣の中、広香さんが優しい声で言つた。

『最近どうしてた？』

私を労る様に、優しい口調だ。

確かに、最近いつも、広香さんや達也さんと会つことがなかつた。

茂貴と付き合い始めの頃は、よく4人で会つたりしていたが、最近

では全くなくなつた。

広香さんは集会で顔を会わす程度。ゆつくり話す事もない。

『茂貴と会つ以外は特に何も…』

そう。

眞琴や恵里と遊ぶ余裕も、広香さんと話す余裕もないくらい、私の時間は茂貴で埋め尽くされている。

学校が終われば、茂貴が迎えにくる。

学校に行かない日は、大抵茂貴の家に泊まつた次の日。

帰る足がない私は、仕事に行つた茂貴の帰りを日田すら待つ。

集会には茂貴の送り迎え。

集会後、メンバーと話す余裕もなく、茂貴の迎えは来る。

毎日毎日。何時。何分。何秒。私の時間は茂貴で一杯。

『茂ちゃんとは上手くやつてるんだね』  
広香さんの笑顔が何故か……悲しそう。

『はい』

広香さんが何故そんな顔で私を見るのか……。

ただこの空気を変えたくて、私は明るく返事をした。

その時、私の携帯がなつた。

着信は茂貴だ。

私は電話に出ることを躊躇つた。

広香さんのところに来ている事を言つていらない。

最近の茂貴は、会つていらない時でさえ、私の行動を把握していないと気が済まない様になつていて、

誰と何処にいくのか。

何時出て、何時帰るのか。

全ての行動を茂貴に報告しなければならない。

そう言われている訳ではないが、前に茂貴に言わす、眞理と遊んだときに凄く怒られた事があった。

その時の茂貴の怒り様は尋常ではなかつた。

部屋中暴れまくり、乱暴な口調で私を怒鳴りつけ、壁を殴り、私の後ろの壁に灰皿を投げつけた。

体の震えが止まらない……。

私は泣きながら、何度も何度も謝つた。

しかし、その声も茂貴の耳に入つていなかつたのだろう……。  
険しい顔で私に歩み寄ると、私の胸ぐらを掴んだのだ。

殴られる。

もつ今の茂貴を静める事は無理だ…。

覚悟を決め、胸ぐらを掴み怒りを露わにしる茂貴をじっと見つめた。

しかし、体の震えと涙は止まらなかつた。

怒り狂つてゐると思つたら、今度は私を強く抱き締めた。

『…「め…ん。』

…？

茂貴の顔は見えないが、泣いているのか、私に触れる体が少し震えている。

『…愛してゐ…愛してゐから…一瞬でも梓を離したくないんだ…』

茂貴の大き過ぎる愛を感じた日だった。

それと同様に、茂貴に恐怖を覚えた日でもあった。

だから、常に連絡を入れる様にしている。

あんな茂貴を見るのは嫌だから。  
茂貴が怖いから。

何より恐怖で出る涙を見せたくないから。

嬉しい涙。  
嬉しい涙。

色々な涙があるが、愛する人が恐くて流す涙は一番嫌だ。

だから今、茂貴からの電話に素直に出れない。

茂貴に何も言わず、今こいつして広香さん達とここの事を知つたら、きっと茂貴はまたあの田の様になるだろ。

今は出でて、寝ていたと後で嘘をつこつか……。

何時までも携帯は鳴り続けている。

携帯を握り締めたまま、困惑していると、広香さんが携帯を取り上げ、何の躊躇もなく通話ボタンを押した。

『茂ちやん! めえん! 今日年末の暴走の事で急遽集会開く事になつて! 梓連れ去つてきつけたんだ!』

『……梓? 梓今席離してゐるんだ。みんなの飲み物買いに行つてゐる。下端は辛いよなあ』

『茂ちやんに連絡してないって心配していた。連絡をしたり玉ひトモ  
いつて携帯置いて行つたんだー本マトモ端は辛こよー集会中電話も  
出来ないんだから』

『だから、集会終わり次第、茂ちやん所送つて行くかい』

電話を切ると、広香をさすがに向かってウインクした。

茂貴を上手く誤魔化せたんだ。

さすが広香さん。

『茂ちやん…束縛凄いでしょー。』

私は携帯を返した。

そんな事まで知つてこらんだ。

私は頷いて返した。

『梓ちやん瘦せた?』

今まで黙っていた達也さんが話した。

また頷いて返した。

『ちやんと食べてるの?』

心配そうに茂貴さんは私の顔を覗き込んだ。

その問いには頷けなかつた。

茂貴と付き合つ前、45kgであった体重が、今では40kgしかない。

体調が悪いと感じると40kgを切ることもある。達也さんが言つよつに、確かに痩せた。

と言つより、激瘦せだ。

それもそのはず、最近の私は一日一食食べれば良い方だ。

基本的に茂貴と居る時にご飯は食べない。

…お金がないから…

だから、毎日茂貴と一緒にいる私が、ご飯を食べる時間は限られている。

学校から帰り、茂貴の迎えが来るまでの間に、食事を済ます。

そのまま茂貴の家に泊まり、次の日、動く足がない私は、学校に行かず、家にも帰らず、一日中茂貴の家で茂貴の帰りを待つ。その間は勿論食事は無しだ。

茂貴が仕事から帰り、家に送つてもらえれば、要約食事にあり付ける。

しかし、送つて貰えなければ、また次の日も食事は無い。

私が家に帰るも帰らないも茂貴次第。

でも、やはり空腹を耐えるには限界がある。

茂貴と会つまでの僅かな時間に私がする事。

…彼氏と会つから念入りに化粧をする訳ではない。

…彼氏と会つから、今日は何を着ようと服を選ぶ訳でもない。

これから何時間、何十時間と食事を取れないと思い、何でもいい、お菓子でも、果物でも、その辺にある物を、お腹に入れてくれるべと食べるのだ。

そんな生活をしていて、痩せない方がおかしい。

『梓：無理してない？』

…無理？

『… そうだよ。茂貴の家の事情は俺も良く知ってる。でも、梓ちゃんがそれに付き合つ事ないよ』

子供に話しかける様な優しい声。  
一人の哀れみを持つ視線が痛い。

… そんな事言わないで。

……そんな優しい言葉をかけないで。

自分で自分の気持ちが分からなくなるよ……。

……茂貴を好きだから……

眞弓や恵里の様に、『デートをしなくても……、プレゼンツを貰えなく  
ても平気』。

愛する茂貴と一緒に入るのなら……。

自分の時間が無くても、束縛がきつても平気。

それは愛の詫だから……。

そう思っていたのに……。

なのに……。

そんな優しさを向けられると、心の中の抑えていた物が出てきちゃ  
う。

……普通のカップルみたいに、映画を見たり、手を繋いで出掛けたり  
したい。

眞弓や恵里が羨ましいと感じた事……。

……空腹の時を心配せず、お洒落にだって時間を掛けたい。

……友達とだって遊びたい。

……愛してるから……。

そう思い、隠していた思いが…

自分でも気付かない様締まっていた思いが、表へ出でてくる。

自分の気持ちが分からぬ。

何が本当の気持ちなのか。

茂貴を愛しているから…？。

恐怖感や偽善者振る事で、離れられずいるのか…？。

それさえも分からなくなる。

『俺…茂貴とは連れだし、梓ちゃんも広香の大切な仲間じゃん！俺にとつても大切だし。そんな二人をやっぱ応援したい。幸せになつて貰いたい！…けど、梓ちゃん見えてると、何故か辛いんだよ…。梓ちゃん今幸せ？』

達也さんははじつと私の返事を待つた。

広香さんは優しい視線を送つてくれている。

『幸せです！』

本音は違う。

幸せなんて感じる余裕さえない。

茂貴の為の時間。

その本の僅かな隙間に、友達との関係を繋ぎ止める時間。

毎日毎日、追われる様に過ごしているから。

でも、二人を心配させまいと嘘を付いた。

私を気遣ってくれた事だけで満足。

幸せだ。

これ以上二人に心配掛けさせたくない。

私は精一杯明るさを見せた。

私の言葉を信じたかどうかは分からない。

しかし、それ以上話しを引っ張ることはなく、私は茂貴の元へ帰つた。

二人とは、精一杯の笑顔で別れた。

茂貴は何の疑いもなく、私を迎えてくれた。

集会なんて嘘なのに…。

後ろめたい気持ちと、もう一つの自分の気持ちに気付いた事とが、混ざり合い、まともに茂貴の顔を見れない。

とりあえず、今日作ったケーキを手渡すと、茂貴は驚く程喜んだ。

「美味しい」

と何度も言い食べてくれた。

茂貴の無邪気な笑顔を見て思つた。

時々辛さを感じるのは事実。

でもやっぱ好きだ。

私はまだ頑張れる。

限界を感じるまで茂貴といよ。

そう込み上げて来るものを感じた。

年が明け、年末の紗童の暴走も無事終わった。

共に、広香さんの引退が近付いてきている。

… 広香さんが紗童を引退しても、私は紗童を続けていけるだろ？  
…。

そんな不安がある。

紗童に入つて半年。

毎日茂貴と一緒に、メンバーの子達と遊ぶ事すらない。

未だメンバーと馴染めていない。

集会に行けば、それなりにメンバーの子達と仲良くはしてる。

でも、それも広香さん有つての私だと思つから。

広香さんの居ない紗童でやつていけるだろ？  
…。

寂しさと不安で一杯。

引退式を一週間前に控えた時。

珍しい人から連絡があつた。

菜奈ちゃんだ。

紗童に入ったばかりの頃に、菜奈ちゃんと電話番号の交換はしていたが、電話が掛かって來ることもなければ、掛けることも無かつた。

菜奈ちゃんからの電話が嬉しかった。

嬉しさを隠せず、電話に出た私とは裏腹に、菜奈ちゃんの声は焦つていた。と同時に、齧えていた様に感じた。

言葉になつていない声を出し、一方的に話し続けた。

菜奈ちゃんがビリして焦つているのかは分からぬ。けど、ただ事じやない事が起つていては分かる。

『落ち着いてー。』

私の声に菜奈ちゃんはやつと黙つた。

『落ち着いて話して……』

『……広香さんが……広香さんが……』

電話の向い側で菜奈ちゃんは泣つていて分かつた。

『広香ちゃんに何かあつたのー?』

『広香ちゃんに何かあつたの……? 一体何……?』

菜奈ちゃんは泣つていて上手く話せない。

私は焦る気持ちを抑え、菜奈ちゃんが落ち着くのを待つた。

しづらしく、落ち着いたのか、菜奈ちゃんは事の経緯を話しだした。

紗童のメンバーに私と同じ年の遙と言つ奴がいる。  
遙はチームのメンバーから余り好かれていない。

はつきり言えば、嫌われている。

嫌われるには理由がある。

遙は訳も無しに喧嘩を売るのだ。  
レディース、学生、誰構わない。  
別に遙に被害を加えたから…でもない。  
ただ気に入らないという理由。

でもまあ、喧嘩をするしないは、遙の問題だから好きにすればいい。

しかし、遙の喧嘩は殴り合つたりとかいつ喧嘩ではない。

相手を威嚇する」ことが目的なだけだ。

事ある毎に紗童の名前を使つたり、広香さんの名前を使い、相手を威嚇するだけ。

そんな事を繰り返していれば、中にはやはり黙つていらない奴もいた。  
それが広香さんの耳に入り、遙の尻拭いをすべて広香さんがしてき  
たのだ。

そんな遙が何故紗童に入つたかというと、副総の翔子さんの中学の  
時の後輩で、どうしても紗童に入りたいと遙が頼み込んだそうだ。

翔子さんは遙を良い奴だからと言つて、その言葉を信じた広香さん

が紗童入りを許可したのだ。

その時の遙は、翔子さんが言つた通り、本当に良い奴だつたそうだ。しかし、紗童に入り気が大きくなつたのか、いつの間にか、今の遙に変わつてしまつたのだ。

翔子さんは、そんな風に変わつてしまつた遙を脱退させようと、何度も広香さんに言つていたが、広香さんは脱退を許さなかつた。

…いつかは分かつてくれるから。  
…遙はまだ変われる。  
…今見放したら、遙の居場所はなくなる。

そう信じていたのだ。

そんな広香さんの気持ちも知らず、また遙が問題を起こしたのだ。

でも今回は問題が大きすぎた。

遙は彼女持ちの男に手を出したのだ。

彼女持ちと知つての事だつた。

それを知つた彼女と遙は電話口で口論になつた。  
悪いのは遙。

しかし、遙は引かず

「自分は紗童のメンバーだ」

「自分に喧嘩を売る事は紗童に喧嘩を売ること。広香さんに喧嘩を

売る」とだ

いつもの様にそう言つたのだ。

そう言えれば相手は引き下がる。男は自分の物になる。  
…と。

しかし知らぬは遙だつた。

遙が手を出した男の彼女は、隣の県で、最強を語るレディースの頭  
だつたのだ。

それを知つた遙は、広香さんと翔子さんに泣き付いたのだ。

翔子さんは泣き付く遙をあつさつと見捨てた。

しかし、広香さんは遙を見捨てる事が出来ず、遙の代わりに話しを  
付けてくると出て行つたのだ。  
勿論、翔子さんは止めた。

話し合いに応じる相手ではない。一人で行くのは危険だ…と。

しかし広香さんは、翔子さんの言葉も聞かず出て行き、翔子さんは  
後を追おうとしたのだが、それから広香さんと連絡が取れなくなつ  
てしまつたのだ。

それで急遽、今から集会が開かれるという報告の電話だつた。

『後、梓ちゃんに翔子さんからの伝言で、この事を達也さんに知ら  
せてほしいって

話し終える頃には、菜奈ちゃんの声は落ち着いていた。

私に話しながら、今の状況を菜奈ちゃんなりに把握していたのだろう。

『分かった』

… 広香さんはどうなっちゃうのか。

冷静に話しを聞いたつもりだが、心中は不安で一杯。

私達は電話を切ると、自分が今出来る事をした。

不安で心臓がドキドキしてくる中、急いで達也さんに電話した。

達也さんに事の事情を説明すると、達也さんは落ち着いて状況を飲み込んだ。

電話を切り、早々に集会に向かった。

こんな自分に驚いた。

放心状態になりそうな程なのに、体は自然と動いている。

私つてこんなに強かった？

……違う。

私をそいつさせたのは広香さんだ。

只、広香さんを思つが一心。

広香さんが心配で…

少しでも広香さんの役に立ちたい。  
助けたい。

その思いが私を強くさせた。

私だけじゃない。

菜奈ちゃんも同じ。

そして今、紗童のメンバー全員が同じ思いだ。

集会場所に着くと、既に翔子さんと佳奈さんを囲み、数人のメンバーがいた。

公園にはぞろぞろと人が集まり、直ぐにメンバー全員揃つた。

一人を除いて…。

一人は今みんなが無事を願う広香さん。

そして、もう一人は、事の発端を起こした遙だ。

『梓！ 広香から連絡は？』

私を見るなり翔子さんは言った。

私には連絡が来る可能性はあると思ったのだろう。

私は首を横に振つた。

翔子さんは、肩を落とした。

唯一の望みも失つたという感じだ。

翔子さんも佳奈さんも連絡が取れない。

そして私も。

この状況で、広香さんが他のメンバーに連絡をする事もないだろう。  
…。

『…達也さんには連絡しました』

翔子さんは、その言葉に、少しの望みが持てたかの様だった。

しかし、じつする事も出来ないまま、時間がだけが過ぎていく。

広香さんと連絡もとれず、居場所も分からず、当の遙とも連絡が取れず、ただ、田田すら、待つばかりだ。

メンバー誰一人言葉を出さない。

ただ一人、翔子さんは携帯で色んな人に連絡をしている。

公園には翔子さんの焦る声だけが響いている。

もう何時間が過ぎただろう…。

一向に広香さんからの連絡はない。

その間も翔子さんは、何時間も何時間も電話をかけ続けている。

…誰か広香さんの居場所を知っている人はいないか。私達は何も出来ず、翔子さんの電話の声を聞きながら、じつとしている事しか出来ないでいる。

陽が暮れ始めた頃に集まり、今は日が変わらつとしている。

!

静まり返つた公園に私の携帯音が響いた。

翔子さん含め、メンバー全員の視線が私を指した。

電話に出てもよいのか、翔子さんの顔色を伺つた。

翔子さんは軽く頷き、私は電話に出た。

電話の相手は達也さんだ。

達也さんから告げられた言葉は余りに衝撃的で、私には荷が重すぎる……。

電話を切り、ただ呆然と立ち尽くす私に、翔子さんは電話の内容を問い合わせした。

私は、状況を呑み込めず、上手く話せない。

しかし、今達也さんから聞いたことをみんなに伝えなければならぬ。

…これが今私に与えられた役目だから。

『電話は達也さんからで…… 広香さん見つかつたつて……』

広香さんの居場所が分かり、曇つていたメンバーの顔が明かりを取り戻した。

そんなメンバーを余所に私は続けた。

『……達也さんが駆け付けたときには…… 広香さん……港で一人横たわつて……今は病院に運ばれて……まだ意識が戻らない状態だつて』

時々、詰まりそうになる声を押し出し、なんとか最後まで言ひことが出来た。

しかし、誰も口を開かない。

……時が止まつてしまつたかの様な静寂。

その時、勢い良く翔子さんは立ち上がり、走り出した。

翔子さんが何処へ向かおつとしているのか直ぐに分かつた。

『駄目だつて！』

私は叫んだ。

広香さんの元へ行かせてはならない。

翔子さんは足を止め、私を睨み付けた。

『どうしてー？』

『誰も来ちゃ駄目だつて……達也さんが……』

『何でだよー』

広香さんの居場所を探し、連絡さえとれず何時間も途方に暮れ、やつと居場所が分かつたのに、広香さんの元へ行けないと言われ、苛立ちを露わに私にぶつけた。

『広香さんの為だつて… 広香さんは今意識もない程ボロボロだから… プライドの高い広香だから、メンバーにそんな姿を見られたくないだらうつて…』

翔子さんが今すぐ広香さんの元へ飛んで行きたい気持ちは分かる。

でも、今は広香さんの気持ちは優先したい。

その気持ちは翔子さんも同じだった。  
いや、私以上に広香さんを分かつての事だった。

翔子さんは行く事を止め、メンバーに今日の解散を告げた。広香さんが見つかった以上、こうして集まつても仕方がないから。

そして、誰も広香さんの元へ行かない様にと。

### 第39話：敷きたり

広香さんが入院して早半月が過ぎ、広香さんの意識は戻り、順調に回復している。

しかし、体に負ったダメージは大きく、前の様に戻るにはまだまだ時間がかかるそうだ。

しかもまだ誰も面会を許されておらず、あの晩一体何が起こったのか詳しくは誰も知らない。

唯一今の情報といえば、次の日の夕刊に載った記事と、たまにある達也さんからの連絡だ。

夕刊に載っていると聞き、見ては見たものの、それはとても簡単なものだった。

『未成年集団リンチ。被害者重傷意識不明…』

探す事も難しい程に、何の情報にもならない小さく短いものだった。達也さんから連絡があるものの、それは広香さんの様態の報告で、あの晩の事は口にしなかった。

『あの日の事は広香自身から詫ひまで待つてほしい』

そう言われ、聞くことも出来ないでいる。

この事件の発端。遙は、あの晩をもつて沙童を脱退となつた。その決断は翔子さん直々に下したものだった。

広香さんのいない今、沙童に遙を庇う人などいなく、寸なりと遙は

沙童を去つて行つた。

広香さんや翔子さん達の引退式についても、何度も集会が開かれた後、翔子さんの意見でまとまつた。

『沙童総長の広香がいない状態で、引退式を行えない』

他のメンバーも賛成し、予定していた引退式はなくなつた。

ひつして広香さんの事やこれから沙童の事で頻繁に集会が行われたり、私は達也さんから連絡が来る度に翔子さんに報告をし、板挟み状態になつてゐる事で、茂貴と会つ回数が減つてゐる。

毎日一緒にいたのが、今は週二回会つ程度。

茂貴も今の広香さんの様態や、沙童の状態も分かつてゐる。だから、会えなくとも理解してくれてゐると思つていた。  
理解してくれていただろつ…。

しかし、茂貴の誘いを断る事が続くと茂貴は苛立ち始めた。  
しかし、その苛立ちを言葉に出す訳ではないが、私には分かつた。

電話の向ひひで微かに聞こえる茂貴の溜め息や声のトーンで。

『「めんね…』

いつも、謝り電話を切つた後、言葉とは裏腹な茂貴への思いが募つてくる。

…どうして分かつてくれないので？  
…出来る限りの時間は作つてゐるのに。

茂貴に対して、自分が冷めていくのを感じる。

しかし、茂貴余りと私は冷めた思いを隠し演じるのだ。

茂貴を好きで好きで堪らなかつたときの様に……。

茂貴の思いと、私の思いとの温度差を伝わせる様に……。

何故そうしてしまうのかは分からぬ。

少しある愛情からなのか、情だけなのか……。

茂貴が悲しむ様な厳しい言葉を掛けられない自分がいた。

\*

春の風を感じる季節、広香さんは退院し、陽も明るい時に沙童の緊急集会が開かれた。

メンバーの前に広香さんは立ち、その横には翔子さん。久々に見る姿にメンバーは湧き上がつた。

『みんな、『じめん!』

広香さんは深々と一礼した。

その姿にメンバー全員言葉を失つた。

広香さんは頭を上げると話しおつた。

『みんなには心配かけて本当に『じめん。みんなを巻き込みたくないて……。でもあれが私の思い付いた総長としての最後の役目だと思つたから』

……最後？

広香さんは翔子さんと顔を見合わせ、翔子さんは額を返した。

『今日をもつて、私は沙童を引退する』

急に告げられた

「引退」

。広香さんが退院して間もなく、まだ先の事だと思っていたが、広香さんや翔子さんの中では決めていた事なんだと分かった。メンバーの中には、戸惑いを隠せず、泣き出す子もいた。でも、私は広香さんの言葉をしつかり受け止めた。そして、大半のメンバーも私と同じ様子だ。

何時もよりも長く、走り続けた。

何時もよりも、激しくバイクは音を鳴らした。

集会場に戻ると、広香さんが次の沙童の総長を決めた。淡々と事を運んで行く中、私は広香さんの言葉など耳に入らなかつた。

広香さん有つての沙童。

広香さんが居なくなる沙童に何の思い入れもない。

広香さんの引退と共に、私の気持ちから沙童がなくなつていいくのを感じた。

そういうしている間に、あの晩の真相を語られる事なく引退式は終わり、そして何時もの集会の様に翔子さんが解散の合図を出し、それぞれ、場を後にしだした。

……？

もつと名残惜しく残つたりしないの……？帰ろうとする次期総長の菜奈ちゃんを思わず引き止めた。

『……菜奈ちゃん……』

引き止めたものの言葉が詰まつた。

「どうしてみんな帰つちゃうの」

ただこれだけの言葉なのに、言えない……。

何時も通り解散していく見慣れた風景なのに、その空気は確かに広香さん達を名残惜しみ、重いものだつたから……。

言葉は言わずとも、菜奈ちゃんは私の思いを察してくれた。

『これも沙童の敷きたりなんだよ……。』うつて何時も通り別れる……。だから……泣いても駄目……』

そういう菜奈ちゃんの田は今にも涙が零れ落ちそうな程潤んでいた。誰の田も止まらない所で沢山涙を流すのだろう……。去つて行く菜奈ちゃんの背中を眺め、広香わんを振り返る事なく私も場を後にした。

……敷きたりなんて分からな……。

しかし、沙童を愛する広香わんを、沙童の有るべき姿で、最後を飾つて欲しいから。

広香さんが心置きなく引退出るのであれば、この敷きたりに従おう……。

## 第40話：決別1

沙童の引退式も済み、梓もなんとか進級することが出来、三年になつた。

高校生活も最後だ。

みんな進学するか就職するかの分かれ道の時でもあった。

『梓は進路どうするの？』

『しないよそんなの！ 恵里は？』

『私は進学かなあ』

『そつかあ恵里賢いもんね』

恵里は私や真と学校帰りに遊びに行つたり、何よりも彼氏の為に学校さぼつたりだけど、ちゃんと勉強はしていた。いつでもサボる私と違い、恵里は考えてサボる。

『あつ真』

恵里が真の登校に気付いた。

『真』は進路どうするの？

恵里の言葉に真は即答した。

『私は就職するよー、勉強はもうしたくないし』

真弓の意見に同感だ。

私も勉強はもうしたくない。

そう私と恵里と真弓は仲良く高校生最後の年はスタートした。

その矢先……。

私は朝方茂貴に家に送つて貰つた為、眠くて今日も学校を休んでいた時、昼に恵里からメールが来た。

『真弓ムカつく！もう友達無理！』

…え？喧嘩？

『何があつたの？』

とりあえず理由を聞いてみた。

すると恵里からの返事は直ぐあつた。

「男に惚けて進学出来んの？」

恵里が怒つた訳は真弓のこの言葉だつたらしい。

そんな事、真弓が本気で言う訳はない。冗談で言つただけだつて私は分かる。

真弓は私や恵里よりも友達を大切に思つてる子だから…。そして、恵里にはこういう冗談が通じないという事も私は知つてゐる。

今私が恵里に、真弓は冗談で言つたんだよ。と言つても恵里は私が真弓を庇つたと思うだけだろう。

だから、この場は恵里の話を聞き、話を合図させた。

その日の夜、真弓からも連絡があつた。

真弓は何故恵里が怒つたのか分からず困惑っていた。

私は恵里が怒った理由を伝え、「その内恵里の機嫌も直るよ」と、その場は真弓を慰めた。

実際、このことに関しては時間が解決してくれると思った。恵里には言わなかつたが、恵里が怒る理由はくだらない事だから。しかし、なかなか時間は一人の仲を解決してくれなかつた。恵里は断固として真弓と口をきこうとしなかつた。

学校内で目立つグループに属するが、十人程いたグループの子達は高一の夏に学校を辞め、残つたのは、私、真弓、恵里だけとなつた。

私達三人は、グループ内でも特に仲が良かつた。いつも三人一緒。

しかし、性格はまるつきりバラバラだ。

真弓は友達思いのしつかり者の姉御肌。

友達が困つていれば何を放つておいても助けてくれる。

私が中絶した時もそうだつた。

彼氏と居る時間を削つて、何日も私と一緒に居てくれた。精神的に支えてくれた。

しかし、人見知りをする為なかなか友達の幅は広がらず、学校内でもグループ外の子とは話す事もない。

恵里は、彼氏に一途な子。

彼氏がないと生きていけない位男に依存する。

男と友達を天秤に掛けるまでもない。真弓とは逆に、何があつても第一に男を取る。

しかし、彼氏への一途つ振りは天下一品。

他の男には目も繰れず、自分の限界まで相手を思い続ける。

それに、恵里は人懐っこく、誰とでも話す。

しかし、恵里の中での友達。友達じゃない。という区切りがあるらしい。

私は、その場その場で行動する。

真弓の様に、友達を大切に思う事もその時次第。

私も男を優先するが、恵里の様に、純粹に相手を思い続けること

も今はない。

そんなバラバラな私達だけど友達だ。

でも私は、友達なんてこんな物だと思う。

それぞれ性格が違い、趣味も考えも違う。

でも一緒に居て楽しい。落ち着く。その気持ちで友達が成り立つと思っている。

しかし一端歯車が合わなくなると、修復は難しい。

性格が似ていれば、相手の気持ちも分かり、解決策が思い当たったかもしれない。

\* \*

『…明日も学校来てね』

真弓が縋るように私に言った。

『分かつてるよ

学校に行くと真弓と約束をした。

相変わらず恵里と真弓は口をきかない。  
真弓は仲直りをしたいのだけれど、恵里にその気はなく、なかなか  
一人の気持ちが重ならない。

『梓！お昼行こー！』

恵里は私を誘いに来た。

『うん。 真弓も行こー』

一人ポンと座る真弓を誘つた。

『…うん』

真弓は静かに席をたつた。

真弓を誘うことに関して恵里は顔色一つ変えない。

恵里は、まるで真弓が見えてないかの様に振る舞うのだ。

端から見れば相変わらず仲良い三人に見えるだろうが、実際は違つ。

会話をしているのは、私と恵里。  
横に座る真弓は黙り込んでいる。

真弓に話しを振ることが出来ない様、恵里は私に向かい話し続ける。

真弓が可哀想と思い、私は毎日学校へ通つた。

茂貴との付き合には相変わらずだけど、それでも、ビックリして家に帰り、寝ずに学校へ行くこともあった。

…明日も来てね…

真弓との約束通り。

『…ただいま』

AM・6・00

茂貴に送つてもらひ家路に着いた。

前なら茂貴の家に泊まつていた処が、今は

「約束」

の為、週末以外泊まる事はない。

この生活に茂貴はかなり不満そつだが、出席日数が足りず卒業の為と嘘を付き、無理やりにでも帰つている。

学校へ行く本当の理由を言えれば、きっと茂貴は

「俺より友達か?」

などと責め寄ると思つから、一番無難な嘘を付き続けている。

…まだ学校行くまで時間もあるし寝よ。

『少し寝るから起にして』

母に頼みベッドに寝転がつた。

寝付く瞬間も分からぬ程、眠りについたのは早かつた。

『梓。梓！梓！』

母の声だ。

『……んん……』

『梓！真弓』ひやんから電話よー。』

……真弓？

まだ朝も早い筈。

私の唯一の少ない睡眠を邪魔しないでよー。

眠りを妨げられ、機嫌を損ねたまま、眠り覚めぬまま電話に出た。

「はい」

口調で私の機嫌が悪いのが電話越しでも真弓に伝わっただろう。

「……あす……た……」

電話の向こうで真弓は泣いていた。

「どうしたの？」

言葉とは裏腹に冷たい物言いになつた。いや。朝っぱらから起こされ、睡眠を邪魔された事で、真弓に怒りさえ覚える。

「梓……学校来ないの？」

「えー？」

真弓何言つてんの？

まだ時間じゃないじゃん！

そう思い、元々朝の弱い私は、真弓に掛ける一つ一つの言葉に苛立

ちを隠しきれない。

「 もう寝だよ」

真弓の言葉に私は時計に目をやった。

時計の針は確かに午後12時を回った処だった。

まだ少ししか寝ていらない感覚で朝だと錯覚していた。

私は寝過ぎて、真弓との約束を破ってしまった。

しかし今の私は、真弓との約束よりも睡魔の方が断然上回っている。

「 うめん。今日は行けないや」

泣いている真弓に素っ気なく言い放った。

「 どうして？ 約束したじゃん学校来るつて…。今からでいいから来てよ」

真弓は必死だった。

余程、私が居ない学校生活が辛く寂しいんだろう。

その必死さが、ウザイ。

真弓の気持ちはわかる。

約束を守らなかつた私が悪い。

でも1日位いいじやん！

今まで学校へ行くことが少なかつた私が、真弓の為に毎日朝から通つてたんだよ。

茂貴が不機嫌になり私は嫌な思いをしていて、私は茂貴に嘘を付

いてまで真弓の為に毎日家に帰ってるんだよ。

1日位いいじゃん。

今まで思いもしなかつた事が次々に浮かんで、真弓をウザイく感じ  
る。

「どうあえず今日は行かないから」

そう言い、私は一方的に電話を切つた。  
とても冷たい言い方だつただろうつ…。

その日から真弓からの連絡は途絶えた。

そして、次の日真弓は学校を休んでいた。

次の日も次の日も…。

真弓の姿を見ることはなかつた。

しばらくして真弓が学校を辞めた事を担任から知らされた。

…「んな事になるなんて…

真弓はいつも私の側に居てくれた。

大好きだつた慎悟と別れ、寂しくて自分が惨めでどうしようもな  
かつた時。

中絶して心が不安定だつた時。

気付けば真弓は居てくれてた。

支えてくれた。  
守ってくれた。

頼るのはいつも私。

真弓は嫌な顔せずに私に付き合ってくれた。

そんな真弓が今回初めて私に頼ってきた。なのに、私は真弓をその時の気分だけで、冷たく投げ捨てた。

私は親友をいとも簡単に見捨てたのだ。

『恩を仇で返す』

今私の姿だ。

『もう少しで卒業なのにね…勿体無い…』

教室の何処からか聞こえてくるヒソヒソ話し。

確かに卒業を目の前にして辞めるのは勿体無い。

だが、卒業までの数ヶ月間が耐えられない程、真弓の精神的ダメージは強かつたんだと、今になつて分かる。

もしもあの日。

あの電話の日に私が遅刻でも学校へ行つていれば、状況は違つたに違ひない。

私が真弓を退学に追い込んだのだ…。

「学校を卒業したら就職する」と、放課後よく居残りし担任に相談してた真弓。

就職口もなくなってしまった。

私が真弓の人生を変えてしまったんだ。

真弓を追い込んでしまった罪悪感も、時が過ぎるにつれなくなつていった。

いつも三人で居たのに、私と恵里は真弓が居ない違和感よりも、三人が一人になつた事で、前にも増して仲良くなつた。

そして真弓が居なくなつて私の生活は元に戻つた。  
茂貴中心の生活に…。

そしてまた今日も茂貴の迎えを待つてゐる。  
その時、久しぶりの人から電話があつた。

菜奈ちゃんだった。

私が属するレディース沙童の現役の総長だ。

前総長の広香さん達の引退後、私が集会に顔を出したのは引退式の直ぐ後だけだ。

広香さんの居ない沙童に何の思いもない。

辞めようとさえ考えている。

それに、広香さん引退後、沙童を辞めるメンバーが後を絶たず、私が行つた時の集会も寂しいものだつた。

私もそれから後は、一回も集会に顔を出しておらず、菜奈ちゃんに後ろめたく感じていて、今この菜奈ちゃんからの電話に動搖している。

「…もしもし」

迷った末電話に出た。

「梓ちゃん…」

何故か、菜奈ちゃんの声は沈んでいた。

一方、私は菜奈ちゃんが怒つていない事にホッとした。  
「どうしたの?」

何食わぬ顔で聞いた。

「沙童…解散するね…」

《解散》

菜奈ちゃんが落ち込むのも無理はない。

何年と代々続いた沙童を自分の代で解散せらるのだから。

「…なんだ…」

菜奈ちゃんと同様に寂しさを表す反面、本当は冷静だった。  
ひつひつ結果になることは分かっていた様な…。

それに血ら引退を口にする前に解散になつて気が楽だつた。

「どうして?」

一様、成り行きを聞いてみたが、やはり私の思った通りだつた。

広香さん達の引退後、半数近いメンバーが引退を表明し、それでも、老舗のレディース沙童に憧れ新しく入ってくる者も居た。

しかし、長続きする者はいなかつた。

沙童を鼻に掛け問題を起こす者がいたり、描いていた沙童と違うなど理由は様々だ。

早い話し、菜奈ちゃんが沙童を纏めきれなくなつたのだ。

話し終えると私達は挨拶をし電話を切つた。  
電話を切る時の良くある普通の挨拶。  
だが、最後の挨拶でもあつた。

私にとって菜奈ちゃんは沙童のメンバーでは一番仲良くなつた子。  
でも、プライベートで遊ぶ事もなければ、沙童の事以外で連絡を取り合つ仲でもなかつた。

だから、沙童がなくなれば自然と私達の関係も終わつてしまつたのだ。  
菜奈ちゃんも思いは分からなつたが、私は、最後の思いで電話を切つた。

私が、此処まで敏感に感じるのは、きっと親友だった真弓を失つたばかりだからなのかもしねりない。

そして、私の別れはこれで终わりではなかつた。  
次の別れは、私自ら選んだ別れだ。

『俺ひり……終わらじこしよひ』

『どうして?』

『俺は梓を幸せに出来ない』

『……』

『……』

『梓、俺の事好き?』

『……うん』

『こんな俺でもいいの?』

『……うん』

行事事の様に週に一回は「こんな話」を切り出す茂貴。

私はいい加減うざがりしきてこる。

きっと茂貴は私の微妙な気持ちの変化に気付いての事だろひ。

正直、今の私の気持ちは茂貴から離れて行つてこる。

自分の気持ちも変化に気付いたのは、真尋と恵里が喧嘩し、私が毎日学校へ行き始めてから……。

私は茂貴と会う時間も削つてきた。

真弓の為…。

そう思つていたが、茂貴と会う時間が減るに連れ、私自身気が楽になつていた。

毎日ご飯が食べられて、ゆっくりお風呂に入れて、学校へ行く事で、毎日、恵里や真弓と話しが出来る。

そんな当たり前の事が出来なかつた私には、当たり前の事が癒やしだり、とても幸せだ。

そして逆に茂貴に対し、今まで当たり前だつた事が、当たり前に受け入れられなくなつていつたのだ。

そして、欲も出てきた。

世間のカップルの様にテートだつてしたい。  
イベントの日には、何処かに出掛けたり、何か何時もと違う事をして思い出を残したい。

茂貴に対し今までなかつた不満が出てきた。

正直今、茂貴の事を好きではない。

しかし、面と向かつて

「好き?」

と聞かれると

「うん」

と返事をしてしまう。

けど、それではこけないと思い、ひやんと茂貴に元気持ひを伝えよう  
と決心し、今日、今から茂貴と会つ。

『……梓』

やはり何時もの様に茂貴が話しきを切り出した。

しかし、私が頭で描いていたシーンとは全く違つ事を語つ出した  
だ。

『俺仕事辞めようと思つてゐる』

何時も通りのセリフが来ると身構えていた私は少し動搖したが、  
素直に茂貴の言葉の意味を聞いた。

『どうして?』

『今の仕事じゃ生活がやせつていけないから……』

確かに茂貴の生活を見ていたら納得だ。

『他に良い仕事あったの?』

茂貴は直ぐ答へず、私から口を反らし煙草を手に取つた。

『俺ヤクザにならうと思つてゐる』

『……』

私は何も答える事が出来ず、下を向いた。

『梓どう思つ?』

どいつもして言われても……

私はゆっくり顔を上げ茂貴を見た。

茂貴は私の方をしつかりと見ていた。

しかし私は何も言えないでいた。

私はまた俯き、沈黙が流れた。

『俺がヤクザになつても付き合つて行ける?』

茂貴は質問を変えた。

『…分かんない。でもヤクザは嫌』

私がからやつと出た言葉だった。

『それは付き合つて行けないと事?』

『その時にならないと分かんない。でも付き合つていく自信はない』

私は少し顔を上げた。

私の言つた意味が分からないのか、茂貴は寂しく困つた顔をしていた。

私も自分自身何が言いたいのか、突然の事で気持ちの整理が付いていない。

ただ、思つたままの気持ちを口に出しただけだった。

『ヤクザになつたら付き合つて行けないつて事?』

これが茂貴なりの理解の仕方だった。

『…うん』

ヤクザだから?

ただ別れたいから?

理由はどれも混ざり合つたものだつた。

ヤクザって言われてもピンとこない。

ただ私のイメージでは、決して良いものではなく、世界が全く違うものだと思っている。

かと言つて、茂貴がヤクザになる、ならない以前に茂貴とは別れを決めていた。

黙り込む私に茂貴は事の経緯を話し出した。

一週間前、茂貴は梓を送り届けた後、友人の元へ向かつた。

その友人とは茂貴の中学時代の悪友だったヨシトだ。

茂貴とヨシトは中学で知り合い、親友となり何でも一人一緒にやつてきた。

煙草。喧嘩。シンナー。女。

不良真っしぐらだった。

中学卒業後、茂貴は高校へは行かず、暴走族に入った。

ヨシトは高校へ行つたものの続かず中退。茂貴とは別の暴走族に入つた。

同じ道を進み、二人は相変わらず仲良が良かつた。

18歳のとき二人は暴走族を引退し、その時初めて二人は別の道を選んだのだ。

茂貴は引退後、それまでしていた仕事一本になつた。

ヨシトはヤクザになつたのだ。

環境の違う二人の間に初めて出来た距離。自然と遠縁になつていった。

その遠縁だつたヨシトから

「話しがある」

と久々に茂貴に連絡があつたのだ。

『単刀直入に言つ。ヤクザにならないか?』

久々に会つたヨシトの言葉だった。

『話しされかよ！俺ヤクザは遠慮しどへよ』

すんなり断つた茂貴だが、ヨシトは諦めなかつた。

『ヤクザになれば、今よりもっと楽な生活が出来るぞー。』

このヨシトの言葉で茂貴の気持ちが揺らつた。

現に、ヨシトの生活は優雅だつた。

全身ブランドで固め、煌びやかなアクセサリーを付け、財布には万札が束になつて入つっていた。

そんなヨシトの姿を見て、茂貴は自分を馬鹿らしく感じた。  
毎日朝から晩まで働いて、でも余る金処か、日々の生活も間々成らない。

それに比べヨシトは、自由気ままに過ごして、お金にも不自由せず、理想の姿に見えた。

『俺の兄弟になろうや』

ヨシトが兄貴分になる事に抵抗はあつたが、優雅な生活に変えられる物はなく、茂貴はヤクザになることを決めたのだ。

茂貴は田の前にある煌びやかな世界に田が眩み、ヤクザになる事の迷いなどなかつた。

ヤクザになつても梓は付いて来てくれる。

そう確信もあつた。

しかし、梓の返事は茂貴の予想とは全く逆だつた。

でもヤクザになるとヨシトに返事をしたし、ヨシトの組の親父で、行く行くは茂貴の親父になる人にも話しあは回つてゐる。もう後には退けない。

ヤクザになるしかない。

俺が成功し、金を持つ様になれば、ヤクザを嫌がつてゐる梓も、もしかしたら戻つて来てくれるかも知れない……。

ヤクザが嫌なだけで、俺の事は嫌な訳じやないんだから……。

『俺はもう決めたんだ……ヤクザになるつて。それが梓が嫌なら別れるしかない。でも、俺は何時でも梓を受け入れるから……俺の元に戻りたくなつたら戻つてきてほしい』

茂貴は真剣だつた。

『……うん』

私はまだ茂貴の話しひを聞き領いた。

私は結局自分の気持ちを茂貴に伝える事はなかつた。

理由はひとつであれ、別れという結果は梓が望んだ通りになつた。

そして、茂貴は梓の本心など知らず、最後まで梓を信じ、別れという結論を出した。

二人の最後の日となつて、二人とも涙を流し、別れた。

梓の涙は情だつた。

茂貴との別れには何の未練もない。

茂貴の涙は愛情だつた。

愛する梓と別れ、梓も自分を愛してると信じ、お互に愛し合つてゐるに別れる悲しさ。自分が選んだ道のせいで、梓を悲しませてしまつたという後悔が入り混じつていた。

お互い気持ちがすれ違つたままの最後だつた。

## 第42話：汚い自分

親友だった真弓が居なくなつたのに、私は今、寂しさなど感じていない。

そして、何時も一緒にいた茂貴にも何の未練もない。愛情は無くなつても、あれ程一緒にいたのだから情ぐらいはあってもいい筈だし、寂しさもあつてもいい筈。

それが今の中には一切ない。

それどころか、本心は清々している。

親友だった真弓。  
愛した茂貴。

私は一人を利用しただけだったのかも知れない。  
実際、結果的にそうなのだ。

真弓は不良っぽく目立つ存在で、真弓と仲良くなつた事で、学校での今の私の地位がある。

茂貴は沙童レイディースの前総長である広香さんの知り合いで、彼氏の親友でもあつた。

そのお陰で、沙童での地位も築けた。

学校での地位も掴み、沙童が解散した今、一人は必要なくなつたのだ。

だから私は簡単に一人を切り捨てられたのだと思つ。

私はふとこうこう事を考えるが、自分のことが狡く汚く思え、直ぐに頭からかき消してしまう。

その癖、私は寂しがり屋で常に誰かに側に居て欲しいと思つ。

彼氏が居れば、友達なんか居なくともいいと思い、彼氏が居なければ友達は良いと思う。わがまま野郎だ。

自分でも分かっている。

この自分のわがままさが一人を無くしてしまった原因なんだ。

そして気付けば私の周りには誰も居なくなつていた。

でも、唯一残つた人がいた。恵里だ。

恵里もまた友達を作る事が苦手で、真弓が居なくなり、三人から二人になつた事で、私達の仲は一段と縮まつた。

そして幸いと言えば恵里に悪いが、私が茂貴と別れた後、恵里も長年付き合つた彼と別れたのだ。

私達は今まで居た人が居なくなり、一人になつたという寂しさがあり、この同じ状況が私と恵里を一段と仲良くさせた。

私と恵里は常に行動を共にした。

一人が別々に居る時が返つて不自然な位に行つたり。

恵里と一緒に買い物

恵里と一緒に男達と遊んだり。

恵里とは男に関しての感覚が良く似ているから、楽だった。  
気になる男が居れば、お互いを気にする事なく行けばいい。そんな感覚だ。

ナンパをされて恵里と合図をし、その時次第で付いていき、私が恵里、どちらか気に入れば、そのまま男と抜け出す事もあった。

その内、恵里に彼氏が出来た。

ナンパで知り合い、恵里の一眼惚れだった。  
名前は翔次しょうじ 私達と同じ年の17歳だ。  
高校には行っておらず、鳶職をしていた。

恵里は彼氏が出来ると、一途な子。

一人で、男漁りをする事もなくなり、ナンパについて行くこともなくなつた。

でも、私も翔次と顔見知りとあり、翔次の友達も交えて良く遊び、彼氏が出来た恵里と私の関係は変わることはなかつた。

私がから見ても翔次は見た目も格好良く、女が寄つてくる雰囲気を持つていた。

実際かなり遊んでいたみたいだ。

恵里はそんな翔次が心配でならない。

翔次も恵里を好きだが、翔次よりも恵里の思いの方が大きく、恵里は翔次を離さないと必死になっていた。

しかし、恋愛にはバランスが大切で、翔次と恵里はそのバランスが合わなくなってきた。

恵里の気持ちが重すぎ、翔次が別れを告げた。

恵里は泣いて縋つたが、これもまた男と女。

どちらかが、無理だと言えば付き合いは成り立たない。

恵里は別れを受け入れるしかなかつた。

別れても翔次を引きずる恵里の心境は痛い程分かる。

好きな相手を無くし、寂しい筈。

一人で居れば崩れ落ちてしまいそうな筈。

そんな恵里の気持ちを察し、私は出来る限りの時間恵里と過ごした。

そしてまた恵里を追い込む出来事があつた。

翔次と別れ2ヶ月が経とうとする時。私達は何時ものファミレスで暇を潰していた。

『…生理が遅れてる』

突然の恵里の告白。

『え？ どれ位？』

『もう直ぐ三週間…』

恵里はもう妊娠を確定している様子に見えた。

『三週間だつたら間違いかもよ。ただ遅れてるだけかも…』

私は恵里の妊娠を否定した。

否定したかった。

年頃の私達。

普段からセックスの話しはしていた。

恵里が翔次とやるとき、避妊をしていない事も、中で出す事も知つていた。

だから、生理が遅れてると言われて『妊娠』の一文字が直ぐよぎつた。

否定をしながらも、私の気持ちは妊娠で一杯だ。

妊娠していないで欲しいという私の願望だつた。だつて余りに惨いから…。

妊娠した処で、産めないのは恵里も分かつてゐる筈。

『中絶』

中絶の辛さは実際体験して痛い程分かる。

それに、時期が悪い。

付き合つてゐる時ならまだしも、別れてから分かるなんて…。

『検査した?』

恵里は泣きそうな顔で首を横に振った。

『なら検査してみようよ』

私達はその足で妊娠検査薬を買いに行つた。

ファミレスに戻り、恵里はトイレに向かつた。

『梓…居てね』

恵里は頬りなく呟いた。私は恵里に付き添つた。

結果は陽性。

もう間違いじゃないかといふ言葉など出ない。

恵里は席に戻り、持つていたハンドタオルで顔を覆い時々肩を揺らし、声を殺し泣いている。

私は胸が締め付けられる思いで、掛ける言葉も見当たらず、泣く恵里を見つめる事しか出来ない。

妊娠していたのは事実。

恵里が泣いている間にもお腹の子は着実に育つている。  
今此処で立ち止まつてはいられない。

『…翔次の子だよね?』

私は話を切り出した。

恵里は俯き顔を隠したまま頷いた。

『恵里はどうしたいの?』

『…産みたい』

私には意外な返事だつた。

恵里は進学を考え目標を持つて今行動している。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だつた。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だつた。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だつた。

私が妊娠したとき。産むなんて考えた事なかつた。

妊娠した事実を受け止める事も真間ならぬ間に事が終わつてしまつ

た感じだった。

私に比べ恵里は強かつた。

さつきまで泣いていたかと思えば、涙を拭い顔を上げた。

『私産みたい！翔次の子を産みたい！』

恵里の決意は固かつた。

『今から翔次に言つね！電話するから梓一緒にいて…』

強い口調ながらもやはり恵里に不安はあった。

私自身十分に味わつた辛さだけど、結婚 妊娠なら喜びだらう。

しかし、妊娠を先にしてしまつたら喜びよりも不安が大きい。

この先どうなるのか。

増してや高校生。

相手に対し、親に対し、自分に来る反応が怖い。  
もし中絶になるのなら、恐怖心さえある。

自分自身が招いた事と言わればそれまでだが、前を向き現実を受け止める恵里を私は凄いと思った。

恵里を応援したくなつた。何も出来ないけど、前向きな恵里を見守りたいと思った。

## 第43話： 恵里

恵里は妊娠が分かり、私の居る前で翔次に電話をした。

翔次の返事は、とりあえず病院で診てもらえという事だった。

次の日、産婦人科に行く恵里に付き添つた。

診察が終わり、待合室で待つ私の元へ恵里は戻ってきた。

妊娠は確かだつた。

医師に妊娠を告げられた処で、私達に驚きはなかつた。

前もつて検査薬をしていたし、その時点で私達の中では妊娠は確定だつた。

妊娠が間違いかもしけないという期待を持つて来た訳ではない。

翔次に証明する為に来たのだ。

『これから先生の話があるの』

恵里はそう言つと、また診察場へと行つた。

ゆつくりと話せる場所がいいと、病院の帰りにファミレスへ寄つた。

医師と何を話したのか、気になつたが恵里が話し出すまで私から

は聞かないでおいたと思つた。

『先生にね…』

恵里は話し出した。

『先生が、相手の人と良く相談して早めに結果を出しなさいって』

恵里は冷静だつた。

『なら早く翔次と話さないとね』

私も冷静に答えた。

それから恵里は翔次に病院へ行つた事を電話で伝え、翔次の元へ向かつた。

私は恵里に何も言つてあげれなかつた。

励ます言葉も、アドバイスも何も言わなかつた。

産んだ方がいい…。  
中絶した方がいい…。

そんな事は何も思わなかつたから。

ただ、どちらにしろ恵里が後悔する結果にはなつて欲しくない。

その為には、恵里が思つままに進んで欲しいと思つた。

心からそう思つ。

一方で、私は自分が不思議になつた。

友達（真弓）を裏切り、利用した私がいれば、また友達（恵里）を労る私がいる。

どちらが本当の私なのか自分でも不思議な程分からない。

そして恵里から電話があつたのは、夜中の1時だった。

電話の向こうで恵里は泣いていた。

隠すことも、我慢する事もなく、泣いてた。

私は察した。

恵里が望んだ結果にはならなかつたんだと…。

『中絶』といつ言葉が頭をよぎるのと同時に、私が実際味わつた光景が蘇つた。

少し落ち着きを戻した恵里は声を引きつりながらも話しだした。

『翔次は…駄目だつて…産んじゃいけないつて…恵里はこれから大学にだつて行くんだろ？将来の夢もある。今は産むときじゃないつて…そんな事綺麗言だよ…』

私もそう思つ。

翔次の言つてる事は綺麗言。

今恵里は必死で現実と向き合っている。  
そんな時に綺麗言で誤魔化さないで欲しい。  
自分を守ってる様にしか聞こえない。

…男つてずるい。

翔次より何倍何十倍も恵里は辛いのに。

それから一週間後、恵里は中絶した。

毎日泣いて、傷付いて、翔次を恨んだ事もあつた恵里。  
しかし、恵里は今でも翔次を好きだと言つた。

そして、私はそんな恵里を止める事などしなかつた。

翔次の事は最低だと思う。

そう思うのは、翔次が恵里を妊娠させたからでもない。  
中絶させたからでもない。

恵里が辛い時に、自分を正当化し、辛さから逃げた翔次が私は嫌だ  
つたからだ。

でも恵里の気持ちは分かる。

自分がどんな辛い思いをしても、相手を最低だと思つても相手を嫌  
いになれない時もある。

私が慎悟を愛した様に…。

そして慎悟と別れてからも、別れて一年が経つた今も、あれ程愛し

た人はいない。

そして何より、好きな人を友達に分かつてもらいたい。

私が今翔次の事を軽蔑する様な事を言えば、恵里は傷付き一度と私は翔次の話をしなくなるだろう。

友達に彼氏の話をしたり、好きな人の相談をしたり。

それって凄く必要な事だと思うから。

『好きな人を我慢しなくていいよ。好きなら向かって行けばいい。良くても悪くても自分が選んだ道じやん！後悔はないと思うよ』

私は恵里にそう告げた。

そして、自分自身にも…。

## 第44話：蘇る恋

中絶後も恵里は変わらず翔次を想い続け、隠すこともなくその想いを翔次に伝え続けている。

しかし未だ恵里の想いは届かない。

翔次からしたら恵里は都合の良い女だ。

翔次に『会おう』と言われれば、恵里は会いたいのだから勿論会いにいくが、付き合っていた頃とはまるで違った。

会えば、翔次は恵里の体を求め、恵里は好きだから翔次を受け入れる。

翔次の欲情が満たされれば、恵里の存在は必要とされなくなる。

誰が見ても恵里が利用されているのは明らかだつた。

『惚れた方が負け。』

恵里を見るとよく分かつた。

そして、恵里自身も分かつていた。

翔次が他の女とも会つてゐる事も。

恵里は全て知つた上だった。

好きだから…。

体を求めるだけでもいい。

翔次に愛はなくとも、体を重ねてる間は幸せだから。  
体だけの関係でも繋がつていれば、いつかは戻つてくるかもしれない。

みんなは恵里を『遊ばれてるのに』『分かんないのかなあ？バカ  
じゃん』とか言う。

でも恵里はちゃんと考えて、後悔ない恋愛をしてる。

恵里の行動でどういう結果になるのかは分からぬけど、好きな  
人に夢中で向かつて行く恵里を私は素敵だと思う。

そして季節も変わり、私達の高校生活も終わりに近づいた。

恵里は希望大学への入学が決まった。

私は進学も就職もする気はないから呑気なもの。

恵里の様に夢中になれる人は現れないが、男は死ぬ事なくいる。

その場の雰囲気や寂しさを紛らわす為に付き合つたり、抱かれたり。

誰かと居れば寂しさは感じないから。

けど、夜になると寂しさや虚しさや不安が溢れてくる。

私は夜が嫌い。

昼間の雑音も消え、沈と静まり返った部屋に一人でいると、自分が世間から取り残されてる様な気が押し寄せる。

今私は何も満たされていない。

心底好きな相手でもない人と付き合っていても、一人になれば寂しい。

セックスで甘い一時を送つても最後は虚しい。

私は贅沢なのかな？

そんな私に恵里は決まって言つ。

『彼氏が居て想ってくれる人が居て、梓は幸せだよ。私なんて一人追い駆けてるだけなんだよ』

先が見えず、追いかけている恵里からしたらそう思つらしい。

好きなのが分からない相手とただ時間を潰す様に過ごす私からしたら、自分をさらけ出し突き進む恵里が羨ましい。

そんな事を考えていると、決まって思い出すのが慎悟だった。

あの時の私は、慎悟が全てだった。

何の理屈も考えず、慎悟自身を愛してた。

慎悟と別れ、何人の男と出会ったが、勿論慎悟の様な男は居なかつた。

慎悟を愛した様に愛せる男も居なかつた。

今の恵里を見ると、私には後悔ばかり。

あの時、どうしてもつと素直になれなかつたのか…。

自分の気持ちをくだらない維持の為に抑え付けたのか…。

あの時…。あの時…。

思ひ出せば出す程、慎悟が蘇りあの時に戻りたくなる。

慎悟に会いたくなる。

別れてからも、慎悟は私の中にずっと在り続けている。

常に男を比べる基準は慎悟だった。

慎悟に勝る男は居なかつた。

慎悟と歩いた街を歩けば、会えるんじやないかと期待していた。

慎悟を探す自分がいた。

私は気付かない振りをしていただけだった。本当は知ってる。

私はまだ慎悟を想つている。

## 第45話：下らないプライド

胸の中の奥の奥に仕舞つておいた慎悟を出してきてしまい、慎悟の事ばかりを考える様になつた。

いつも私を守つてくれた慎悟。

慎悟の大きな暖かい手。

無邪気な笑顔。

思い出すのは楽しかつ日々ばかり。

私の中で慎悟は膨らみ、私はあの頃に完全に戻つていた。  
あの頃と同じ位に今も慎悟を愛してゐる。  
あの頃の様に毎日慎悟の事を考えている。

ただあの頃と違つのは、慎悟がいない事。

私は止まらない気持ちを電話で恵里に伝えた。

『梓何してんのー?』

『何つて…』

私の気持ちを知るなり恵里は強く答えた。

『好きなら迷つてないでいかなきやー。』

私は初めから二つ三つ言つて欲しくて恵里に電話したのだと気が付いた。

誰かに背中を押して欲しくて…。

恵里の後押しで私はいける。

慎悟に向かう気持ちの覚悟はできた。

そして次の段階へ進もうとした時気付いた。

『私…慎悟の連絡先知らない…』

あの頃からだった。

私が気持ちの整理を付ける時、まず初めに必ず相手の連絡先を消去する癖は。

『それなら私が調べてあげる! 元彼なら慎悟さんの連絡先知つてるかも』

そうだ。恵里の元彼は慎悟と同じ高校で知り合いだつたんだ。

恵里にお願いし、私は恵里からの連絡を待つた。

恵里は仕事が早い。

30分と経たない間に慎悟の電話番号は私の元へきた。

『頑張ってね梓。また報告してよね』

恵里はそう言つと早々に電話を切つた。

恵里と電話を切り、携帯を持ったまま色々考えた。

何から話そうか。

慎悟の対応はどんな感じか。

色々考えたが、私の中で慎悟が私を拒むことはないと思っている。

恵里には自信なさげに言つたが、本当の処慎悟を振り向かせる自信があった。

確実にあの頃よりも可愛くなってるだろ？ あの頃よりは大人になってる。

あの頃より男を知つたし、どうすれば自分を可愛く魅せれるかも、それなりに分かつてゐつもり。

決心し通話ボタンを押した。

プルルル… プルルル…

呼び出し音が鳴った途端、あれ程考えた頭の中は真っ白になつた。

プルルル… プルルル…

あれ？

長く続いた呼び出し音は留守番サービスに変わった。

慎悟は電話に出なかつた。

電話を切り、携帯を置いた瞬間。夢から現実に覚めた感覚だった。

慎悟と会える。

あの頃の様に慎悟と一緒にいたい。

など、勝手に想像を膨らませ一人舞い上がつていただけだった。

実際には、今慎悟がどうこう生活をしているのか、彼女はいるのか、何も知らない。

そう冷めながらも、私はショックなど感じていない。

今は電話に出れなかつたんだ。後でかけ直してくれる筈。など、自分の都合の言によつて解釈している。

私が慎悟を思い出す様に慎悟も私を思つてくれているに違いない。

慎悟なら私の番号だつて覚えてる筈。

きっと慎悟からの連絡はある。

自分でも嫌になる位プラス思考だ。

しかし私には自信があつた。

それは何故かといつと、今まで私の誘いを断る男がいなかつたから。

狙つた獲物は必ず墮つる。

それが私をここまで自信過剰にしたのだ。

しかし、慎悟から連絡が来る事はなかった。

そして私は一度と連絡しなかった。

恵里は、『連絡しなよ』って言つけど、自分が傷付くのが怖く連絡出来なかつた。

かけ直して来ないと言つ事は、私を拒んだから…。

私はそう解釈した。

そして理由はもう一つ。

しつこい女だと慎悟に嫌われたくない。

追いかける女より追われる女がいい。

又しても私の下らないプライドが顔を出し、下らないプライドを捨てる事が出来なかつた。

そしてまた、意地やプライドで慎悟を胸の奥へ仕舞い込んだ。

## 第46話：卒業

等々卒業の日が来た。

当日卒業式が行われる体育館へみんなが向かう中、私は足を止め校舎を眺めた。

今のが居るのは全てがここからスタートしたんだ。

今まで校舎など眺めた事もなかつたけど、今日で最後だと思ひと校舎を通じて色々な出来事が蘇る。

嫌で嫌で仕方が無かつたこの学校が今の私を作り上げた原点だつた。

入学当初、少女漫画の様な学校生活や恋愛を描いてたつけ。

地味な私が、綺麗になりたい。可愛く思われたい。と外見に意識したのも此処からだつた。

少女漫画とはかけ離れたが、彼氏も出来、初体験もした。

辛い事もあつたけど、此処（学校）へこれば仲間がいた。振り返ればそれ程嫌な所では無かつた様に思つ。

『梓！』

恵里に呼ばれ我に帰えり、恵里と一緒に体育館へ向かつた。

式も無事終わり、教室では友との別れを惜しみ、カメラのフラッシュの嵐だった。

卒業アルバムの最初のページに友達からの寄せ書きを集めたり、みんなそれぞれだ。

『梓！私の書いて』

恵里が卒業アルバムを開き、私に手渡した。

『私のにも書いて』

私も同じ様に渡した。

私は恵里のアルバムに。

恵里は私のアルバムにメッセージを書いた。

ふと隣で同じ様に寄せ書きをしている子のアルバムを覗けば、そこには何十人からのメッセージがびっしり書いてあつた。

私のアルバムには恵里からのメッセージだけ。

私はそれで良かつた。  
んんん。それが良い。

私と恵里は自分達以外の子のメッセージは書かせなかつた。

「のアルバムは私の最高の宝物だ。

私は家事手伝いという名前で、学校という縛りがなくなり今まで以上に遊び歩いた。

真面目に高校生活を過ごした人から見れば有り得ないだろうが、私なりに学校は窮屈だつた。

ともに、歯止めでもあつた。

学校へ通う事がなくなつた今、24時間が私の時間。

家に帰る必要は私の中になくなつた。

恵里は大学生活がスタートし、高校を卒業しても生活は何ら変わることはなかつた。

変わつた事といえば、恵里のスカートがミニから膝丈になり、明るかつた髪が暗くなり、外見は進化した。

私はそれが不安だつた。

私達は今までとは違ひ環境が全く違う。  
この事で、恵里との間に距離が出来るんじやないか…。

今までがそうだつたから。

今まで、その時その時で私の周りの人人が変わってきた。

幾ら仲良くしていて、親友と思っていても環境の変化で簡単に終わってしまう。

恵里ともやうなるんじゃないか。。

私は不安の一方で、傷付くのが怖く恵里との終わりを先に覚悟していた。

しかし、恵里は変わらず私を必要としてくれた。

学校がある為、前程時間が合ひ訳にはいかないが、私達の仲は変わらなかつた。

環境が違つても変わらず友達で居れる相手（恵里）を私は本当の親友だと確信した。

私は高校生活でかなり人の輪が広がったが、友達と呼べる人は恵里だけだ。

それに比べ相変わらず私から男が絶える事はなかつた。  
知り合いの紹介。ナンパ。

相手は誰でも良かつた。  
自分を好きでいてくれる人なら。  
付き合つて別れて、また他の人と付き合い…。  
一人の人と1ヶ月もてばいい方だ。

そんな私にまた新たな出会いがきた。

聰士。<sup>さとし</sup> 私より二つ上で二十歳のフリーターだ。

聰士は私が今まで出会つた男とは違つたタイプだつた。

今まで見たからにヤンキータイプだつたが、聰士はB系スタイルのお洒落な人だ。

出会いは簡単。

恵里と街をぶらついていた時に、恵里の元彼と会い、その時居合わせたのが聰士だつた。

その場の流れでアドレスを交換し、一人で会つ事になり、会つたその日に告られ付き合う事になつた。

私には良くある展開だ。

聰士は私と同じで仕事をしておらず、生活パターンは良く似ていた。

夕方頃目が覚め、夜になると友達と集合する。

私の場合相手は恵里だけだが、聰士はいつも5、6人でたむろっている。

恵里は学生だから次の日の事も考え遊ぶ時間も限られている。

聰士の友達も仕事をしている子がいる為時間は限られる。

しかし、夕方起きる私達は寝れず朝までDVDを見たりで、結局寝付くのは朝だった。

私達は付き合ってから時間を有効に使う事が出来た。

夜は恵里と会い、遊び終わった夜中聰士の家へと向かった。聰士も同じだった。

今まで一人で暇を潰していた時間を一緒に過ごす事で、友達との付き合いも彼氏彼女の付き合いも上手く保てた。

聰士の事が好きだと聞かれれば好きだと答えるが、聰士に対し燃え上がる様な気持ちはない。

ただ聰士と一緒にいて気が楽だった。

変に干渉しないし、けれど私に十分愛を感じさせてくれるから。

私は知らない間に他の男との連絡を遮っていた。

それは聰士を第一に考えているからなのかな…。

良く分からぬが、今は誰よりも聰士と居る事が楽しい。

聰士と付き合い2週間が経った時、いつもの様に恵里と別れた後、聰士の家へと向かった。

聰士の両親は聰士が中学の時に離婚し、それから聰士は父との家に住んでいる。

私の父親もそうだが、聰士の父も聰士に干渉せず、私が夜中に訪れても何も言わない。

それ処か、姿すら見たことがない。

時間が遅すぎる事もあるだらうが…。

『おお』

部屋はテレビの明かりのみで、聰士はベットに横になつた状態で私に手をくれた。

私はソファーに座つた。

そこで見覚えのある物を目にした。

そして、その物は昨日まではなかつた物だった。

『何これ』

物を手に取り、聰士に聞いた。

聞かなくてもこれが何なのかは分かつていた。

『知らない?』

聰士は何の疑いもなく答えた。

『知ってるよ』

聰士は私と同じ種類の人間だと直感し、私は正直に答えた。

何をする物なのか、何の為にあるのか。

私がかつて使用した物だから。

私が手に持つた物はパイプだった。

世間で麻薬だと言われている葉を詰めて吸う物だ。

『やつてるの?』

聰士からどうこいつ答えが返つてくるかは分かる。

やつていても聰士を軽蔑したりする気持ちはなかつた。

『たまにね』

軽蔑どころか、驚きもなかつた。

聰士が連んでいる仲間がやつていてる事は恵里から聞いていたし、その中に居て聰士がやつていてない方が不思議だと思っていた。

『梓はいつこいつ事した事は?』

『あるよ』

聰士が一切薬物に手を出さない人間だとしたら、あつと私は『やつていい』と嘘をついただろ。

聰士も驚いた様子はなかつた。

私の返事を聞いて聰士は、ベットから体を起こし私の隣に腰掛けた。

私の手からパイプを取り、何も言わず葉っぱを詰め出し煙草で一服する様に吸い始めた。

深く煙を吐き出した後、何も言わずパイプを私に差し出した。

私は戸惑う事なくパイプを受け取り、聰士の唾液が少し付いた吸い口に口を付け吸い込んだ。

一度と薬物には手を出さないと決めていたけど、葉っぱに対して

は余り抵抗がなかつた。

私と聰士は微笑み見つめ合ひ、抱き合つた。

後から聞いた話しだと、聰士は私の様な女は初めてだとか。

聰士が薬物をして軽蔑しない女。

薬物をする女。

好きな女に隠す事なく、共有出来る事が嬉しいと聰士は言つた。

それから毎日ではないが、聰士が葉っぱを吸う時は、断ることなく共に私も吸つた。

それは徐々に時と場所を選ばなくなつていった。

昼間でも車の中で吸い、夜は外で吸う時もあつた。

葉っぱは他の物に比べ自分の意識がまだある為、恐怖心はなかつた。

しかし、葉っぱを吸う度に高哉を思い出した。

孤独に耐えられず、お互に気持ちを寄せ合つた高哉。

薬物で寂しさを紛らわした私達。

そして私が初めて薬物に手を出した時に居た高哉。

自分を止められなくなつた高哉。止めることが出来なかつた私。

シャブに狂つた最後の高哉の姿が頭から離れない。

あの日から高哉とは会つていない。  
連絡もしていないし来ることもない。

あれから高哉は何をしているのか。

高哉はどうなつたのか。

私は薬物に手を出す度に今の高哉が気になり始めた。

高哉を心配してか…。

シャブに狂つた人間がどうなつたかの好奇心からか…。

今の高哉が知りたい。

## 第48話：衝撃の真実

私は気の向くままに一軒の家の前に立っていた。  
毎日毎日我が家に帰る様に通い詰めた高哉の家。

一年が経つた今でもその道のりははつきりと覚えている。

此処まで何も考えず来たものの私は戸惑った。

インターフォンを押し、今更玄関から入つたらいいのか…。  
昔の様に高哉の部屋へずかずかと上がつていいのか…。

迷った挙げ句、さすがに玄関からは避けた。

裏へと周り高哉の部屋の方へと向かつた。

「の家には高哉と高哉の義母の一人だけ。  
義母に出会さない様願つた。

しかし家に人の気配は感じず、慣れ親しんだ高哉の部屋の前に着いた。

高哉が留守の事は分かつた。

でも私は窓に手を当てた。

…「の窓を玄関の様に入りしていたなあ。

あの頃を思い出し、窓を開けた。鍵は掛かっておらず、少し躊躇つた後部屋に足を踏み入れた。

昔は誰が居なくても平氣で入った部屋に、初めて緊張感があつた。

それ程時は過ぎ、私と高哉の距離が出来、お互い変わってしまった証拠だ。

誰も居ない部屋に座り込んだ。

ベット、テレビ、吸い殻の溜まつた灰皿。

変わつていな部屋の構図に私はあの頃にタイムスリップした。

高哉はいつものベットに寝転がつて漫画を読んでいた。

決してお世辞でも綺麗とは言えないこの床に、遊び疲れ知らない間に寝てしまつていた私。

そして最後に見た高哉は此処に座つていた。

楽しい思い出も必ず最後の高哉が出てくる。

私はここに来た意味を思い出し、立ち上がり押し入れへと向かつた。

高哉は必ずこの押し入れに締まつていた。

ラベルを破がしたベットボトルにシンナーを入れ、何本と並べてあ

つた。

葉っぱもパイプも…  
注射器もシャブも…

「の中に無ければ、高哉は今新しい道を見つけた筈。

あれば、高哉はまだあの頃に居る。

全でが無くなつていて欲しい。

私は押し入れを開けた。

ゆつくり田を開き、押し入れの中を見て私はほっとし、腰を抜かしその場に座り込んだ。

全でがなかつた。

あるのは山済みにされた本。アルバム。

私は今日ここに来て良かつた。

高哉を最後にみたあの田からずっと胸にあつたつつかえがスッと溶けていくのを感じた。

私は立ち上がり、高哉にサヨナラをした。

一度と会つとの無い高哉に…。

私と高哉が過ごした時は、お互い支え合つと言つながらただ薬物に溺れた時だった。

高哉とはそういひで会つて別れ。

今になつて会つた処で、お互ひ思い出は薬物。

このまま静かな別れがいいんだ。

現在、聰士と葉っぱを吸つてゐる私が何、だらうと笑みが零れた。  
窓から出ようとしたとき車のエンジン音がこの家の前で止まつた。

私は体が固まつてしまつた。

だつて留守中の他人の家に勝手に入り込んでゐるんだから。

そして足音がこの部屋に近付いて来る。

私の心臓はバクバクと音が外まで聞こえそうだ。

でも、高哉が帰つてきたのかも……。

それなら私がここに居ても許してくれるよね。

等々外の人物がこの窓を開けた。

『……つ』

私は目の前に居る人物に驚いた。

窓を開けたのは、広香さんだつた。

『……梓？』

広香さんも驚きを隠せない。

『……広香さん』

『……ひいたの？』 と あなた所で』

広香さんは戻を取り直し、部屋に上がった。

私も帰る足を戻し、広香さんとテーブルを挟み向かい合って座った。

煙草をくわえると広香さんは部屋を見渡した。

『梓元気でした？』

『……はい』

広香さんは引退以来連絡が減り、沙童解散と茂貴との別れ以来、少なかつた連絡は途絶えていた。

『茂貴さんとも別れたんでしょう？』

『はい。……達也さんから？』

『うん。 大体の話しさ聞いた。 茂ちゃんも頑張つてるよ』

『… そうですか』

何事にも真つ直ぐで、偽りのない広香さんに、茂貴との別れ時の偽りだけの自分を見透かされない様に必死だった。

広香さんの前では、高哉を大切に思つた梓。身を削つてでも茂貴に付いて行く、あの頃の梓でいたかった。

『とひるで此処で何してたの?』

『あ…あの…高哉を思い出して…』

『心配してくれてたんだ』

広香さんの優しい綺麗な笑顔は健在だ。この笑顔を向けられると今でも嬉しい。

『実は…ずっと氣になつてて…あの日の高哉がずっと頭から離れない…高哉を一人置き去りにして…あれから高哉がどうなつたのか気になつてたけど、来る勇気がなくて…』

誰にも言えなかつた思いを広香さんに話していくと、涙が込み上げて來た。

広香さんは黙つて私の話しさ聞いてくれている。

『でもつ 今日此処に来て良かつた。高哉は今何しているんですか?』

私は涙を拭つた。

『梓知らないの?』

『……』

広香さんの表情が変わつた。

何だろ?う…。

でも広香さんの顔を見れば良い事でないのは分かる。

『高哉ね。半年前に死んだよ』

『はつ……』

喉が詰まつた様に言葉が出ない。

それ処か理解出来ない。

高哉が死んだ?

何で?何でなの?何があつたの?

『伝えよつとしたけど、梓に連絡取れなくて』

私は携帯を変えていた事を後悔した。

愕然とする私を余所に広香さんは話しを続けた。

『梓が高哉を見た最後の日からも高哉はシャブを止められなかつたん

だ…。出来る限りは高哉の所に来てたけど、仕事や沙童の事で高哉を監視することは限られてたんだ』

広香さんは一呼吸おき、煙草に火をつけた。

『シャブ漬けになつた人間は酷いよ…醜い。知性や理性全て失うんだよな。高哉は幻覚に追われ道路に飛び出したんだ。車に跳ねられ即死だつた』

『うう……』

いつも簡単に出来る涙がこんな時に出ない。

狂つてしまいそうな自分を止める」と一杯だ。

『だからもう高哉を想つのは止めな！高哉に拘り、自分を責めるのはよしな！梓はあれで正解だつたよ。あのまま高哉と居たら梓も高哉と同じ田に合つてた。高哉自身が招いた結果だよ』

『広香さんの言つことはいつも正しい。

私も広香さんの様に割り切れたらしいといつも思わされる。

『梓は今何してるの？』

『……』

唐突な問いに気持ちの切り替えが出来ない。

『まあ何してもいいか!』

広香さんは無理に明るく振る舞つてゐる。

『でもね梓。何をしてても自分の想いを大切にするんだよー。自分の気持ちを曲げちゃいけない。見失っちゃいけない。負けちゃいけないよ』

広香さんは達也さんと来月結婚するらしい。

そしてお腹の中には今小さな命が宿つてゐる。

そして高哉も義母も居なくなつたこの家に住むそ�だ。

またお邪魔しますと広香さんに別れを告げ、家を後にした。

## 第49話：就職

高哉の死を知つて愕然となつたが、私の生活は何ら変わる事はなかつた。

聰士が葉っぱをしようと吸い、昼間は寝ていて、夜になれば出掛け、夜中は聰士と過ごした。

初めは自由な時間を手に入れ、一日中遊び満喫した生活を送れ満足していたが、次第に只、ダラダラした生活になり、自覚も出てきた。

『私そろそろ働こうかな』

ふと聰士に言つてみた。

今の生活に嫌気が差したこともあるが、自由な時間と自由なお金とが釣り合わなくなってきたからだ。

『そうだな……俺もそろそろ職探さないとな』

その日から私達の職探しが始まった。

求人誌を持ち帰り、二人黙々と読んでいた。

でも、探すのは私の仕事ばかり……。

聰士はまだ働く気はないみたいだ。

『梓……』

『……ん?』

『 いろんなのどひへ。『ンベーのアルバイト』

『 ん~…時給安いから嫌』

『 じゃあ、フアミレスのウエイトレス』

『 ん~時間的に無理』

『 シラップ店員とかは?』

『 嫌』

『 こんな感じで何も決まらない。』

『 働く気はあるもののどの職にも魅力を感じず、踏み出せない。』

『 あつ~!聰士これなんかどひつ?時給3千円で20時出勤だって!』

『 梓: それってお水じゃん』

『 驚目かなあ…』

『 俺的に嫌。やって欲しくない』

『 … もう』

聰士には諦めて見せたが、私の中でお水の仕事に決まった。

全てが理想的だった。

時給の良さ。

夜型の生活の私にぴったりの時間帯。

そして、何より華がある。

しかし、聰士が反対している事もあり、積極的に前に進めない。それに、沢山ありすぎて何処の店にするかも決まらない。

そこで私のずる賢い頭が働き出した。

プルルル…プルルル…

私はある人に電話した。

私が高校時代に行き交った交友の一いつ上の先輩。

「はあーい」

先輩は明るく電話に出た。

「先輩。私仕事探しているんですけど、なかなか良いのがなくて…。何処か良いところ知らないですか?」

先輩はお水の仕事をしており、私はこうじて先輩の紹介でお水の世界へと飛び込むことになった。

『私今日面接行つてくるね』

そつ聴士に告げた。

『何処の?』

『居酒屋』

聴士に嘘を付いた。

正直に言えば、許して貰えない。でもお水の世界に魅力を感じてる。

私も引けない。

『そつか良かつたじやん』

聴士は疑う事なく見送つてくれた。

面接なんて名ばかり。

有つて無いようなものだった。

聴士も私の働き先が決まつた事を喜んでくれた。

こうして3ヶ月という短く長い私のニート生活が幕を閉じた。

## 第50話：スタート

私。梓18歳。

就職先も決まり、キャバ嬢としての新生活がスタートしました。

私の考えは此処でも甘く、キャバ嬢の仕事も楽ではなかった。

初対面の男性への接客。

半端無い気遣い。

どれも今まで無かつた事だけど、私は苦痛よりもやりがいを感じた。

今まで向上してきた自分を綺麗にする事。

自分を綺麗に見せる事。

男性を振り向かす喜び。

お金を儲けながら、この意識を高めていく事が出来るのは、お水の他には検討もつかない。

しかしその裏には、人間の汚い部分が行き交いしていた。

誰もがNO・1を目指し争う。

全ては金と女のプライドだ。

私はそんな世界も好き。

上辺だけの付き合いで、心底が知れない付き合いよりも、この世界では言わずとも誰もが持つ貪欲さ丸見えの付き合いの方が楽だ。

そして、私もNO・1を目指したい一人だ。

いや、必ずなる。

私は見る見る夜の世界の虜になつた。

そして目標を見つけた私は一人の男に頼らなくとも満たされていた。

聰士と会つ時間は減り、連絡さえも遮り、聰士からの連絡は途絶えた。

後悔はない。

自ら選んだ道だから。

今の私に聰士は必要ない。

メリットのない男は要らない。

1ヶ月としない内に、徐々に固定客が付きだした。

男性客との気持ちの駆け引きが楽しくてしおりがなかつた。

私はこの時はっきりと分かつた。

聰士との別れは正解だつた。

彼氏が居れば、今の私の向上心はなかつただろう。

## 第51話：仕事と恋

水商売を始め半年が過ぎた頃には、見事に私の金銭感覚は変わっていた。

今まで欲しくても戸惑い、買えなかつた洋服も何の躊躇もなく買える。

憧れだつたブランド品も客が持つて来てくれる。

それに男は腐る程毎日見てるし、ウザイ程言ひ寄つてくる。とは言つても、この場をちゃんと理解してゐる。

本気で私を口説ひつとしているのか…。

場の雰囲気で言つてゐるのか…。

毎日何十人といつ男と会話ををしていれば、それぐらいは分かる。

念願の一人暮らしも始め、私は今欲しかつた物を全て手に入れた。しかし仕事が終われば、華やかな夜の世界から一転、勿論誰も居ない部屋に帰るのだ。

初めは寂しさなんて感じなかつたのに、徐々に仕事に慣れて行くに連れ、人恋しくなつてきた。

仕事の疲れを癒やして欲しい…。

営業じゃなく、男性と電話したい。

誰かに

「お帰り」

「お疲れ」

と声を掛けて欲しい。

お水の世界に飛び込み半年。

男を切らした事のない私が半年間一人で過ごしてきた。

勿論セックスもしていない。

言葉じゃなく、キスで愛を感じたり。

手を触れ合い守られると感じたり。

セックスをして、愛情を確かめ合い存在を感じたり。

『彼氏欲しいなあ』

ふと恵里に漏らした。

『客で良い人いないの？私からしたら出会いが沢山って感じだけど』

今もまだ恵里は翔次を思い続けている。

でも翔次を見れば恵里と寄りを戻す事がないのは明白だ。

恵里も分かつて、翔次を忘れ様とコンパに行き出会いを求めるが、なかなか良い相手が現れない。

それに、偶に翔次に誘われると会いたいものだから遂行つてしまい、誘われるが仮セックスをして、この温もりを離したくないと翔次を吹つ切れないでいる。

恵里は、常に男性と関わる事が仕事の私が羨ましいと冗談言つ。

しかし、私は違う。

恵里が言つよな、仕事で出会いを求めてはいない。

仕事には私なりのプライドといつか、ポリシーを持つてている。

客は客。

彼氏は彼氏。

客に惚れたら負け。

中には客と付き合つたり、客と寝たりする子もいるが、私の中では御法度だ。

客と付き合えれば、その客が店に来る事はなくなるだらう。それにお金を出してまで自分の彼女を指名しないだらう。

付き合つた時点で客が一人減つてしまつ。

寝てしまえば、客は最終目的を果たし満足してしまい、それも客を減らす事となる。

密はどうしたら自分の女になるか、どうにかして墜とそうと店に足を運び女の子を指名する。

墜ちそうで墜ちない。

手が届きそうで届かない。

そう言つ少し高嶺の花で居る事が、密を惹きつける魅力だと私は思つてゐる。

だから私が密と付き合つなんて曠でもない。

そんな時、昔の男友達から連絡が有つた。

私が男を取つ替え引つ替えしている時に付き合つた男の一人だ。

『梓久しぶりい』

『久しぶり』

『最近何してんの?』

『今はキャバ嬢やつてる』

『まじいつー?』

相変わらず軽いテンション。  
昔からこの軽さは嫌だった。

『梓今彼氏居るの?』

『居ないよ。誰か紹介して』

『良かつた。俺友達に女紹介してって言われてて。丁度良かつたよ』

『え?』

社交辞令で言つたつもりが、本当に紹介の話になつちやつた。

そんな事で昔の男に男を紹介してもらひ事になり、仕事が休みの  
今日会うことになつた。

待ち合せの居酒屋には既に居た。

『どうもー。』

男は隣に座る様手を指した。

男の名は中条浩一。

同じ年だ。

背は低めだが、濃い顔の男前だ。

『今晩は』

私は席に座つた。

こんな処で私の仕事が役に立つとは思わなかつた。

仕事柄、初対面の人と話す事に戸惑いも感じず、相手に話しを合わせ、店なら普通だろうが外に出れば此だけで好印象を与えるだろう。

『同じ年と言う事もあり会話は弾み私も心地良くお酒が喉を通った。

『そろそろ出るか？』

『そうだね』

時計の針は11時を指そろとしていた。

夜型の私としては、もう帰るのかと残念だが、初対面で帰りたくないと言うのは軽く見られると思い、浩一に従つた。

『まだ時間大丈夫？』

『うん』

待つてましたと言いたい気持ちを抑え、敢えて冷静に答えた。

『俺見たいロバロあるんだけど、一緒に見てくれない？』

『良いよ』

即答だった。

店を出た後ほろ酔いの私達は一人暮らしの浩一のアパートへ向かつた。

「ルームの片付けられた…」といふか余計な物がない部屋だ。

見えている物は、テレビにベッド。それに灰皿と立て鏡。

全て地べたに置かれていた。

浩一はベッドに座りテレビを付けた。

取り敢えず私は入り口に近いフローリングに座った。

浩一は見たいと言つていたDVDを付け、私達はテレビに夢中になり会話はなかつた。

『梓ちゃん…』

『ん?』

思つた以上にテレビに夢中になり話し掛けた浩一に皿をやる事が出来ない。

『… いっちゃんいで』

その言葉にやつと我に帰つた。

『… いん』

そつと浩一の隣に座つた。  
嫌じやないから。

『俺と付き合ひて』

空気の様に自然で、言葉の意味を理解するまでに間が掛かった。  
その言葉に恥ずかしさを覚えた。

男性に恥じらいを感じたのは何年振りだろ？。

この感じ新鮮だ。

## 第52話：仕事と恋（終）

浩一のストレートな告白を受け入れた。

私が半年間彼氏を作らなかつたのには訳があつた。

周りのお水の子達を見ていると、彼氏がお水の仕事を嫌がつているとか、彼氏には内緒にしているとかが大半だ。

今私はこの仕事を第一に考えたい。

辞めうなんて言う人は、最初から論外だ。  
増して内緒でするには限界がある。

内緒でするくらいなら私はお水を辞める。

私の仕事に対する情熱は自分でも驚く程だ。

浩一は私の仕事も分かつて付き合つてと言つんだから、仕事への支障は無い筈。

これが浩一の告白を受けた理由だ。

『マジでいいの?』

浩一は私がOKした事を驚き喜んだ。

私も嬉しい。

浩一の事はこれから知つて行けばいいし、何より彼氏が出来た喜びが大きい。

浩一の顔は私に近づき、私もそつとキスをした。

『俺マジ嬉しい…』

額を付けながら小さく呟いた。

私は素直な笑顔を返した。

私と付き合つた事をこんなにも喜んで貰えるなんて女として最高の気分だ。

そしてまた唇を重ね、今度は熱いキス。

浩一に服を脱がされ、付き合つた晩に体を重ねた。

それから毎日仕事が終われば浩一のアパートを訪れた。

最初の晩に合い鍵を渡され

『仕事が終わつたら何時でもいいから来て』

と言われた。

1時に閉店した後、店の女の子や客とのafterを楽しんでいたが、今は即帰りだ。

浩一が私に会いたいと思つ様に私も浩一と会いたい。

次の日が仕事でも浩一は私の帰りを起きて待つて居てくれる。

浩一は疲れて眠い筈なのに、ベッドの中でずっと私の話を聞いてくれる。

何時も会うのは夜中で、昼間の仕事をしている浩一とは何処も行けないが、浩一と過ごす数時間が私の癒やしだ。

しかし、それも長くは続かなかつた。

私は客の a f t e r の誘いを断り続ける訳にもいがず、そのまま浩一のアパートに着いたのはAM・3時を回つていた。

部屋に入ると浩一は既に寝ていた。

『当たり前か…』

私は起こさない様そつと布団に忍び込んだ。

『俺ら一緒に住まない?』

そう浩一が言ひ出したのは、珍しくお互い仕事の休みが合つた昼間だった。

『……』

私は答えることが出来ない。

返事は決まつてゐる。

「一緒に住めない」

この言葉をどうやって言えれば浩一を傷付けずに言えるか言葉を探していった。

『俺、毎日一緒に居るのには居ないみたいじゃん』

確かに。

お互い会話をなく寝顔を見る毎日が続いている。

『一緒に住めば僅かな時間でも一緒に居ると思つただよ』

真っ直ぐに向けられる浩一の視線から逃げれない。

『今は…駄目。『めん』』

『何で?..』

直ぐ言い返された。

『今同棲しても浩一が嫌な思いをするだけだよ。密からの電話だって毎日聞く羽目になるんだよ』

『俺はそれでもいいよ…』

言葉とは裏腹、浩一の顔は曇り声が戸惑つてゐる。

『私は嫌なの。浩一にはそつと見つ姿見せたくないの。私は今の関係でいたい』

私も口が達者になつたものだ。

『…分かつた』

浩一は渋々納得した。

浩一の私への想いはちゃんと伝わっていた。

私達の生活は相変わらずすれ違ひ。

けど、浩一は一度だつて私の仕事に文句を言わなかつた。

私と浩一の付き合いは寝顔の付き合い。

私が浩一のアパートへ行く頃には浩一は寝ていて、浩一が朝起きた時私は深い眠りに付いていた。

私は満足だつた。

浩一の元へ帰れて、浩一と一緒に寝て、浩一に想つてもうえて。

会話の無い分浩一の事は理解出来ていなが、それも私は有りだと思つた。

偶に休みが合ひ、一緒に居る時間が常に新鮮だつた。

しかし満足してたのは私だけ。

『梓はもっと俺と居たいとか思わないの？』

浩一が珍しく起きて居たと思ったら、仕事帰りの私を迎えた第一声がこれだった。

『急に何？』

私はお酒が入っている事を良い事に煽つてこの場を流そうとした。

『はあ～疲れた』

私はベッドに倒れ込み寝る体勢に入った。

『梓。ちゃんと聞いて』

浩一は布団を捲り上げた。

…ああウザイ。

単にそう思った。

私は昔からこういつの真面目というか、深刻な話しさは苦手で嫌い。

『だから何？』

体を起こし、思つた以上にきつゝ言葉が出た。

浩一が一瞬顔を強ばらせたのを見逃さなかつた。

…浩一がつまらぬ。

私は今の付き合いで満足しているのに…。  
最近田を合わせば『俺の事好き?』の連発。

嫌いなら一緒に居なさいて！

浩一が今の付き合いで不満がある事は知ってる。

けど、付き合いで方を変えようとするのなら、今度は私が満足しなくなる。

それなら私に浩一はいらない。

惚れたが負け

その通りだと思つ。

お互ひが満足する付き合いでなんてない。

結局はどうやらかが我慢するのだ。

それは惚れた方。

浩一が今が嫌なら別れたつていい。

私は今の生活全てを失いたくないからそれも仕方がないと思えるから。

だから、私も嫌になつたら別れる。

そんな簡単な事なのに……。

『俺は梓が好きだから。一緒に居たいって思つ詫……』

浩一は延々と自分の思いを話している。

私は壁にもたれ髪の毛を見ながらクルクルと回し、偶に相槌を打つた。

しかし、浩一の言葉は私には届かなかった。

既に浩一を想うバロメーターはゼロに達していたから。

その場は浩一に会わせ話しを終わらせた。

共に、私の中で浩一は消えた。

私は珍しく朝早く起き、部屋にある私物を全て鞄に入れた。テーブルに合意鍵を置き、そっと立ち上がり眠る浩一を横目にアパートを出た。

1ヶ月と3日の付き合いでだった。

寝顔の付き合い。

浩一とちゃんと向き合つた事……無かつたなあ。

浩一の好きな物。嫌いな物。私は何も知らない。

とようなり。

情も愛情もない。

私が浩一を見る心は無だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5542a/>

---

小さな出会い。 本当の居場所

2010年10月11日12時41分発行